静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第148集

恒武東覚遺跡

平成11・14・15年度（一）浜松袋井線地方特定道路改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００４

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第148集

恒武東覚遺跡

平成11・14・15年度（一）浜松袋井線地方特定道路改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００４

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

近年、浜松市恒武町、笠井町付近では、開発に伴う発掘調査が増えている。そして、奈良時代から平安時代にかけての硯や墨書土器といった文字の存在を示す資料、動物形の土製品や赤く彩られた土器、ミニチュア土器といった、祭祀が行われたことを示す資料が多く出土している。硯や墨書土器は、文字を読み書きできる集団がいたことを示すものであり、これは官人の存在をうかがわせる貴重な資料である。そして、祭祀関連の遺物が多量に発見されることは、上流階級の主導による祭祀が行われたことを示す資料である。これらの成果から、この近くに古代の官衙があったらしいと言われてきた。

この度、研究所では、県道浜松袋井線の改築工事に伴って、恒武東覚遺跡を２次にわたって調査した。細長い調査区となったため、遺跡の一部を明らかにしたに過ぎないが、今回の調査でも、これまでの調査と同様に、官衙の存在をうかがわせる重要な発見があった。１次調査では大溝を調査し、奈良時代の墨書土器や丹塗り土器、動物形土製品やミニチュア土器などが多く出土した。２次調査でも、丹塗り土器や動物形土製品、ミニチュア土器が出土し、さらに掘立柱建物跡を検出した。これらの成果から、この近くに古代の官衙があった可能性が一段と高まったと言うことができる。

これ以外にも、古墳時代後期の竪穴住居跡が発見され、７世紀の後半から集落が作られていたことが明らかになった。

今回の調査は、市街地での発掘調査であり、調査のために道路を迂回させるなど、周辺の皆様には大変な迷惑をおかけすることとなった。それでも滞りなく調査を終了できたことは、地元住民の理解と協力なしには考えられなかったことである。厚く御礼申上げたい。

静岡県浜松土木事務所、静岡県教育委員会、浜松市教育委員会をはじめとする関係諸機関には、現地調査、整理作業を通じて、大変お世話になった。この場を借りて厚く御礼申上げる。また、住宅に囲まれた細長い調査区では、夏は大変な暑さとなった。その中で調査に尽力いただいた作業員の皆様、整理作業では、根気のいる作業に従事してくださった作業員の皆様にも感謝申し上げる。

平成16年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長　斎藤　忠

例　言

1　本書は、静岡県浜松市恒武町字東覚にある恒武東覚遺跡１次及び２次の発掘調査報告書である。

2　調査は、（一）浜松袋井線地方特定道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県浜松土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査した。

3　平成11年11月から平成12年3月まで１次調査、平成15年2月から10月まで２次調査を実施した。
資料整理は、平成15年7月から平成16年3月まで実施した。

4　調査体制は下記のとおりである。
平成11年度（現地調査）
所長　斎藤忠　副所長　山下晃　常務理事兼総務部長　伊藤友雄　総務課長　杉木敏雄
総務係長　田中雅代
調査研究部長　佐藤達雄　調査研究部次長　佐野五十三　調査研究二課長　遠藤喜和
調査研究員　佐原哲之　溝口彰啓
平成14年度（現地調査）
所長　斎藤忠　副所長　飯田英夫　常務理事兼総務部長　粂田徳幸　総務課長　本杉昭一
総務部副主任　鈴木訓生
調査研究部長　山本昇平　調査研究部次長　栗野克巳　佐野五十三　調査研究四課長　足立順司
調査研究員　小川和彦　岡部貴之　富樫孝志
平成15年度（現地調査、資料整理）
所長　斎藤忠　副所長　飯田英夫　常務理事　粂田徳幸　総務部次長兼総務課長　鎌田英巳
総務部副主任　鈴木訓生
調査研究部長　山本昇平　調査研究部次長　栗野克巳　佐野五十三　調査研究三課長　足立順司
調査研究員　鈴木秀樹　富樫孝志

5　本書に使用した遺物写真図版は、すべて財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所職員が撮影した。

6　基準点測量、基準杭打設、遺構図のトレース、遺物の実測・トレースを（株）フジヤマに委託した。

7　本書は、調査研究員の富樫孝志が執筆した。

8　本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

9　発掘調査に関する資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

凡　例

1　調査区全域に10m方眼のグリッドを設定し、東西ラインをアルファベット、南北ラインをアラビア数字で表記した。

2　グリッドは、国土座標第Ⅷ系を使用した。そのため、本書で使用する方位は、国土座標の方位である。
また、平成11年度に設定した測量成果を使用しているため、日本測地系による測量成果である。

3　遺構名称は、下記の略号を使用する。
ＳＨ・・・掘立柱建物跡　ＳＢ・・・竪穴住居跡　ＳＤ・・・溝状遺構　ＳＦ・・・土坑
ＳＸ・・・性格不明遺構　ＳＥ・・・井戸　ＳＲ・・・自然流路

4　遺構番号はすべて新しい番号に変更してある。新旧の対応表は65ページ以降に掲載した。

目　次

序
例言
凡例
目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　周辺での発掘調査…… 1

第Ⅱ章　位置と環境
　第１節　地理的環境…… 1
　第２節　歴史的環境…… 4

第Ⅲ章　調査の方法と経過
　第１節　調査の方法…… 5
　第２節　調査の経過
　　１　１次調査…… 5
　　２　２次調査…… 7
　　３　整理作業…… 7
　第３節　基本土層…… 7

第Ⅳ章　調査成果
　第１節　成果の概要…… 9
　第２節　古墳時代の遺構と遺物……15
　第３節　奈良・平安時代の遺構と遺物……17
　第４節　鎌倉時代以降の遺構と遺物……55
　第５節　その他の出土遺物……63

第Ⅴ章　まとめ……64

挿図目次

第　１　図　調査地点位置図…… 3
第　２　図　周辺遺跡分布図…… 6
第　３　図　グリッド配置図…… 8
第　４　図　基本土層柱状図……10
第　５　図　遺構分布図１……11、12
第　６　図　遺構分布図２……13、14
第　７　図　SB401実測図……15
第　８　図　SB402・403実測図……17

第 9 図　SB402出土遺物……18
第 10 図　SB301実測図……19
第 11 図　SB301出土遺物……20
第 12 図　SR215・216断面図……21
第 13 図　SR215・216実測図……22
第 14 図　SR215下層部実測図……23
第 15 図　SR215出土遺物……24
第 16 図　1区南壁断面図……25
第 17 図　SH201実測図……26
第 18 図　SH301実測図……27
第 19 図　SB302実測図……28
第 20 図　SB302出土遺物１……29
第 21 図　SB302出土遺物２……30
第 22 図　SB303・304・305実測図……31
第 23 図　SB303・304・305出土遺物……32
第 24 図　SE301実測図……33
第 25 図　４区北壁断面図……34
第 26 図　SD326実測図……35
第 27 図　SD326出土遺物……36
第 28 図　SD222実測図……37
第 29 図　SD222他断面図……37
第 30 図　SR202・203・204断面図……39
第 31 図　SR202遺物出土状況・SR203実測図……40
第 32 図　SR202出土遺物……41
第 33 図　SR203・204出土遺物……42
第 34 図　SR213実測図……43、44
第 35 図　SR213断面図……45
第 36 図　SR213出土遺物１……46
第 37 図　SR213出土遺物２……47
第 38 図　SR213出土遺物３……48
第 39 図　SR213出土遺物４……49
第 40 図　SR213出土遺物５……50
第 41 図　SR213出土遺物６……51
第 42 図　SR213出土遺物７……52
第 43 図　その他の遺構出土遺物１……53
第 44 図　その他の遺構出土遺物２……54
第 45 図　中世以降の遺構分布図……55
第 46 図　SE1・SF1・SX1実測図……56
第 47 図　SF208・209実測図、その他の遺構断面図１……57
第 48 図　その他の遺構断面図２……58
第 49 図　SD1・SE1出土遺物……59

第 50 図　SR215・216・その他の遺構出土遺物……60
第 51 図　包含層出土遺物 1 ……61
第 52 図　包含層出土遺物 2 ……62

挿表目次

表 1　周辺遺跡の調査歴……2
表 2　検出遺構一覧……65
表 3　遺物観察表……69

図版目次

図版 1　恒武遺跡群周辺地形
図版 2　２次調査２区奈良・平安時代面全景
図版 3　土層断面
図版 4　SD326遺物出土状況
図版 5　SD326出土遺物
図版 6　SR213出土遺物
図版 7　SR213出土墨書土器
SB302出土遺物
図版 8　SR202～SR204出土遺物
図版 9　掘立柱建物跡SH201
掘立柱建物跡SH301
図版10　SE301井戸枠検出状況
SE301完掘状況
図版11　SB402・403全体写真
SB402竈内遺物出土状況
図版12　SB301全体写真
SB301遺物出土状況
図版13　SB302全体写真
SB302遺物出土状況
図版14　２次調査３区奈良・平安時代面全景
SR202内遺物出土状況
図版15　１次調査２区奈良・平安時代面全景
図版16　１次調査１区検出小規模溝群
SR213全景
図版17　SR213遺物出土状況 1
SR213遺物出土状況 2
図版18　SE1全景
SE1遺物出土状況
図版19　２次調査１区全景
SR223全景
図版20　SR220～222全景
２次調査１区遺物出土状況
図版21　SR215出土遺物 1
SR215出土遺物 2
図版22　SB301出土遺物
SB302出土遺物
図版23　SR213出土須恵器
図版24　SR213出土土師器
図版25　古墳時代後期出土遺物 1
図版26　古墳時代後期出土遺物 2
図版27　SB303～305、SR202出土遺物
図版28　SD326出土遺物
図版29　SR213出土遺物 1
図版30　SR213出土遺物 2
図版31　SR213出土遺物 3
図版32　SR213出土遺物４、SR203、204出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

平成９年、天竜川を渡る「かささぎ大橋」が完成したことにより、浜松市から磐田市、袋井市に至る幹線道路として、県道浜松袋井線の改築工事の計画が具体化した。ここでは、浜松市内にかかる部分の調査経過を書く。

浜松土木事務所は、静岡県教育委員会文化課（以下、文化課とする）からの事業計画の照会を受け、県道浜松袋井線道路改築工事の計画を回答した。工事は、周知の埋蔵文化財包蔵地にはかかっていなかったものの、恒武遺跡群と社口遺跡の間にかかっており、遺跡が存在する可能性があると考えられた。そのため、浜松土木事務所と文化課が協議し、試掘･確認調査をすることとなった。そして、平成9年10月、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が試掘･確認調査を行った結果、恒武遺跡群と社口遺跡の間をつなぐように、奈良・平安時代～近世の遺跡があることが判明した。これにより、平成11年、恒武東覚遺跡が新規に登録され、本調査を行うことになった。本調査は、浜松土木事務所の依頼を文化課が受け、文化課が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下、埋文研とする。）に委託して行った。

現地調査は、「静岡県埋蔵文化財保護事務に関する規則」（静岡県教育委員会規則第15号　平成12年３月22日）に基づき、本道のうち、遺跡が工事の影響を受ける部分と道路の拡幅部分を調査し、歩道部分と、本道でも遺跡の上に30cm以上の保護層を確保できる部分は調査域からはずした。

第２節　周辺での発掘調査

近年、浜松環状線関連の調査が進み、恒武町、笠井町内で発掘調査が増えている。調査地点が散在していることや、当研究所と浜松市教育委員会が、地点ごとに分けて調査しているため、調査場所と調査主体を表１と第1図に整理した。今回の調査はそのうちの恒武東覚遺跡1次調査と２次調査に当たる。

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

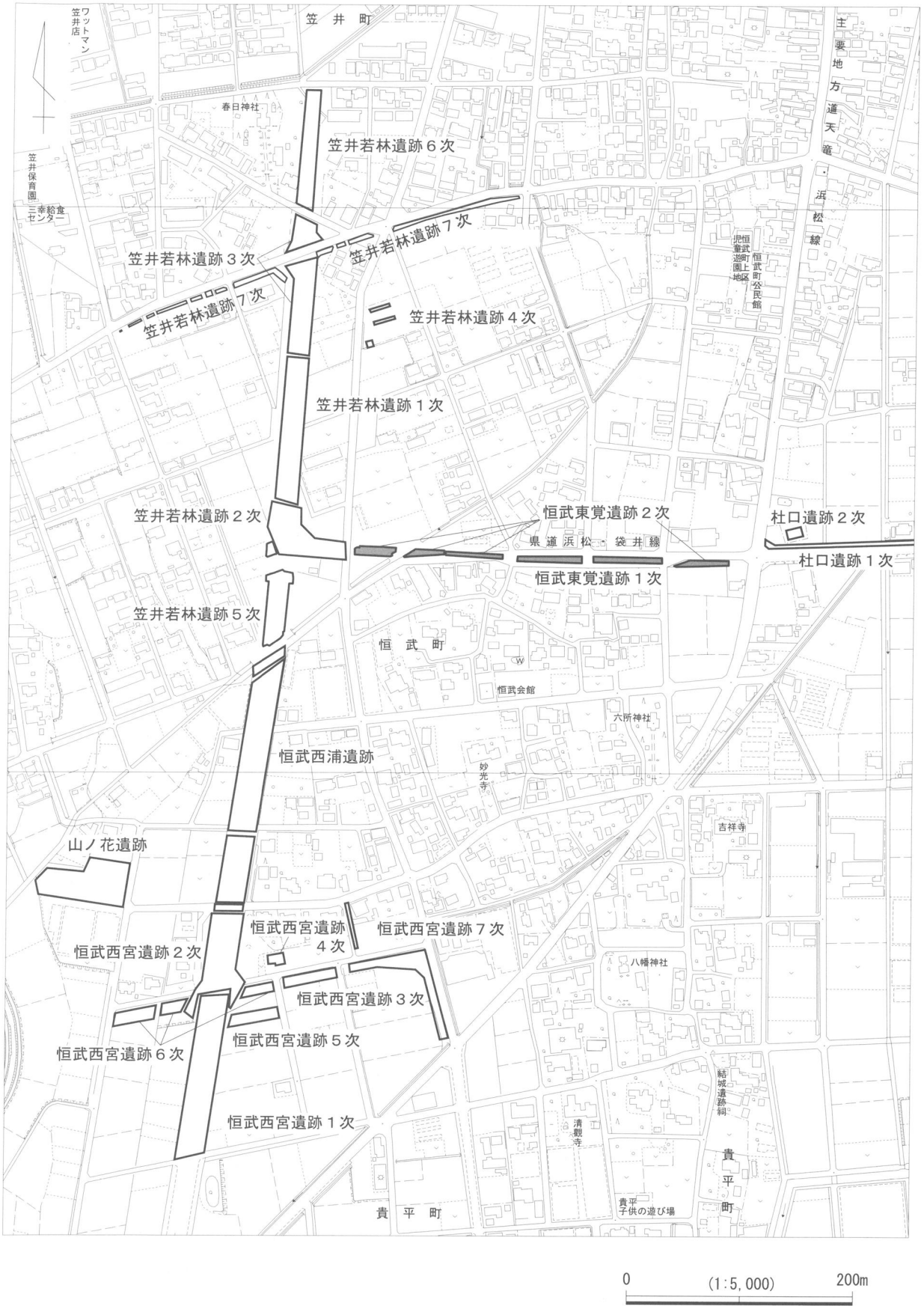
恒武東覚遺跡は、東名高速道路浜松インターの北東約１km、天竜川の西岸で、浜松市から浜北市に向う主要地方道天竜浜松線（通称笠井街道）の西側にある。地形的には、天竜川が運搬した堆積物が形成した沖積平野（天竜川平野）である。

天竜川は、長野県の諏訪湖から山間部を流れ、静岡県の天竜市二俣付近で平野部に出ると、三方原台地と磐田原台地の間に多量の土砂を堆積させ、扇状地に似た平野を作っている。この平野は南に向かって緩やかに傾斜し、恒武東覚遺跡のあたりから南は平坦に近くなり、海に至る。

天竜川は、古来より磐田原台地と三方原台地の間で氾濫を繰り返し、「暴れ天竜」の異名をとる。洪水の記録は、古くは『続日本紀』にあり、和銅8年（715年）の地震により堤防が決壊し、洪水が起こったことや天平宝字5年（761年）にも堤防が決壊し、洪水になったことが記されている。当時の天竜川は、麁玉河（あらたまがわ）と呼ばれており、今よりも西側、現在の安間川のあたりを流れていたと考えられている。以来、昭和20年の洪水まで、天竜川は平野部で洪水を繰り返してきた。現在は治水事業により、堤防が作られて流路が1本になっているが、堤防の間でいくつもの細かい流路に枝分かれしている。そして、増水の度に流路の枝分かれが変わっているのが見られる。堤防が作られる以前は、三方原台地と磐田原台地の間で、このような増水のたびに流路が変わるという状況を繰り返していたのであろう。そのため、沖積平野の旧地形は、第２図のように微高地と流路が入り組んだ複雑な地形となっており、旧地形の復元は容易ではないものの、安定した微高地は存在していたようで、その微高地上に遺跡が残っている。

表1　周辺遺跡の調査歴

遺跡名・調査次	所在地	調査期間	時代	調査主体	文献
蛭子森古墳	豊町	1962.3～4	古墳	浜松市教委	浜松市教育委員会 1995『浜松市指定文化財－古墳－』
笠井下組	笠井町	1994.1	奈良	浜松市教委	浜松市教育委員会 1995『笠井町下組遺跡』
御殿山	笠井町	2000.5	鎌倉	浜松市教委	(財) 浜松市文化協会 2000『御殿山遺跡』
八ツ面	笠井町	2001.5	古墳	浜松市教委	(財) 浜松市文化協会 2001『八ツ面遺跡』
笠井若林１次（Ⅰ区）	笠井町	1998.10～1999.3	奈良 鎌倉	埋文研	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002『恒武西宮遺跡Ⅱ　笠井若林遺跡』
笠井若林２次（Ⅱ区）	笠井町	1999.7～10	奈良 平安 戦国	埋文研	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002『恒武西宮遺跡Ⅱ　笠井若林遺跡』
笠井若林３次（Ⅲ区）	笠井町	2000.4～11	奈良～戦国	埋文研	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002『恒武西宮遺跡Ⅱ　笠井若林遺跡』
笠井若林４次	笠井町	2000.5	平安	浜松市教委	(財) 浜松市文化協会 2000『笠井若林遺跡４次』
笠井若林５次	笠井町	2002.4～5 2002.10～12	奈良・平安	埋文研	2004 年度報告予定
笠井若林６次	笠井町	2002.6～9 2003.1～2	奈良・平安	埋文研	2004 年度報告予定
笠井若林７次	笠井町	2002.7～8	奈良・平安	浜松市教委	(財) 浜松市文化協会 2003『笠井若林遺跡７次』
社口１次（確認調査）	恒武町	1983.2	古墳・奈良	埋文研	(財) 駿府博物館付属静岡県埋蔵文化財調査研究所 1983『社口遺跡』
社口２次	恒武町	1993.11	奈良	浜松市教委	(財) 浜松市文化協会 1994『社口遺跡』
恒武東覚１次	恒武町	1999.11～2000.3	古墳～近世	埋文研	本報告書
恒武東覚２次	恒武町	2003.2～10	奈良～中世	埋文研	本報告書
恒武西浦	恒武町	1997.7～1998.9	古墳・奈良	埋文研	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000『恒武西宮遺跡・西浦遺跡』
恒武西宮１－１	恒武町	1996.9～1997.3	古墳・奈良	埋文研	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000『恒武西宮遺跡・西浦遺跡』
恒武西宮１－２	恒武町	2002.4～5	中世・平安	埋文研	2004 年度報告予定
恒武西宮２次	恒武町	1998.10～1999.6	古墳～戦国	埋文研	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002『恒武西宮遺跡Ⅱ　笠井若林遺跡』
恒武西宮３次	恒武町	1998.10～1999.1	古墳・戦国	浜松市教委	(財) 浜松市文化協会 2002『恒武西宮遺跡３～７次』
恒武西宮４次	恒武町	1999.5	古墳	浜松市教委	(財) 浜松市文化協会 2002『恒武西宮遺跡３～７次』
恒武西宮５次	恒武町	1999.12	古墳	浜松市教委	(財) 浜松市文化協会 2002『恒武西宮遺跡３～７次』
恒武西宮６次	恒武町	2000.11～12	古墳	浜松市教委	(財) 浜松市文化協会 2002『恒武西宮遺跡３～７次』
恒武西宮７次	恒武町	2000.11	戦国	浜松市教委	(財) 浜松市文化協会 2002『恒武西宮遺跡３～７次』
山ノ花	恒武町	1996.8～12	古墳・奈良	浜松市教委	(財) 浜松市文化協会 1998『山ノ花遺跡』


笠井若林遺跡６次
笠井若林遺跡７次
笠井若林遺跡３次
笠井若林遺跡７次
笠井若林遺跡４次
笠井若林遺跡１次
笠井若林遺跡２次
恒武東覚遺跡２次
杜口遺跡２次
杜口遺跡１次
恒武東覚遺跡１次
笠井若林遺跡５次
恒武西浦遺跡
山ノ花遺跡
恒武西宮遺跡４次
恒武西宮遺跡７次
恒武西宮遺跡２次
恒武西宮遺跡３次
恒武西宮遺跡５次
恒武西宮遺跡６次
恒武西宮遺跡１次
笠井町
恒武町
貴平町
春日神社
恒武会館
六所神社
妙光寺
吉祥寺
八幡神社
清覚寺
結城遺跡祠
県道浜松・袋井線
主要地方道天竜・浜松線
0
(1:5,000)
200m

第1図　調査地点位置図

第２節　歴史的環境

縄文時代以前

宮竹野際遺跡（浜松市1994）で縄文時代晩期後半の土器が報告されている程度である。まだ、生活に適した微高地が形成されていなかったのであろう。

弥生時代

弥生時代中期の調査例では、宮竹野際遺跡の弥生時代中期の水田跡があげられる。微高地が安定し始めてきたと考えられる。弥生時代後期になると遺跡が増え始める。天王中野遺跡、山の神遺跡（浜松市1989）、松東遺跡などが発掘調査され、沖積平野に集落を作り始めたことがうかがえる。

古墳時代

天竜川西側の三方原台地と東側の磐田原台地には、前･中期の大型古墳や後期群集墳が造られるようになる。恒武東覚遺跡の北東には、蛭子森古墳（後期）がある。沖積地には珍しいもので、群集墳の被葬者とは別の有力者がいたと考えられる。これらの古墳を作った集落も存在するはずであるが、集落と古墳との関係は明らかでない。その中で、近年の恒武遺跡群調査は貴重な資料を提供している。

恒武西宮遺跡3次調査（浜松市2002）では、前期の方形周溝墓や多量の土器を伴う祭祀跡を調査した。山ノ花遺跡（浜松市1998）と恒武西浦遺跡（埋文研2000）では、流路跡で中期の祭祀跡を調査し、多量の土器、木製品、石製品が出土した。恒武西宮遺跡1次調査と恒武西浦遺跡（埋文研2000）では、中期から後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などを調査し、集落の一端を明らかにした。

奈良･平安時代

律令体制によって、静岡県西部は遠江国として中央集権体制に組み込まれた。そして、国郡制が敷かれ、浜松市恒武町、笠井町あたりも磐田郡、長田郡、麁玉郡のいずれかに属したと考えられている。

恒武遺跡群の周辺では、官衙関連と考えられる遺跡がある。宮竹野際遺跡では、奈良時代後半～平安時代前半の規格性の高い掘立柱建物跡が検出され、円面硯や布目瓦も出土したことから、郡衙との関連が考えられる。宮竹野際遺跡に近い木船遺跡では版築状の遺構や瓦が確認されており、寺院跡の可能性が指摘されている。宮竹野際遺跡の調査成果と合わせて、郡衙の中心に近いことを示唆している。

恒武町、笠井町付近では、社口遺跡（第２図－17）で円面硯が出土した他、恒武西浦遺跡（第2図－16）では掘立柱建物跡の他、墨書土器や人面墨書土器、土馬、人形など、大規模な祭祀をうかがわせる遺物が出土している。また、笠井若林遺跡４次調査（第2図－15）では、緑釉陶器が出土している。

このように、恒武遺跡群周辺では、官衙関連をうかがわせる遺構、遺物の発見が相次いでいる。

中世

文献史料によれば、笠井町あたりに羽鳥荘、美園御厨といった荘園が成立していたことがわかる。この時期の集落は、宮竹野際遺跡、山の神遺跡、笠井若林遺跡（第2図－15）、御殿山遺跡（第2図－２）、恒武西宮遺跡（第2図－16）、恒武西浦遺跡（第2図－16）などで確認されている。

近世

近世になると浜松藩領となり、笠井町付近には市が立てられた。そして、木綿の栽培・集積地として栄えた。この頃の技術や知識は、近代以降、浜松の織物産業の繁栄につながることになる。

参考文献

（財）浜松市文化協会1994　『宮竹野際遺跡２』
（財）浜松市文化協会1989　『山の神遺跡』
（財）浜松市文化協会1998　『山ノ花遺跡』
（財）浜松市文化協会2002　『恒武西宮遺跡』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2000　『恒武西宮・西浦遺跡』

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

現地調査

浜松土木事務所との調整により、調査範囲をいくつかの調査区に分割して、調査区ごとに調査することとなった。調査にあたって使用するグリッドは、平成８年、恒武西宮遺跡、恒武西浦遺跡の調査時に設定したグリッドを使用した（埋文研2000）。これは、恒武西宮遺跡１次調査の南西端を原点として、東西グリッドラインは東に向かって、10ｍごとにアルファベット順に記号をつけ、南北グリッドラインは北に向かって10ｍごとにアラビア数字順に番号をつけた（第３図）。調査区の呼び方は、グリッドの南西交点をとった。

１次調査は平成11年度、1次1区と１次２区（第３図）を調査した。

２次調査は平成14年度～平成15年度で、２次３区、２次１区、２次２区、２次４区（第３図）の順に調査した。

調査方法は、重機で表土を除去した後、遺構を検出、掘削した。測量はトータルステーションを使い、1/20の図を基本とし、必要に応じて1/10の詳細図をとった。写真撮影は、中型カメラと小型カメラを併用し、必要に応じて大型カメラを使用した。現地作業のうち、表土除去、残土搬出、基準杭設置は外部に委託した。

整理作業

現地撤収後、森現地事務所に遺物等を搬送し、整理作業を行った。遺構ごとに遺物を接合し、樹脂を使って復元、補強した。整理期間短縮のため、遺物実測、トレースと図面のトレースは外部に委託した。

第２節　調査の経過

１　１次調査（平成11年度）

①１区

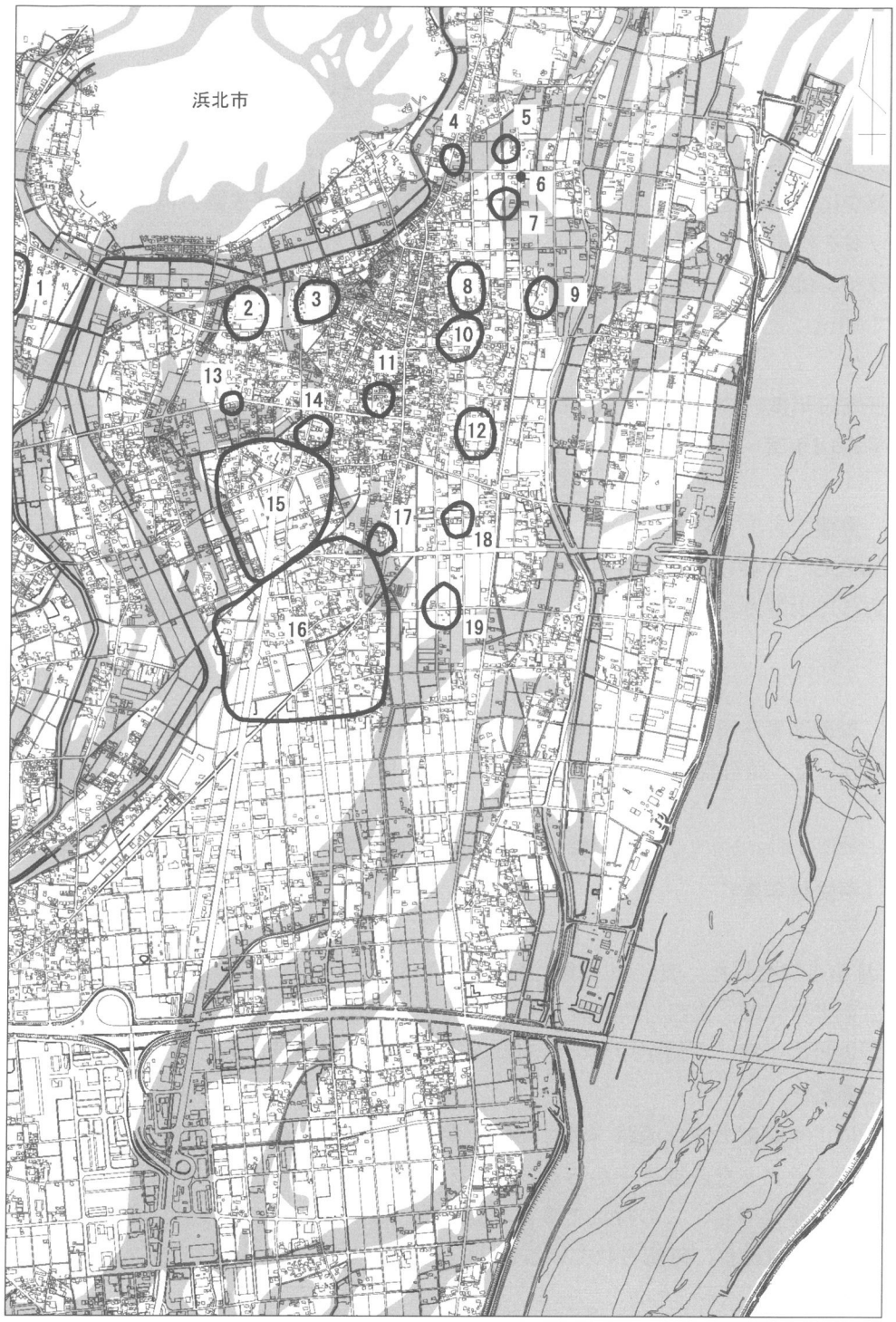
平成11年11月から調査した。表土除去後、西半分（ｅ～ｈライン）は攪乱がひどく、遺構はほとんど残っていない。東半分では、東西方向の溝（SD２～４）を検出した。掘り込み面から中世以降と考える。その後、上層で近世の土器、下層で中世の土器が出土したため、中世に掘られた溝で、近世にかけて埋没していったと考えた。

下層の調査では、東側で大きな流路（SR213）を検出、奈良時代の土器が多く見らたため、この溝の調査に重点を置くことにした。埋土中から奈良時代の土器が多量に出土し、特に下層の、礫層上に堆積した粘土層では土器が集中し、この時点で墨書土器も数点確認した。これ以外にも溝を検出したが、いずれも小規模で、恒武遺跡群で確認されている畑状の遺構に似ている。平成11年12月下旬終了。

②２区

平成12年1月から調査した。表土除去後、数本の溝と円形の遺構を確認した。円形の遺構は、掘り下げていくと、井戸枠を検出し、出土遺物から、13世紀の井戸と考えた。

中間層除去後、溝、土坑を検出した。このうち、ｌ～ｍラインでは、複数の溝が切り合っているため、断面等で前後関係を確認しながら調査した。また、ｏ～ｑラインでは、幅の広い流路（SR215、216）を検出した。この中から６世紀後半の土器を確認した。また、有機物が残っており、流木に混じって木製品と思われる遺物も見られた。遺物の可能性のあるものは、出土状態を記録し、取り上げた。SR215下部の黒色粘土は、５世紀の遺物とともに有機物を含んでおり、木製品と思われるものも見られた。このうち、遺物の可能性のあるものは記録後、取り上げた。平成12年３月下旬終了。



トーンは旧流路（推定を含む）

0　(1:25,000)　1000m

1	万斛遺跡	6	蛭子森古墳	11	笠井町下組遺跡	16	恒武遺跡群
2	御殿山遺跡	7	八幡南遺跡	12	八ッ面遺跡	17	社口遺跡
3	御殿山遺跡	8	大通西遺跡	13	笠井町広野遺跡	18	平松遺跡
4	隋国遺跡	9	服織神社境内遺跡	14	笠井西浦遺跡	19	茶ノ木田遺跡
5	八幡西遺跡	10	宮前遺跡	15	笠井若林遺跡		

第２図　周辺遺跡分布図

2　2次調査（平成14、15年度調査）

① 3区

平成15年2月下旬から調査した。平成11年度の調査成果を参考に、中世の遺構が検出できると思われる深さまで、重機で掘り下げたが、ほとんどが攪乱で失われていたため、奈良・平安時代の遺構面まで掘り下げた。そして、調査区全面で流路跡や円形の遺構を検出した。円形の遺構は、その後の掘削で、平安時代の土器とともに井戸枠を検出したが、精査の結果、近世以降と判断した。流路跡では、奈良時代の土器が出土し、土層堆積の状況から、複数回の洪水跡を確認した。平成15年4月下旬終了。

② 1区

平成15年5月から調査した。現道の拡幅部分の調査となったため、幅3m程度の細長い調査区となった。ここでは、表土除去後、複数の溝状遺構を検出した。すぐに掘り下げたところ、古墳時代後期の土器が出土したことから、古墳時代後期に埋没した流路跡と判断した。断面の観察から、中世の遺構面は、その後の水田耕作により壊されていることがわかり、1面のみの調査となった。平成15年5月下旬終了。

⑤ 2区

現道を迂回させての調査となった。迂回路工事の関係で、1区終了の平成15年5月末から7月下旬までは整理作業を先行させ、2区の調査は平成15年7月下旬からの調査となった。中世の遺構検出面まで重機で掘削し、隣の3区と同様に流路跡を検出したが、中世の遺物はわずかで、奈良～平安時代の流路が主体と判断した。各流路の調査後、さらに掘り下げ、古墳時代後期1面目～奈良・平安時代の2面目を検出した。ここでは数本の溝と掘立柱建物跡と思われる柱穴、住居跡を検出した。SD326の溝とSB302の住居跡では良好な一括資料が出土した。Z～aラインでは、側溝や奈良・平安時代2面目の遺構の下面で、3面目の遺構を確認したため、直ちに掘り下げ、古墳時代後期2面目～奈良・平安時代3面目を調査した。ここでも掘立柱建物跡と思われる柱穴を検出した。奈良・平安時代の3面目は恒武東覚遺跡では初めての確認で、流路が削っていないために、残っていたと考えた。平成15年9月上旬終了。

⑥ 4区

平成15年9月上旬から調査した。中世面まで重機で掘り下げたが、遺構を検出できなかったため、奈良・平安時代面まで掘り下げた。ここで複数本の溝と掘立柱建物跡と思われる柱穴を検出し、奈良～平安時代の土器が出土した。奈良・平安時代2面目では、小規模ながら20本以上の溝を検出した。その後、古墳時代後期1面目～奈良・平安時代の3面目を確認し、住居跡、畑状遺構などを検出した。平成15年10月下旬終了。

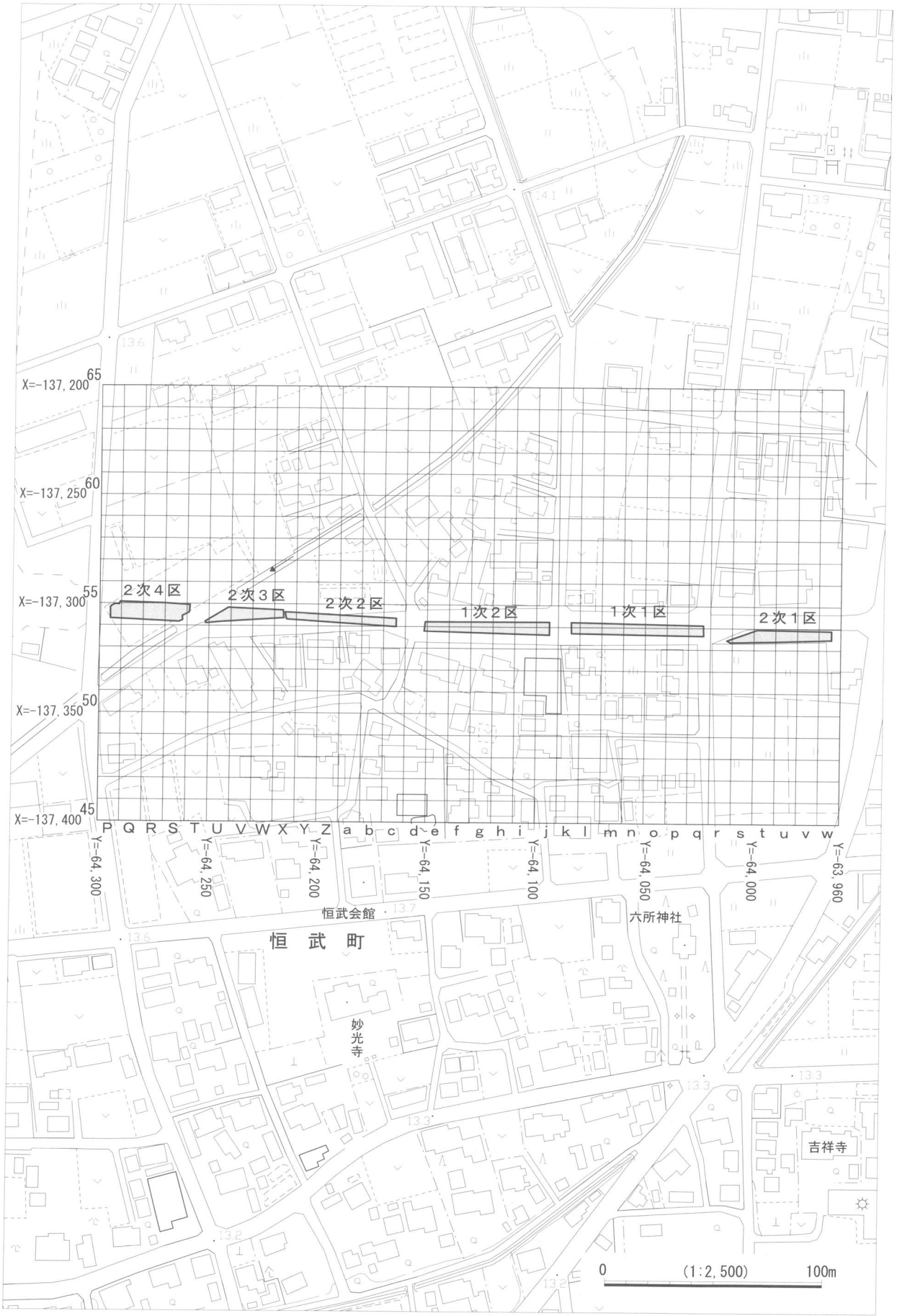
3　整理作業

平成15年11月から整理作業を始めた。作業期間を短縮するため、遺物の実測、トレース、遺構図のトレースは外部に委託した。遺物は、接合、復元の後、すぐに実測、トレースを外注し、遺構図は、現地作業と平行して作成した下図を、若干の修正の後、外注でトレースした。

第3節　基本土層

現在は市街化が進み、住宅が増えているが、昭和30年頃は畑や水田が広がっていたらしい。

基本土層を第4図に示す。1層は現道を作る際の盛り土で、2層が旧耕作土である。3層は、中世の遺物を含んでおり、上面で中世の遺構を検出できるが、遺構検出は必ずしも容易ではなく、6層上面で検出できるものもある。4層と5層は1次1区でのみ確認できた還元土層で、浅いくぼみに堆積した土と考えられる。6層は古墳時代後期～平安時代の遺物を含んでおり、上面でこの時期の遺構を検出できる。7層は2次2区と4区で確認できた土層である。2次2区と4区では、古墳時代後期～平安時代の遺構面が見つかっている。旧流路に削られていないため、7層が残っていたと考えられる。


X=-137, 200 65
X=-137, 250 60
X=-137, 300 55
X=-137, 350 50
X=-137, 400 45
P Q R S T U V W X Y Z a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w
Y=-64, 300
Y=-64, 250
Y=-64, 200
Y=-64, 150
Y=-64, 100
Y=-64, 050
Y=-64, 000
Y=-63, 960
２次４区
２次３区
２次２区
１次２区
１次１区
２次１区
恒武会館
恒 武 町
六所神社
妙光寺
吉祥寺
0
(1:2, 500)
100m

第３図　グリッド配置図

第Ⅳ章　調査成果

第１節　成果の概要

道路改築工事に伴う発掘調査であるため、調査区は東西に細長くなっている。現在の地形は、ほぼ平坦といって良いが、東から正確に見ると、２次調査１区はやや低い。１次調査区、２次調査２区付近がわずかに高くなっており、２次調査３区から現在の笠井都市下水路あたりが低くなっている。そして、２次調査４区が再び高くなっている。したがって、１次調査区、２次調査２区、４区が微高地に当たっており、２次調査１区、３区が低地に当たることになる。この地形は遺跡の残り方にも影響している。

中世面で中世の遺構を検出したのは、１次調査区だけである。ここでは、中世以降の溝や井戸跡などを検出した。その他の調査区では、中世面はその後の耕作などによって失われており、奈良・平安時代面まで切り込んでいる遺構を確認したに過ぎない。

奈良・平安時代の遺構面の調査では大きな成果があった。まず、１次調査ではSR213とした流路内から８世紀代の遺物がまとまって出土した。遺物は流路内に流れ込んだ状態だが、ごく近いところから流れてきたと思われ、割れ面は摩滅しておらず、完形に近い土器も多く見られた。８世紀代の須恵器、土師器の各器種が揃う中で、「太」の文字が確認できる墨書土器２点の他、人面墨書土器を含む墨書土器片が多くあり、転用硯も見られた。また、丹塗りの土師器も多く出土した。これ以外にもミニチュア土器、手捏ね土器、動物形土製品といった祭祀関連遺物も見られた。

次に２次調査でも同様の成果があった。３区では古代の流路群を検出し、８世紀～10世紀の遺物が出土した。いずれも増水時に流れてきた状況であったが、ミニチュア土器や手捏ね土器、馬形土製品といった祭祀関連遺物が、馬か牛と思われる動物の下顎骨を伴って出土した。これらも摩滅が進んでおらず、近い場所から流れてきたと考えられる。

２次調査２区では、３面に渡る遺構面を確認し、古墳時代後期～平安時代の遺構を検出した。この部分は微高地にあたっており、旧流路に削られていないために遺構面が残っていたと考えられる。

奈良・平安時代の遺構としては、掘立柱建物跡、竪穴住居跡などを検出した。掘立柱建物跡は、細長い調査区の中で組み合わせを確認できたのは、１棟だけであったが、柱痕をもつ柱穴跡は多く検出でき、本来ならば、さらに多くの掘立柱建物跡があったことは間違いない。竪穴住居跡も、細長い調査区の中で、その一部を調査しただけであるが、奈良・平安時代の一括遺物を得ることができた。また、SD326とした溝は、８世紀後葉に埋没したと考えられるが、古墳時代後期の良好な一括遺物が出土した。

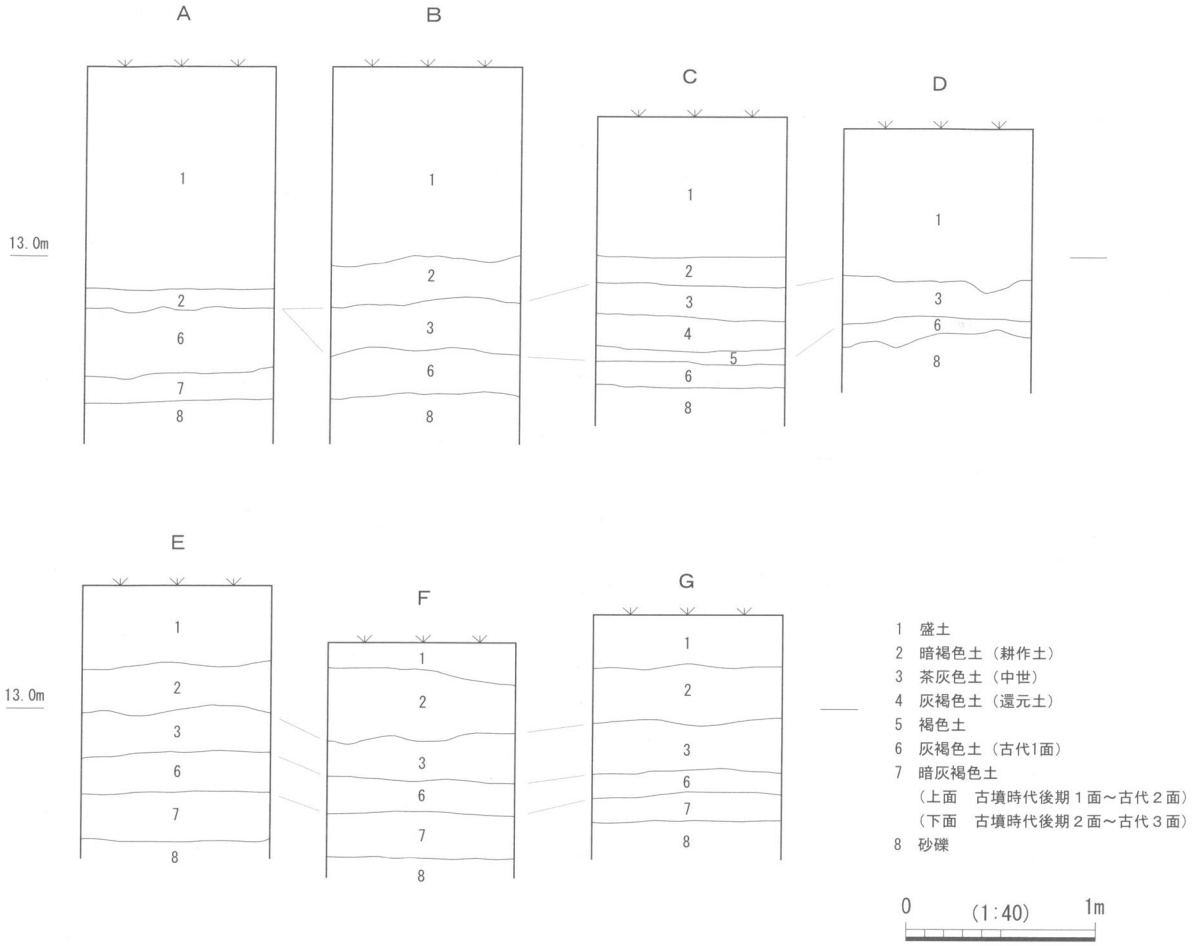
４区も、２区同様に微高地にあたっていると考えられ、３面に渡る遺構面を確認した。そして、畑状遺構や溝群の他に、掘立柱建物跡と思われる多数の柱穴跡を検出し、１棟の掘立柱建物跡を確認した。

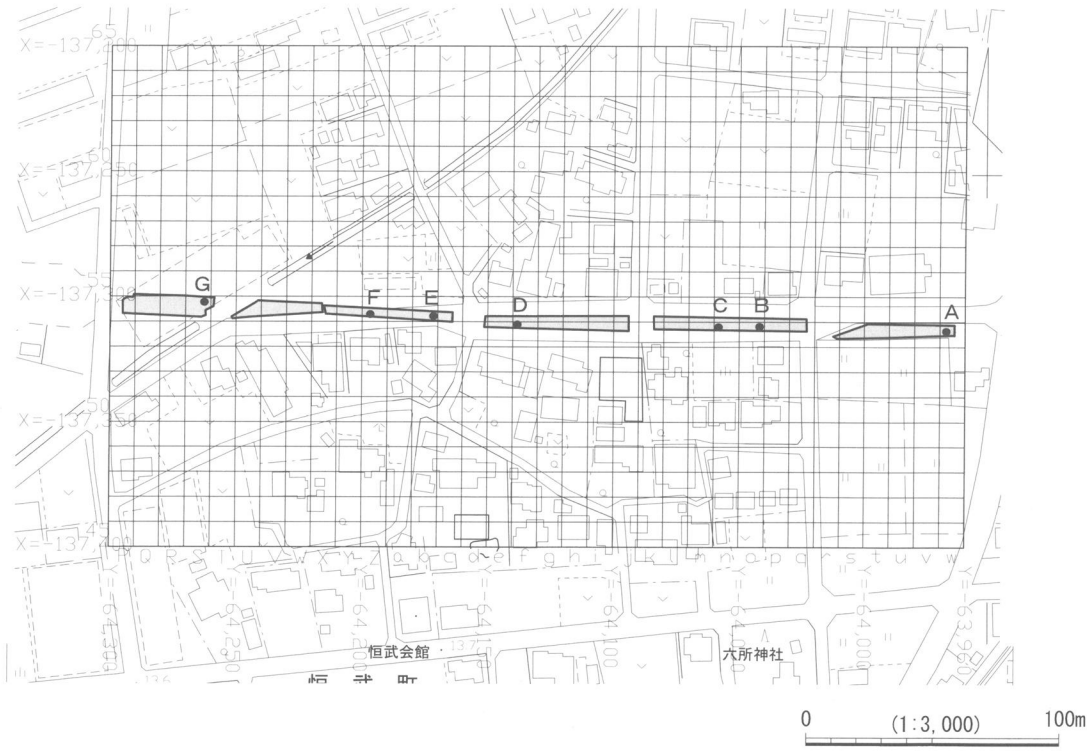
今回の調査では、古墳時代後期の遺構も認められた。２次調査1区は、幅３m程度の細長い調査区であったが、古墳時代後期の旧流路跡が複数切り合っている状況を確認した。

２次調査２区と４区では、古墳時代後期の竪穴住居跡を確認した。２区では３棟の竪穴住居跡を検出した。いずれも奈良・平安時代の竪穴住居跡や旧流路に切られており、さらに調査区外にも延びていたため、住居の全貌は明らかにできなかったが、２棟から７世紀後半の一括遺物を得ることができた。

以上のように、奈良・平安時代の遺構からは、複数の掘立柱建物跡の存在がうかがわれ、出土遺物には、墨書土器や転用硯といった、文字に関係する遺物、丹塗り土器やミニチュア土器、手捏ね土器、動物形土製品といった祭祀に関連する遺物がある。これらからは上級階級の存在、特に官人の存在がうかがわれ、近隣に官衙関連遺跡がある可能性を示唆している。

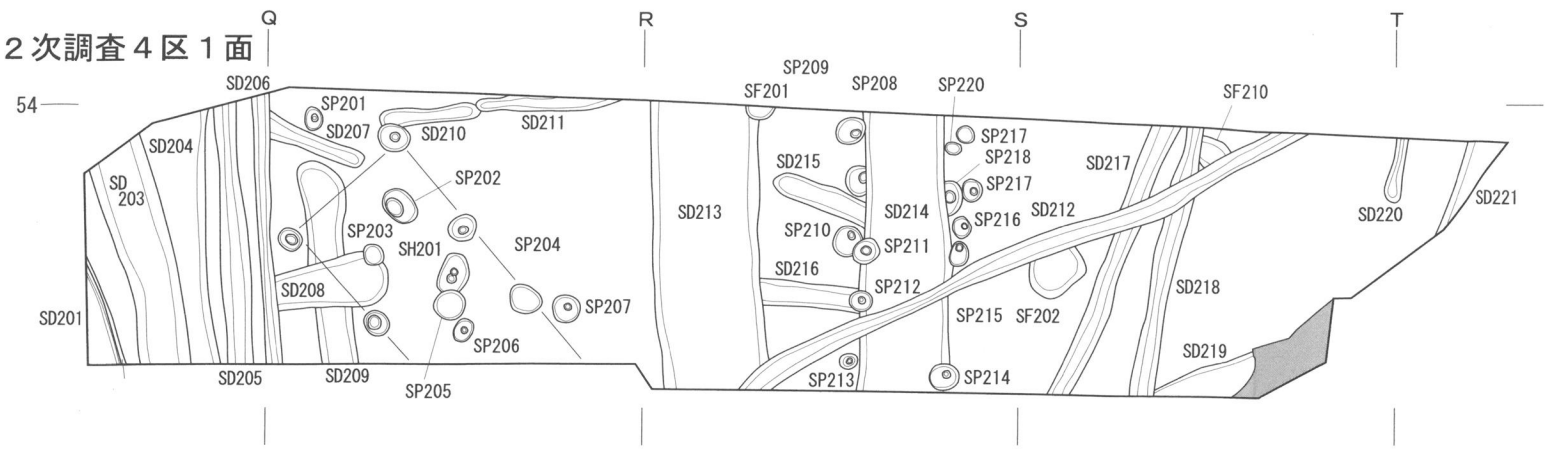
また、古墳時代後期の遺構も確認できたことから、この辺りには古墳時代後期から集落が形成され始めたことがうかがえる。


A
B
C
D
E
F
G
13.0m
13.0m
1 盛土
2 暗褐色土（耕作土）
3 茶灰色土（中世）
4 灰褐色土（還元土）
5 褐色土
6 灰褐色土（古代1面）
7 暗灰褐色土
（上面 古墳時代後期１面～古代２面）
（下面 古墳時代後期２面～古代３面）
8 砂礫
0 (1:40) 1m

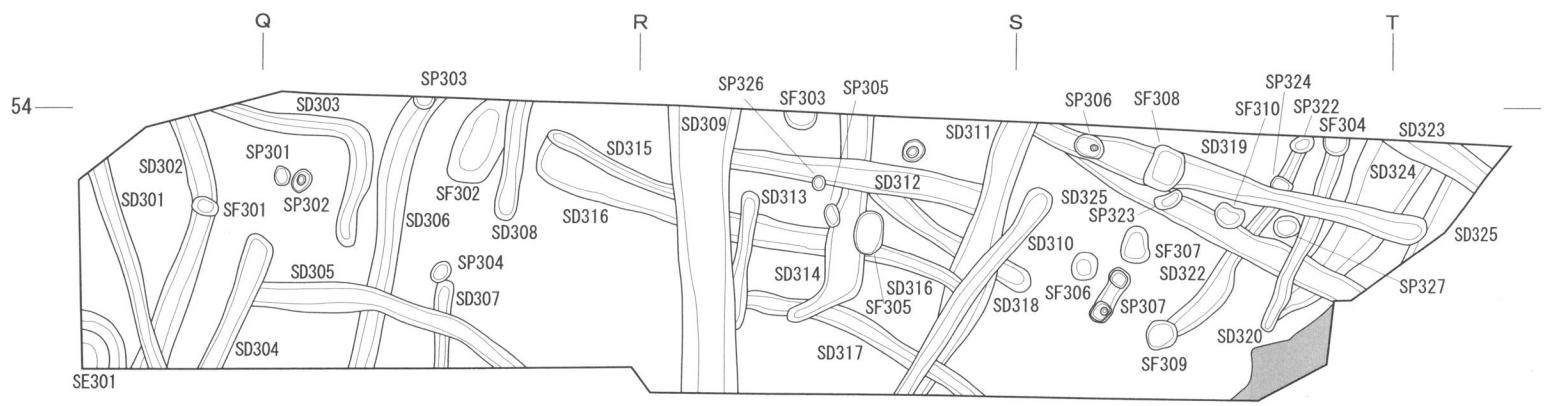

G
F
E
D
C
B
A
恒武会館
六所神社
0 (1:3,000) 100m

第４図　基本土層柱状図

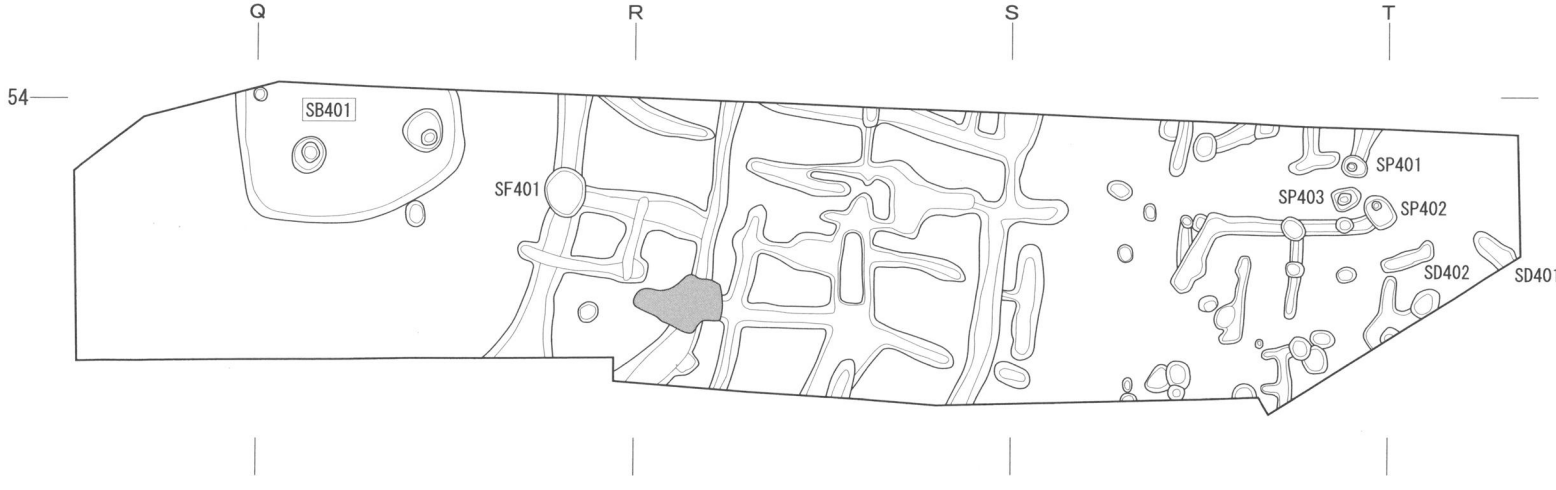
２次調査４区１面



２次調査４区２面



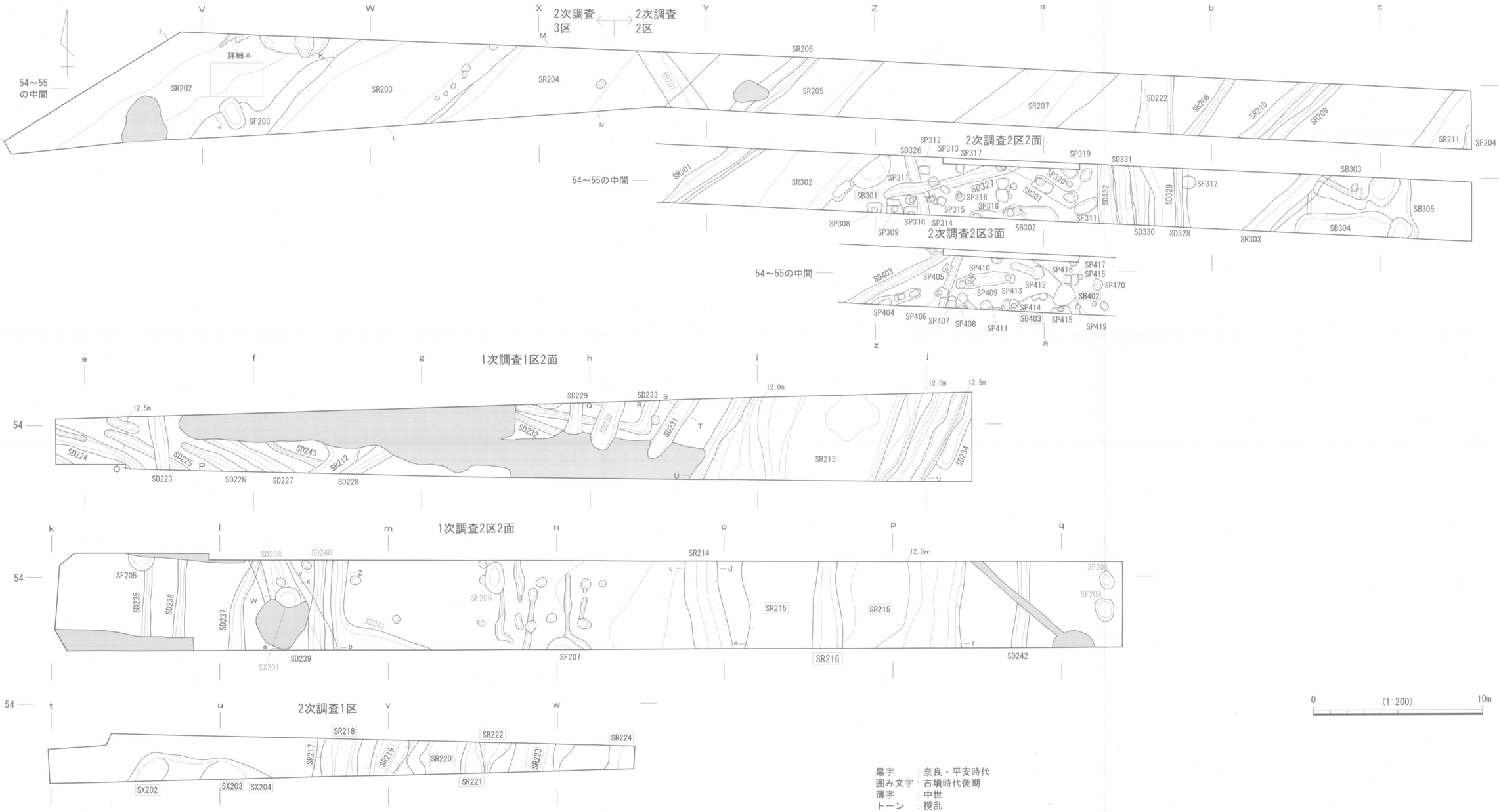
２次調査４区３面



黒字　　：奈良・平安時代
囲み文字：古墳時代後期
トーン　：撹乱

0　(1:200)　10m

第５図　遺構分布図1



黒字　：奈良・平安時代
囲み文字：古墳時代後期
薄字　：中世
トーン　：撹乱

第６図　遺構分布図2

第２節　古墳時代の遺構と遺物

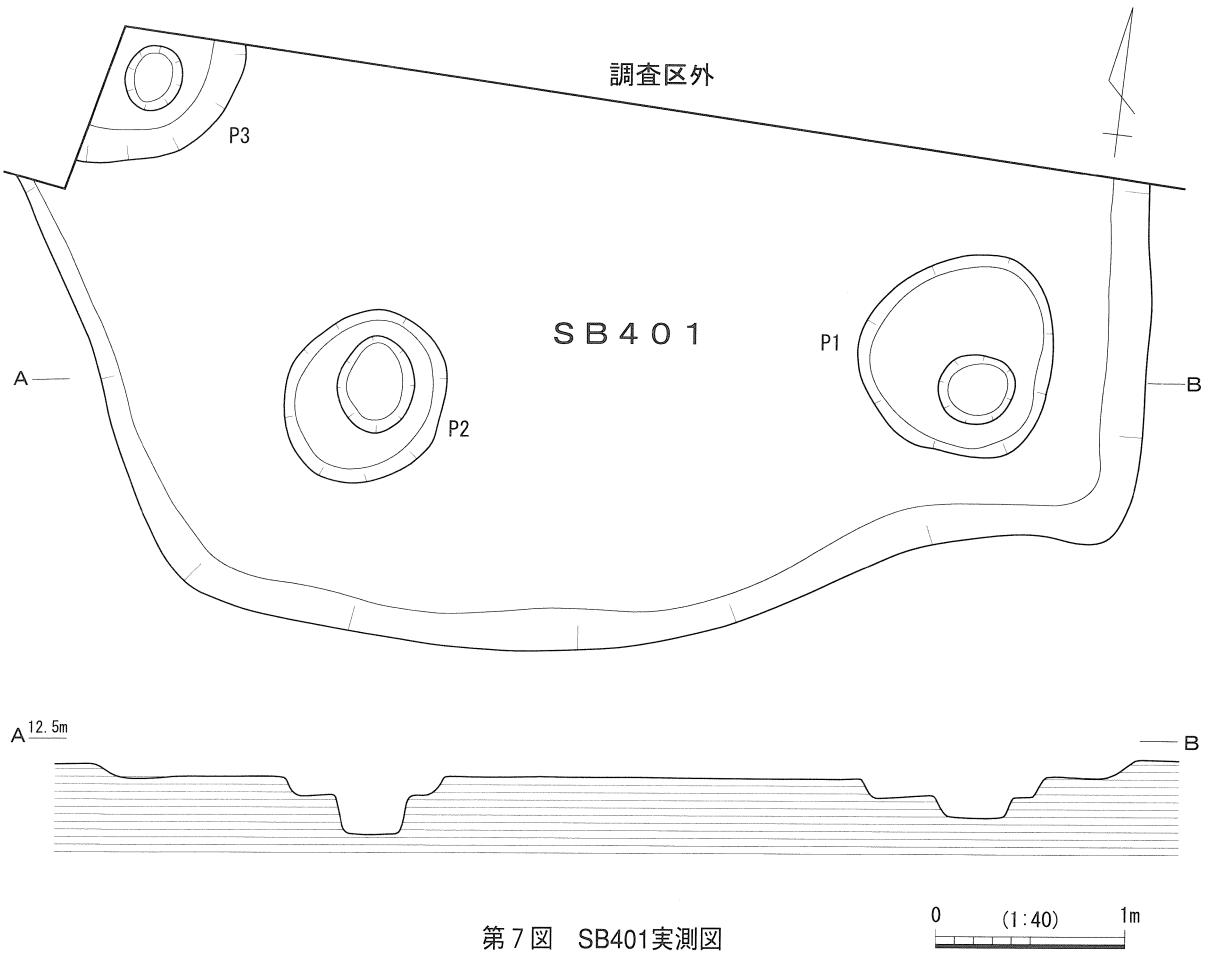
竪穴住居跡

SB401（第７図）

２次調査４区の３面目の遺構面で検出したやや歪んだ住居跡である。平面形は方形に近いと思われる。埋土は暗褐色土で、周囲の土に比べて黒ずんでいたため、平面の検出は比較的容易であったが、深さは20cmほどしかなく、本来の掘り込み面はさらに上であったと考えられる。規模は東西5.8mで、北側半分ほどが調査区外に出ているため、南北の長さは不明である。竈や炉跡は検出できなかったため、北側の調査区外に存在するのであろう。柱穴を３つ検出した。出土遺物は極めて少ないが、７世紀後葉の須恵器（第43図－23）が出土している。

SB402（第８図）

２次調査２区で検出した住居跡である。遺構検出時に、炭粒や焼土の分布から、竈付の竪穴住居跡があると推定して調査していたが、埋土が周囲の土に酷似していたため、住居跡平面の検出は極めて困難であり、竈付近が何とか検出できただけである。竈の反対側、西側の壁の立ち上がりは、執拗な精査にもかかわらず、ついに検出できなかった。したがって、南北方向の半分近くが調査区外に出ていることもあり、規模は不明である。竈は崩れて土坑状になっており、縦断面により、煙道らしい部分（第８図断面図の９層）が確認できただけである。SP412は住居跡に伴う柱穴に見えるが、住居跡を切る別の遺構である。この住居跡の竈内からはまとまった遺物が出土し、７世紀第３四半期～第４四半期の須恵器（第９図－３～５）、土師器（第９図－２、６～10）が見られる。第９図－１と５の須恵器には自然釉の付着が見られる。第９図－９は脚部のみで、上部に付く器種は不明である。



第７図　SB401実測図

SB403（第８図）

SB402に切られた状態で検出した。調査区の南壁の際で住居跡の一部を検出しただけで、大半が調査区外に出ているため、規模は不明である。竈は検出できなかったため、調査区外にあると思われる。SP415がこの住居跡の竈のように見えるが、この住居跡を切る別の遺構である。住居内の遺構は、壁際でP1を検出しているが、用途は不明である。小規模ではあるが、貯蔵穴のような用途であろうか。遺物は少なく、図化できるものはないが、７世紀後半の須恵器、土師器が出土している。

SB301（第10図）

２次調査２区で検出した。遺構検出時に、焼け土、炭粒の集中、白色粘土が分布していることから、竈付きの竪穴住居跡があると予想して調査したところ、検出面付近で土器がまとまって出土し、さらに大半をSR302に切られた状態で住居跡を検出した。検出できたのは、竈付近の一部であるため、規模は不明である。竈は煙道が細長く残っており、断面でも、煙道内の堆積物（９層）と整地層（７層）が確認できた。竈付近で７世紀後半を主体とする遺物（第11図）が集中して発見されたが、竈の中ではなく、竈の検出面に貼りつくようにして出土した（第10図断面投影図）。遺物は７世紀後半のもの（第11図－２～４、６～14）が主体である。７世紀前半の遺物（第11図－５、15）も見られるが混入品であろう。第11図－12、14には自然釉が見られる。第11図－15は手捏ね土器である。

自然流路跡

SR215、SR216（第12～14図）

１次調査２区で検出した。SR216は特にラミナが発達した砂を埋土としており（第12図）、目立っていたため、独立した番号を付けたが、本来はSR215の一部であり、洪水の跡と思われる。SR215は、断面の観察から、さらに上下２本の流路に分けることができる（第12図）。いずれも埋土は砂層と粘土層の互層になっており、ラミナの発達が見られることから、複数回の洪水跡を示している。この流路跡の特徴は、粘土層中に流木など有機物を多量に含んでいることである。木製品の可能性があるものはすべて取上げたが、大半は自然木で、木製品としては曲物が１点含まれていただけであった。SR215の上部とSR216からは、６世紀後半から７世紀前半の遺物（第15図－１～４、第50図－９～13）が主体で、下部からは、５世紀後半の遺物（第15図－５、６、第50図－17）が出土しており、時期差を示している。第15図－３の須恵器は、器種判定に苦しむが、無蓋の坏か鉢と思われる。そして、胎土から湖西産と考えられる。また、口縁部の立ち上がりから、５世紀に遡る可能性もあるが、底部のヘラ削りが手持ちではないことなどから、６世紀末から７世紀前半と考えておく。

SR217～SR224（第６図、第16図）

２次調査1区で検出した流路群である。調査区が狭いため、流路の一部を調査しただけであるが、南北方向に何本もの流路が切り合っている状況を観察できた（第16図）。このことから、このあたりは低地に当たっていると思われる。埋土はSR224から4世紀前半の土師器（第44図－９）が出土しているが、他の出土遺物から、これらの流路は古墳時代後期に埋没したと考えられる。これらは、いずれも灰褐色土、灰色土を主体とする、砂を含んだやや粘質のある土を埋土としており、似ていることから、近い時期に流れていたと考えられる。

性格不明遺構

SX202～204（第６図、第16図）

２次調査１区で検出した不整形の落ち込みである。半分以上が調査区外に出ている。SX202から７世紀中葉の土師器（第44図－11）と時期不明の甕が出土している。上記のSR217～SR224と埋土が似ていることから、流路の一部で、入江のような部分であると考えられる。

第３節　奈良・平安時代の遺構と遺物

掘立柱建物跡

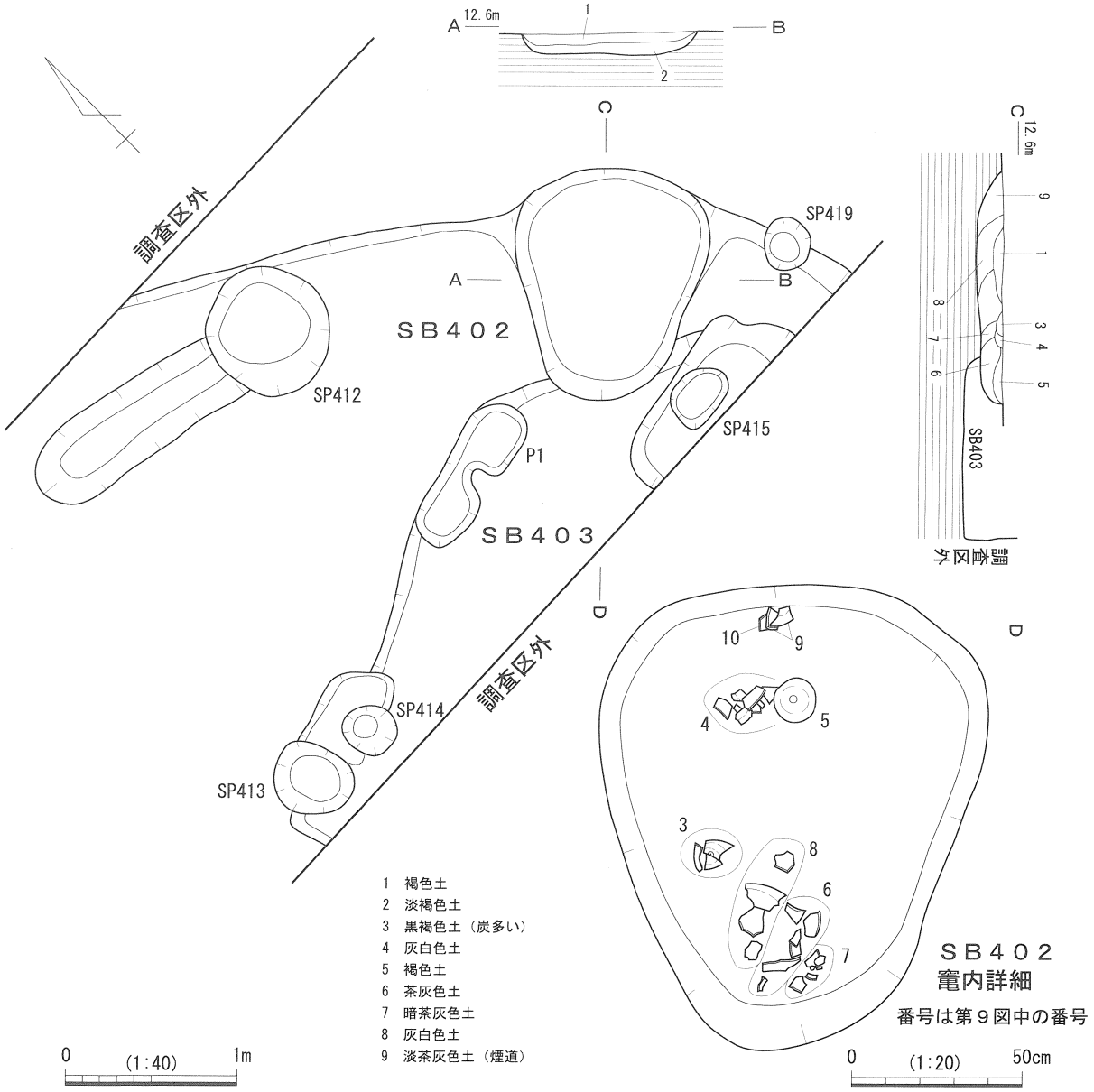
SH201（第17図）

２次調査４区で検出した掘立柱建物跡で、一部が調査区外に出ているため、規模は明らかでない。桁方向はN45°Wである。柱間距離は梁間が3.2m、桁間が2.4mである。P5だけは精査にもかかわらず、柱穴を検出できなかった。柱穴から９世紀後半の灰釉陶器（第43図－１）が出土している。

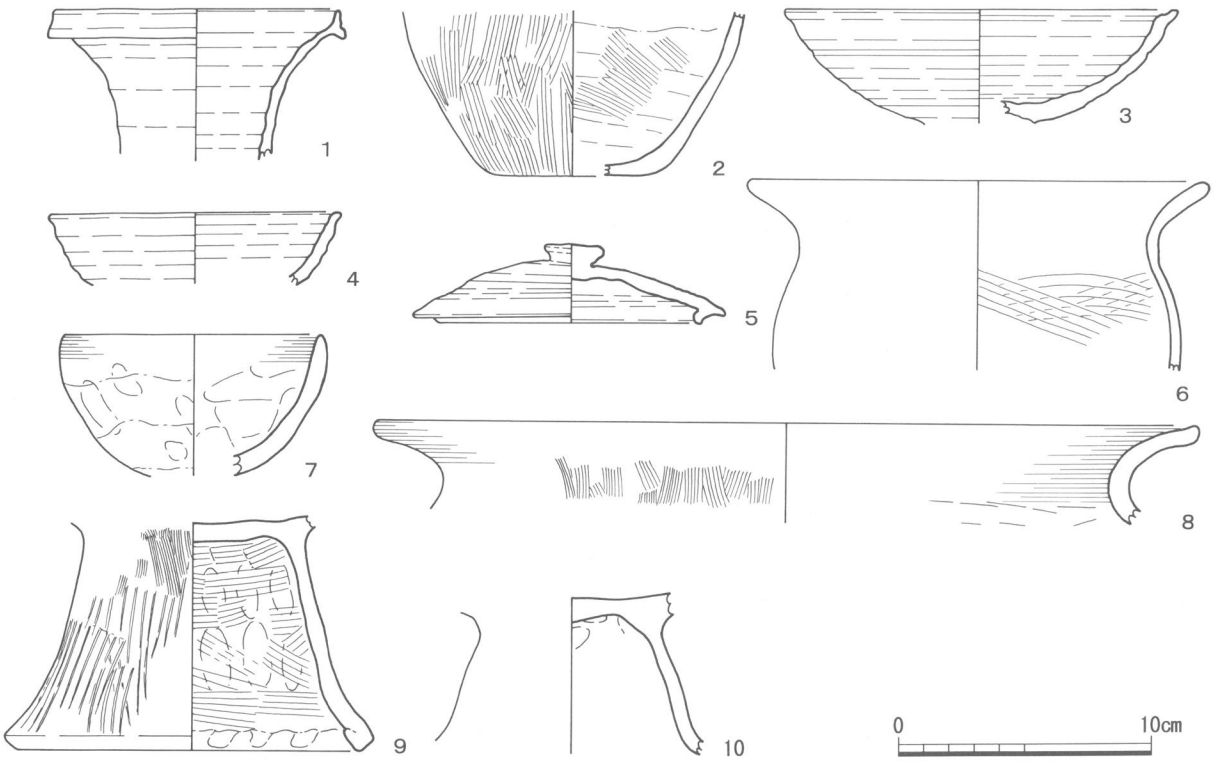
SH301（第18図）

２次調査２区で検出した。半分以上が調査区外に出ているため、規模と桁方向は不明である。P2とP3は布掘りによってつながっている。柱穴の埋土は淡褐色砂質土である。柱間距離は、P1とP2の間が2.4m、P2とP3の間が2m、P3とP4の間が1.6mとばらつきがある。遺物は出土していないが、検出面から考えて、奈良・平安時代と思われる。

以上の他に２区と４区では多くの柱穴跡を検出した。柱痕をもつものが多く、掘立柱建物跡と考えられるが、調査区が狭いため、組み合わせは明らかにできなかった。



第８図　SB402・403実測図



第９図　SB402出土遺物（1/3）

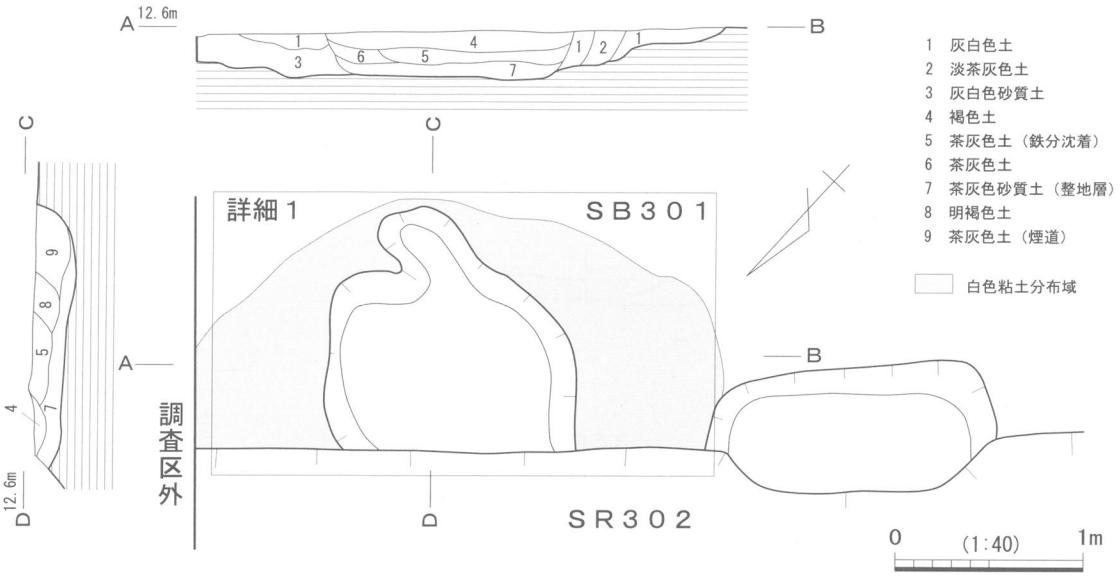
竪穴住居跡

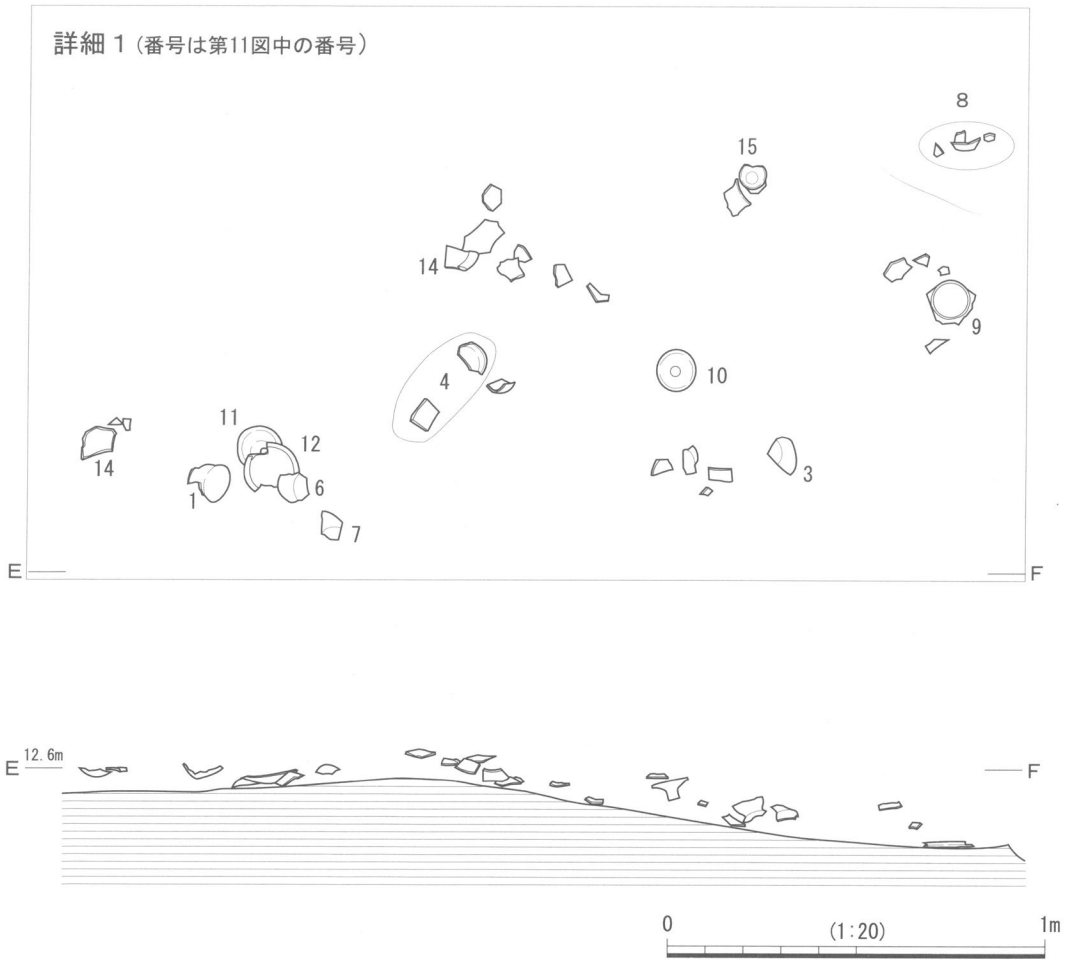
SB302（第19図）

２次調査２区の南壁際で検出した。規模は、東西の長さが３mだが、大半が調査区外に出ているため、その他の規模は不明である。遺構検出時に、南側の壁際で焼け土と炭粒を伴って土器が集中する部分があり、南壁に竈と思われる断面が観察でき、さらに住居跡全体の埋土も褐色土で目立ったため、平面の検出は比較的容易であった。柱穴は、西側でP1を検出している。竈は北半分を検出しただけで、南半分は調査区外に出ている。竈の底部に小土坑を２つ検出している。竈構築財に使用した礫の跡のようであるが、正確な用途は不明である。遺物は、竈とその東側床面で須恵器と土師器がまとまって出土した。特に竈からは、多量の焼け土と炭粒を伴って多くの土器が出土した。これらの遺物は、断面投影図に見るように、２つのレベルにまとまって出土したことから、２回に渡って廃棄されたと考えられる。１回目は竈廃棄直後、２回目は、竈が住居跡の床面付近まで埋まった所で廃棄されている。住居の廃絶方法を探る資料となるであろう。遺物は、８世紀後葉の土器（第20図－６、13、16、17等）が主体である。器種としては土師器の甕が目立ち、手捏ね土器（第21図－２、３）も出土している。

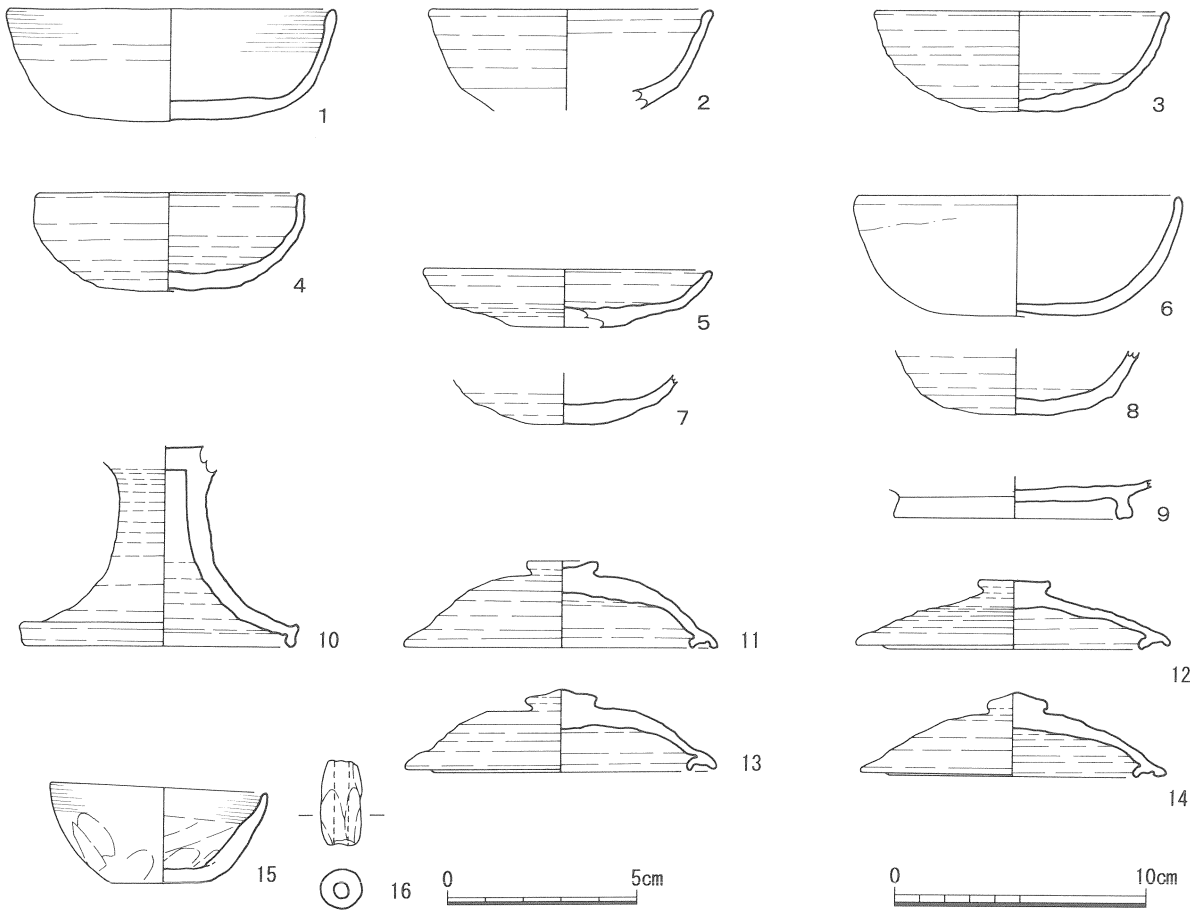
これらの遺物の接合状況を観察すると、同一個体の土器が散らばったようになっていることから、バラバラになった土器を捨てたか、あるいは土器を投げ捨てたような状況が考えられる（第19図）。また、これほどの一括性を示しながら、完形に戻る土器はほとんどないことから、完形の土器を置いたような状況は考えにくい。やはり、壊れた土器を捨てたと考えたほうが妥当である。

なお、７世紀後半（第20図－１～５、11、第21図）の土器も出土している。直下に７世紀後半のSB403があり、この住居跡がSB403を切り込んでいるため、SB403の土器を取上げている可能性もあるが、調査時には、竈の底面を確認して掘削を止めており、SB403の土器を誤認して取上げている可能性は考えにくい。また、SB403は遺物の少ない住居跡であり、もし、SB403の土器も取上げていることになると、SB302に切られた部分だけに遺物が集中していることになり、やはり、直下の住居跡の遺物を取上げている可能性は考えにくい。





第10図　SB301実測図



第 11 図　SB301 出土遺物(1～15 は 1/3、16 は 1/2)

SB303（第22図）

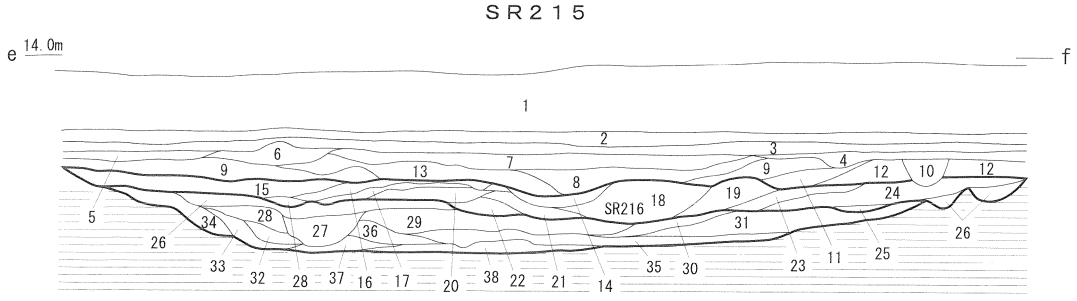
２次調査２区の東端で検出した。炭粒の集中から竈の位置を特定し、これを手がかりに全体を検出したが、埋土と周辺の土が酷似しており、検出は困難であった。竈は、崩れて土坑状になっている。竈内に炭化物の集中は見られたが、焼土はほとんど見られなかった。西側をSR209に切られ、北側半分以上は調査区外に出ているため、規模は不明である。南側の壁際で溝と柱穴P1を検出し、南側の壁際では溝を検出した。竈は、住居跡の南側に偏っている。断面の観察から煙道と思われる部分の埋土（５、６層）を確認した。遺物は少なく、８世紀前葉の、焼成不良の須恵器（第23図－１）が出土しているが、８世紀後葉のSB305を切っていることから、８世紀後葉以降に形成されたと考えた方が良い。

SB304（第22図）

上記SB303の南側で検出した。これも遺構検出時に、炭粒や焼け土の集中から竈の位置を特定し、さらに南壁の断面を参考にして全体を検出したが、検出は必ずしも容易ではなかった。竈は住居の北側に偏っており、形が崩れて土坑状になっている。住居の規模は、東西の長さが７ｍほどある以外は、住居跡の大半が調査区外に出ているため、明らかでない。西側壁際で柱穴P1を検出している。遺物は、床面から土師器の甕（第23図－５）が出土しているが、時期は判定できない。竈付近からは須恵器の壷（第23図－２）と土師器の皿（第23図－４）が出土している。前者の時期判定は不能だが、後者は丹塗りで８世紀代である。第23図－３は須恵器の坏で８世紀中葉、第23図－６の土師器の甕は８世紀後葉である。第23図－４は８世紀代の土師器で、丹塗りである。

SB305（第22図）

上記SB303とSB304の間で検出した。これら２つの住居跡に切られたうえに南北両端が調査区外に出ているため、規模は不明である。竈も調査区外にあるか、あるいはSB303、304、SR209に切られている



1　盛土　瓦礫
2　暗灰色粘土　管鉄多、Fe多、水田作土
3　緑灰色粘土　Fe多、管鉄、水田作土
4　緑灰色細砂シルト　Fe多、管鉄多
5　緑灰色細砂シルト　還元
6　黄白色粘土シルト　Fe・Mn多
7　黄灰色粗砂まじりシルト　Fe・Mn多
8　褐色粗砂まじりシルト
9　暗黄褐色シルト　粗砂多量に含む、Fe多
10　SD218褐色シルト　しまりあり、Fe・Mn多
11　黄白色粘土　Fe多
12　暗灰色粘土
13　名黄灰色粗砂まじりシルト　Fe多
14　灰色細砂シルト　ラミナ発達、Fe多
15　暗灰色粗砂まじりシルト　Fe・Mn多、管鉄
16　暗灰褐色年度　灰白色粘土ブロック状に含む
17　灰白色粘土　Fe多、管鉄多
18　黄灰色粗砂　ラミナ発達（灰色シルト層状に）
19　灰白色粘土　粗砂ブロック状多量に含む、Fe多、管鉄
20　灰黄色粗砂まじりシルト　Fe多、管鉄多
21　黄灰色粗砂まじりシルト　Fe多
22　黄灰色粗砂　Fe多、ラミナあり
23　灰色粗砂　Fe多
24　灰色細砂　φ1～2cmの礫多、Fe多
25　灰色粗砂　礫まじり
26　黒色粘土（灰色粘土ブロック含む）Fe多
27　黒色粘土　ラミナ多（灰色細砂）木製品多
28　暗灰色粗砂まじり粘土　木製品多、植物
29　黒色粘土　ラミナ発達、灰色粗砂層状に含む、木製品やや多い
30　暗灰色細砂シルト　ラミナ発達、粗砂層状に含む
31　黒灰色粘土　灰色粗砂をラミナで含む
32　黒褐色粘土　木製品多、未分解の直物多
33　暗灰色粘土　未分解直物多
34　灰黄色細砂シルト　Fe多
35　暗灰色砂礫層　黒色粘土ブロック状に含む
36　黒色粘土　砂礫を含む、木製品多、直物
37　暗灰色粘土　未分解直物多、33に同じ
38　灰色細砂　黒色粘土含む、ラミナ発達、未分解直物多

0　(1:50)　1m

第12図　SR215・216断面図

ようで、検出していない。８世紀中葉の須恵器(第23図－７)の他は、８世紀後葉の土器（第23図－８、９）が主体である。第23図－８は丹塗りの土師器で内面に暗文が見られる。

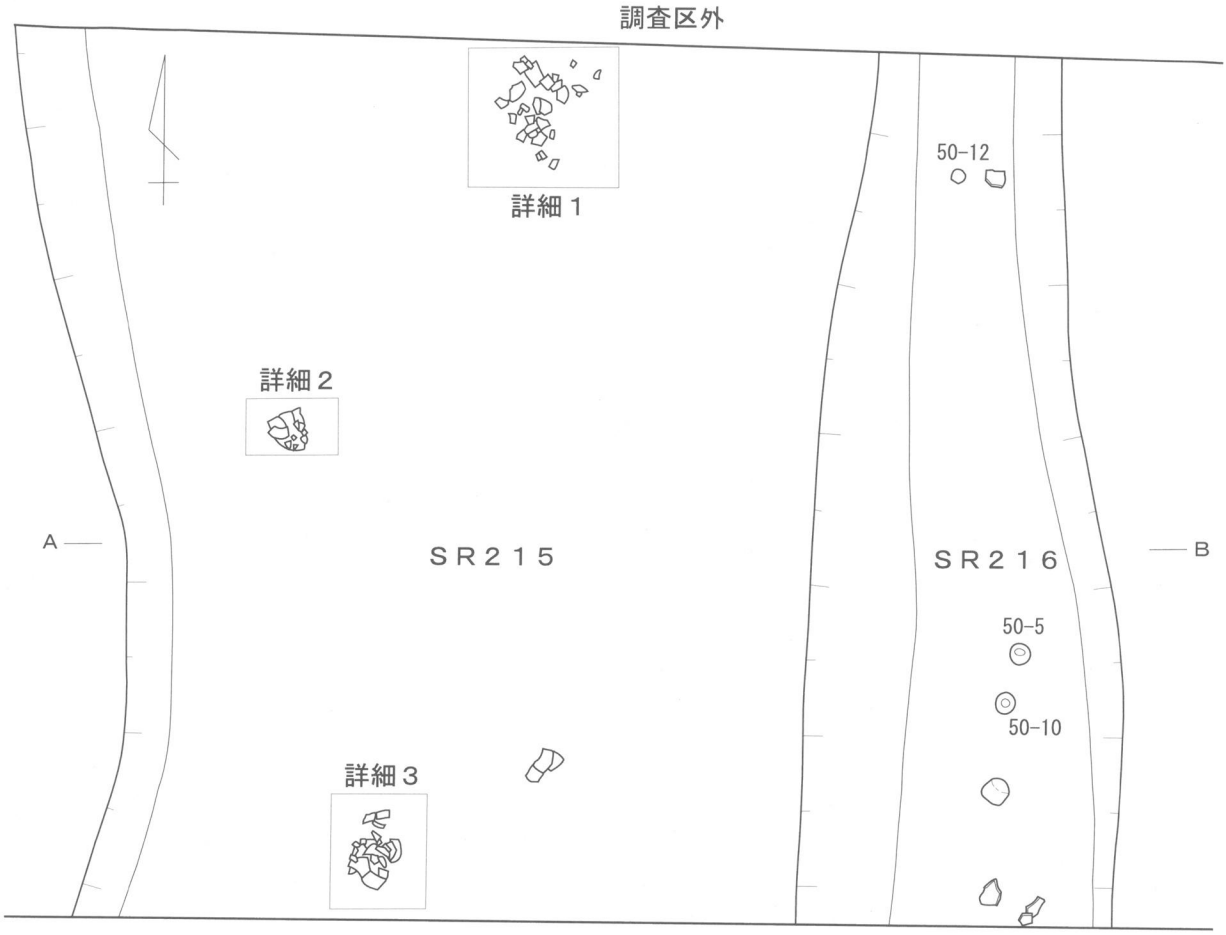
上記のSB303～305はいずれも、出土遺物から８世紀中葉から後葉にかけて作られたと考えられる。浜松市下滝遺跡群などの調査事例から、この地域では８世紀に入ると、住居の主体が掘立柱建物に移行するに従って、竪穴住居の不整形化、小型化、竈の未形成など、形態が崩れていくことが指摘されている。SB303、304は竈が住居の片側に偏って作られており、SB305は、全体の形は明らかでないが、検出できた部分を見る限り、歪んだ方形になると思われる。いずれも竪穴住居跡が消滅する時期に見られる現象の一種と考えられる。

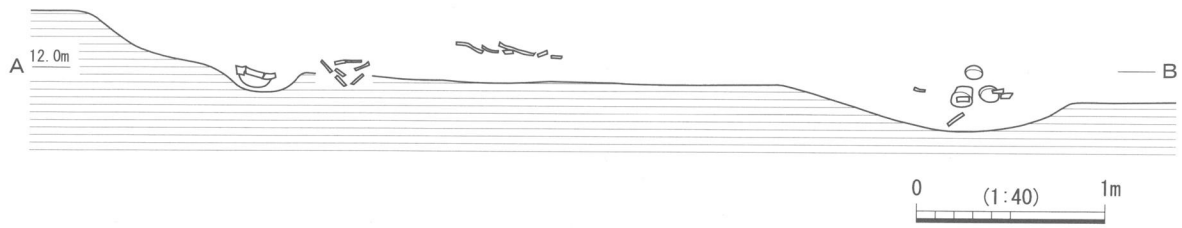
井戸跡

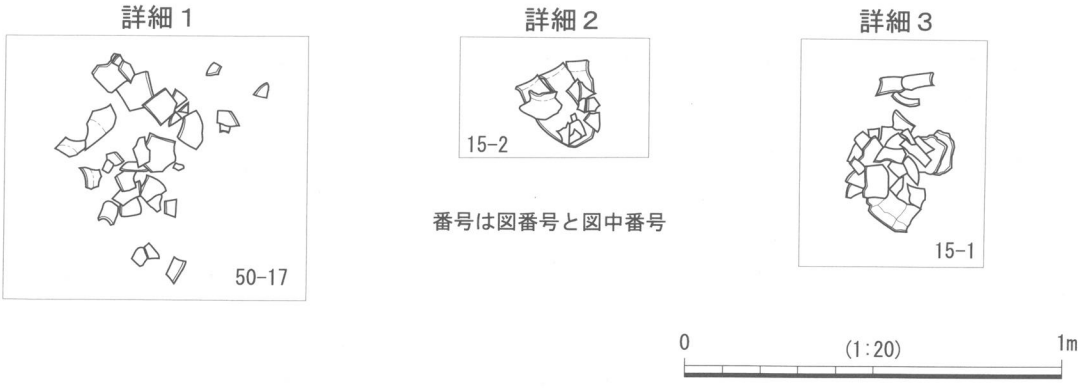
SE301（第24図）

２次調査４区の南西隅で検出した。調査開始当初、ここに排水用のポンプ穴を掘った際、８世紀代の遺物が集中して出土したため、掘削を中止し、遺構を検出したところ、後述するSD201を検出し、その下でこの井戸跡を検出した。調査区の隅で全体の1/4程しか検出していないため、全体の規模は明らかでない。検出面から135cmの深さで砂層を確認したが、湧水のため掘削不可能となり、そこで掘削を止めた。この砂層を基盤層と考えているが、さらに深い可能性もある。水を溜める部分に木枠を入れてあり、底部に近い所には曲げ物を入れてある。木枠は板材を組んであり、一番上の板材だけほぞ継ぎで組み合わせてある。

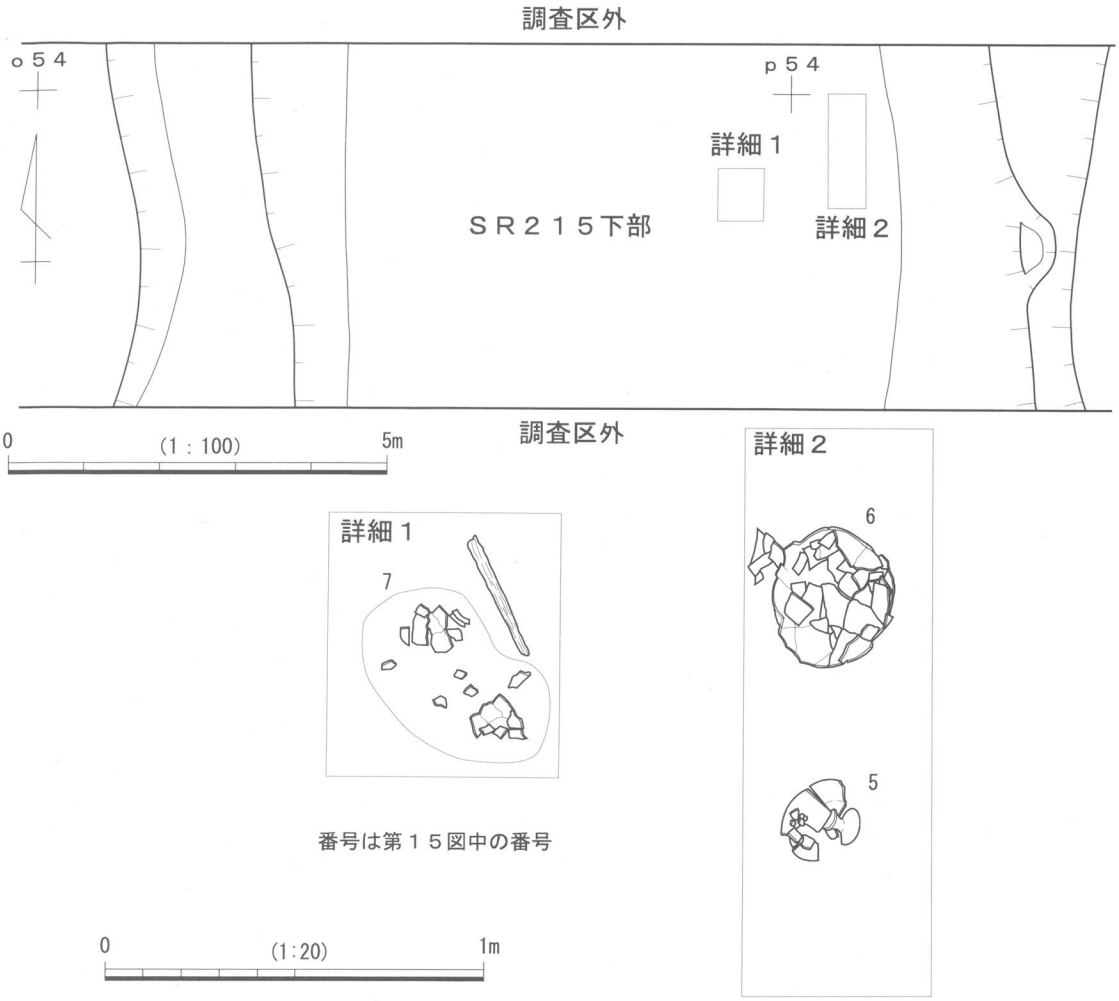
遺物は多量に出土したが、接合しない破片が多く、図化できたものは少ない。８世紀の須恵器（第43図－４、６）、土師器（第43図－８）が出土している他、手捏ね土器（第43図－７）も出土している。







第13図　SR215・216実測図



第14図　SR215下層部実測図

溝状遺構

４区で25本、２区で10本検出した。人工的な溝と自然流路があり、概ね下記の理由で区別した。

人工的な溝（記号はSD）

・概ね南北方向か東西方向で、複数の同規模の溝状遺構が群をなしている。
・同一箇所で何度も掘り直した痕跡がある。
・途中で終っている場合がある。
・一括廃棄された遺物がある。

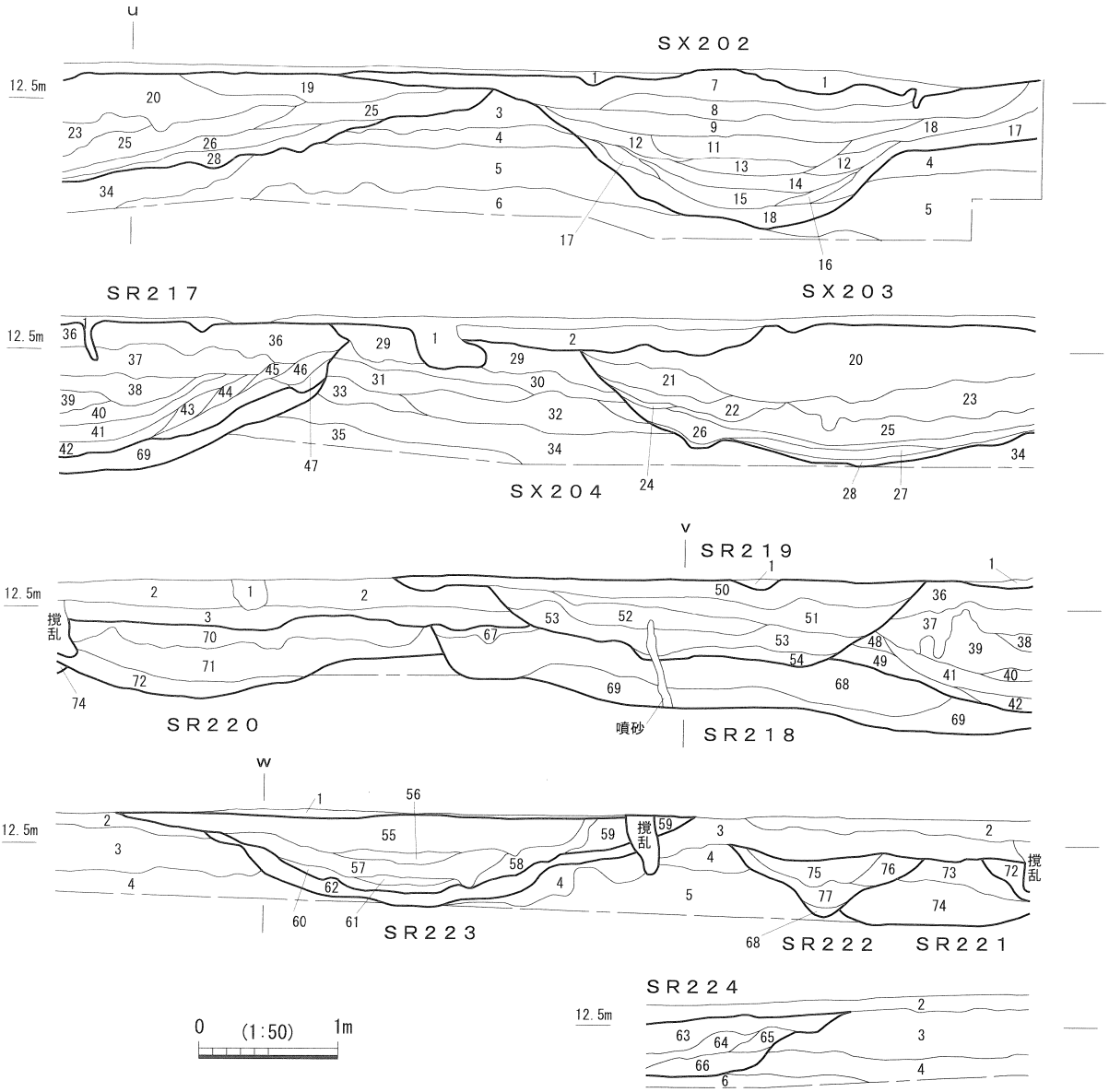
自然流路（記号はSR）

・概ね北東～南西方向で、調査区を斜めに横切っている。
・複数の洪水砂の堆積がみられるなど、長期にわたって水が流れた痕跡がある。
・複数の溝状遺構が不規則に切り合っている状況が見られ、それぞれの規模が違う。
・洪水砂とともに流れ込みの可能性が高い遺物が見られる。

SD212（第５図）

２次調査４区で検出した溝で、埋土が黒褐色土であるため、検出時から目立っていた。他の溝のほとんどが南北方向であるのに対して、これだけが北東～南西方向で、しかも交差する他の溝をすべて切っている。８世紀前半の遺物が多いが、10世紀前半の灰釉陶器（第43図－17）が出土していることから、10世紀前半に埋没したと考えられる。

第15図　SR215出土遺物(1/3)



基本土層
1 灰色土
2 黄灰色土
3 暗灰褐色土
4 暗灰色土
5 黒灰色土
6 灰色砂（下に行くにつれて砂利になる）

SX202
7 明茶灰色土 マンガン多い
8 淡茶灰色土 マンガン多い
9 茶灰色土
10 灰褐色砂
11 淡灰褐色砂
12 褐色砂質土
13 灰色砂 下面に白色粘土が堆積
14 灰色細砂
15 淡灰色粘土
16 淡黄灰色砂 粘土を含む
17 黄白色土 褐色土と灰色土のブロックを含む
18 灰黒色砂 粘土を含む

SX203
19 淡黄灰色土 マンガン多い
20 淡黄褐色土 マンガン多い
21 明黄褐色土
22 灰褐色砂
23 明黄灰色土
24 茶灰色土
25 淡褐灰色砂
26 黄灰色土
27 暗灰色粘土
28 黄灰色土

SX204
29 淡黄灰色土
30 淡黄褐色土 灰色土のブロックを含む
31 灰褐色土 マンガンを含む
32 暗灰色土
33 暗灰色土 鉄分多い
34 黒灰色土
35 黒灰色砂質土

SR217
36 明褐灰色土
37 褐灰色土 鉄分含む
38 灰褐色砂
39 淡灰褐色砂 炭化物を含んでいる
40 褐灰色砂
41 灰色砂
42 灰色粘土
43 暗灰白色土
44 黄灰白色土
45 淡褐灰色土 鉄分を含む
46 淡褐灰色土
47 明褐灰色土
48 褐灰色土
49 暗灰白色土

SR219
50 褐灰色土
51 明褐灰色土
52 灰褐色土
53 褐色土
54 暗灰白色土

SR223
55 黄褐色土 マンガン多い
56 黄褐色土
57 暗褐灰色砂質土
58 灰褐色土
59 黄褐色土 灰色土のブロック含む
60 灰褐色土
61 灰褐色砂質土
62 暗黄灰色土

SR224
63 灰褐色土 マンガン多い
64 黄褐色土 マンガン多い
65 黄灰色土
66 暗灰色砂

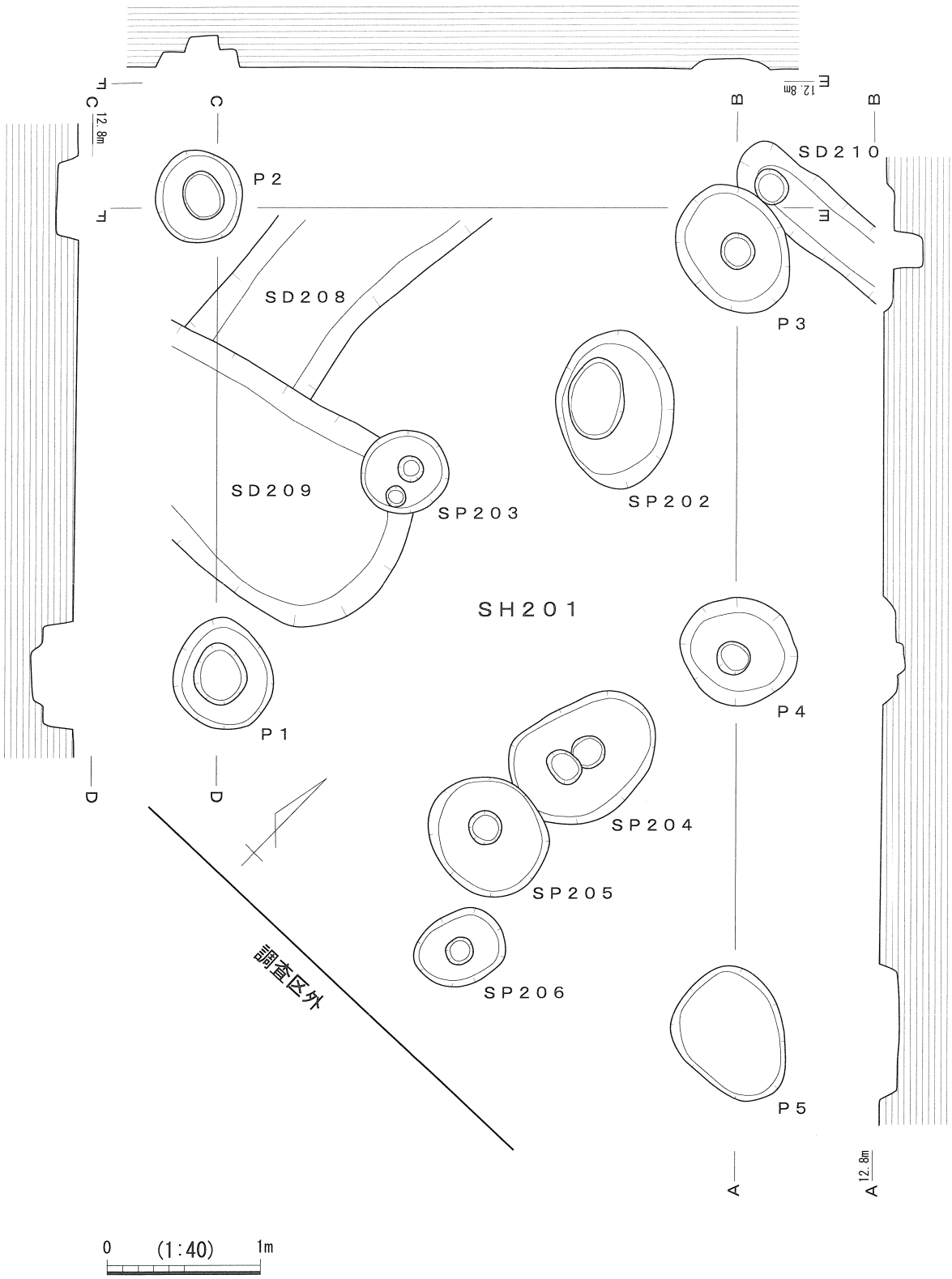
SR218
67 暗灰褐色土
68 明灰色土 鉄分含む
69 黒灰色土

SR220
70 暗灰褐色土
71 暗灰色土
72 灰色砂

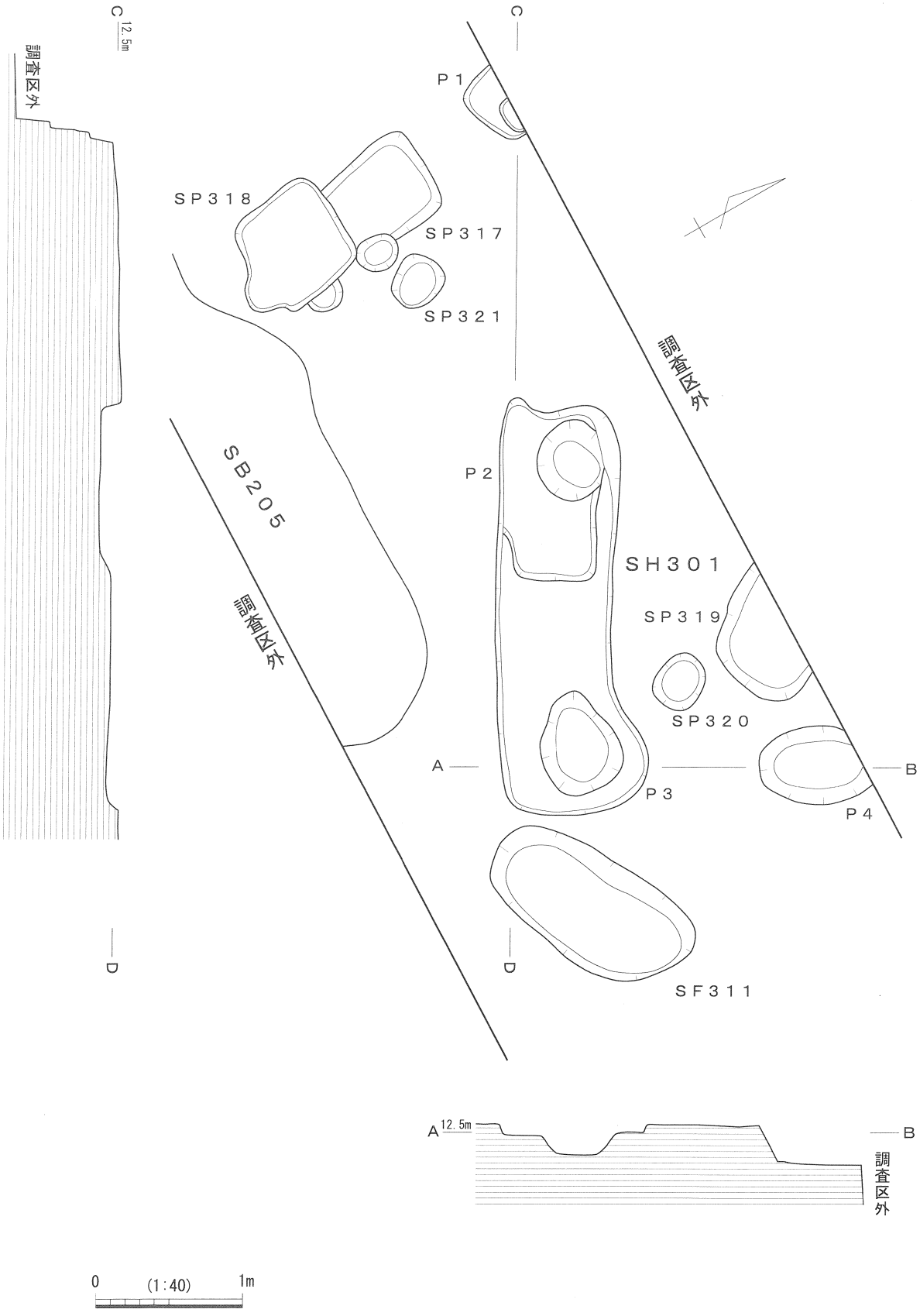
SR222
75 暗灰褐色土 灰色土のブロックを含む
76 暗灰褐色土 鉄分、灰色土のブロック多い
77 淡茶灰色砂
78 灰色砂

SR221
73 暗灰褐色土
74 暗期灰色砂 鉄分多い

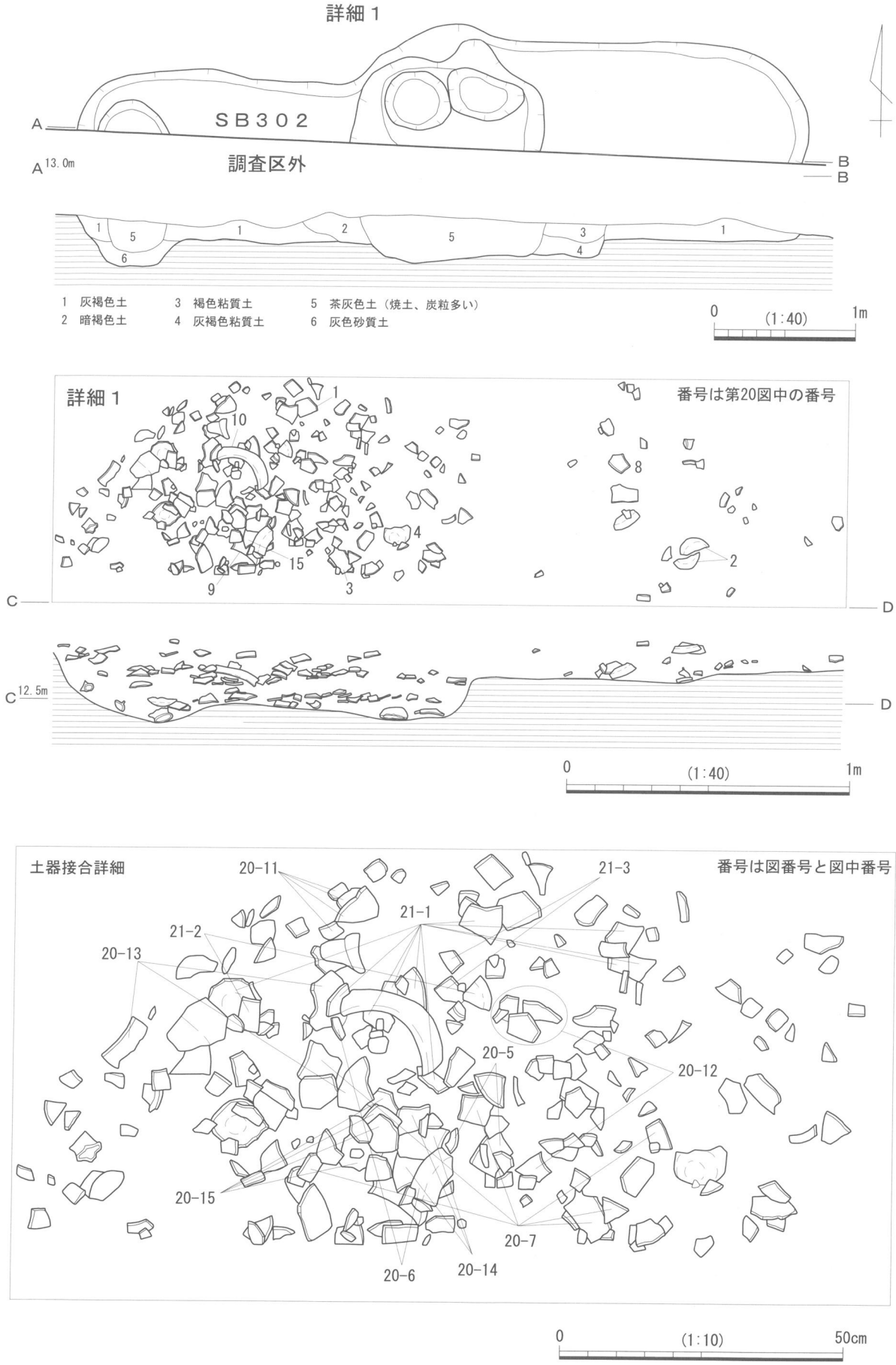
第16図 1区南壁断面図



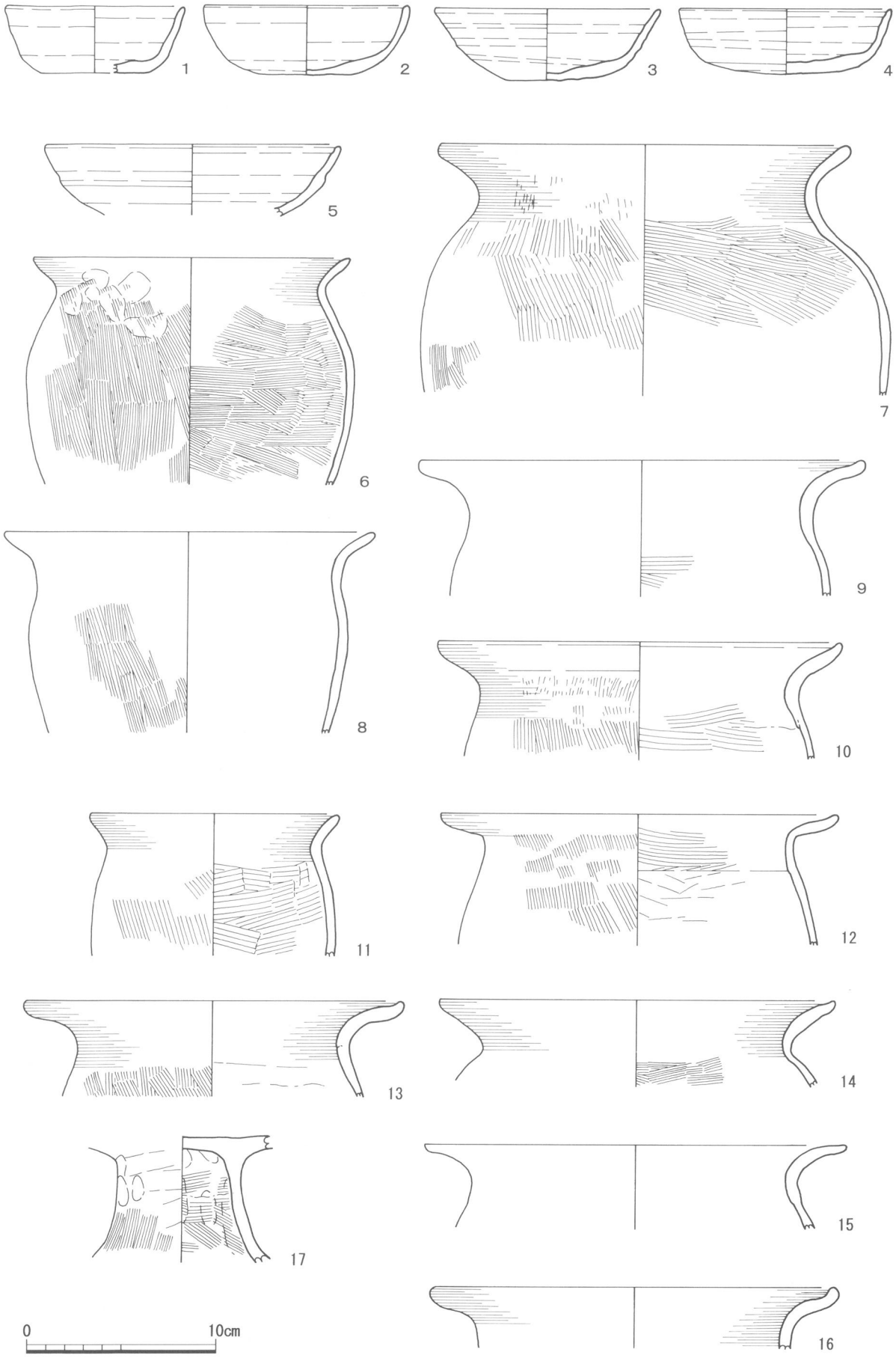
第17図　SH201実測図



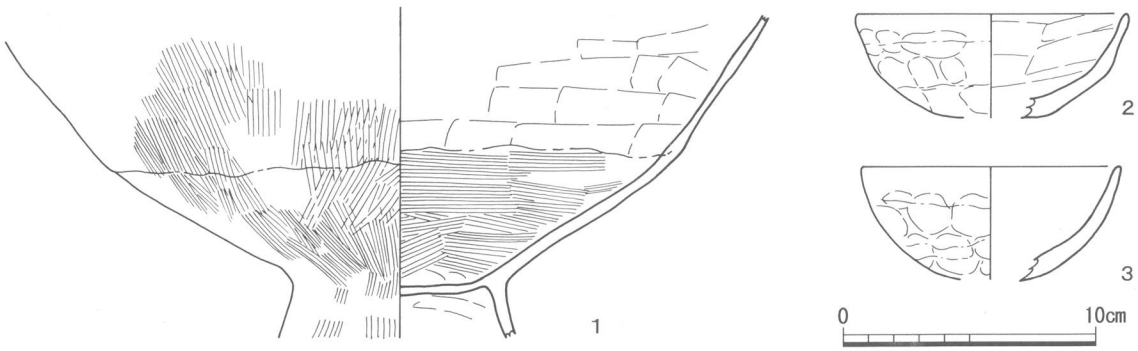
第18図　SH301実測図



第19図　SB302実測図



第20図　SB302出土遺物１(1/3)



第21図　SB302出土遺物２(1/3)

SD213、SD214（第５図）

両方とも幅が２m程ある浅い溝で、南北方向に平行している。本来の掘り込み面は攪乱で失われいてるため、検出できた深さは10cm程度しかない。同規模の溝で並行しているため、二重の区画溝の可能性がある。SD213からは10世紀前半の灰釉陶器（第43図－18）、SD214からも同様の灰釉陶器（第43図－19）が出土していることから、ほぼ同時期の溝といって良い。

SD201～211、215～221、223～237、242(第５、６図)

これらは小規模溝群で一括するが、方向によって細分すると下記のようになる。

北－南：201、202、203、204、205、206、209、220、223、229、235、236、237、238、239、240、241、242

東－西：208、210、211、216

北西－南東：207、215、224、225、226、227、232、234

北東－南西：217、218、219、221、228、230、231、234

南北－東西：233（方形区画か）

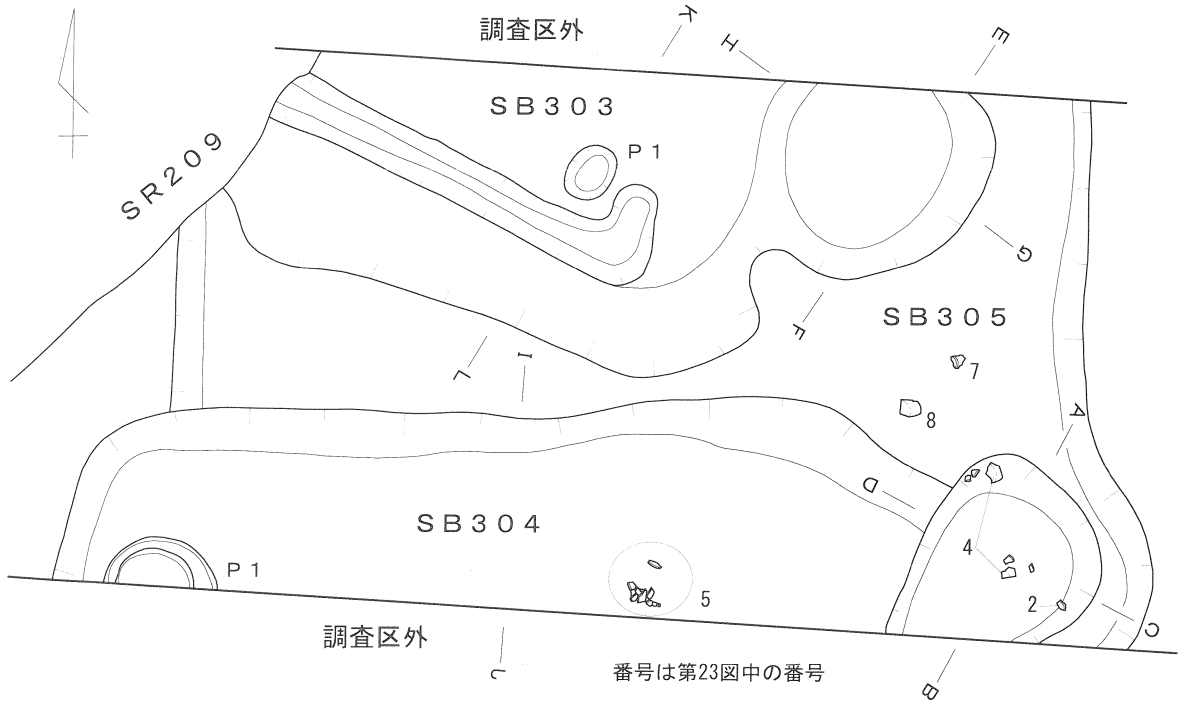
北西－南東方向の小規模溝群は、周辺の恒武遺跡群、笠井若林遺跡などでも検出されており、確証はないものの、畑耕作に関する溝と推定されている。

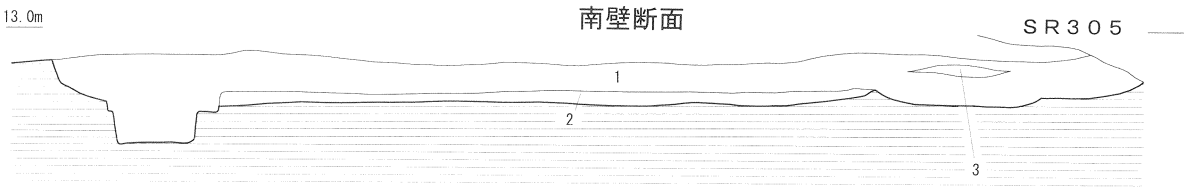
北東－南西方向のものは、自然流路と同じ方向であることから、自然流路の誤認が含まれているかもしれない。またSD223は、第48図に断面を示したように、他の溝よりも上層から切り込んでいる。古代の溝と考えているが、他の溝よりも新しいことになる。以上のうち、４区で検出したSD202～220は溝同士の切り合いや他の遺構との切り合いも見られるため、第25図に断面を示す。また、SD223～225、230、231の断面図を第47図に示す。

遺物は少ないが、SD201では須恵器の坏（第43図－13）、SD204から須恵器の壷（第43図－14）、９世紀末～10世紀の灰釉陶器（第43図－15）、SD206から８世紀代の須恵器の坏（第43図－16）、SD218から土師器の坏（第43図－20）が出土している。また、SD205からは獣足（第43図－25）が出土している。

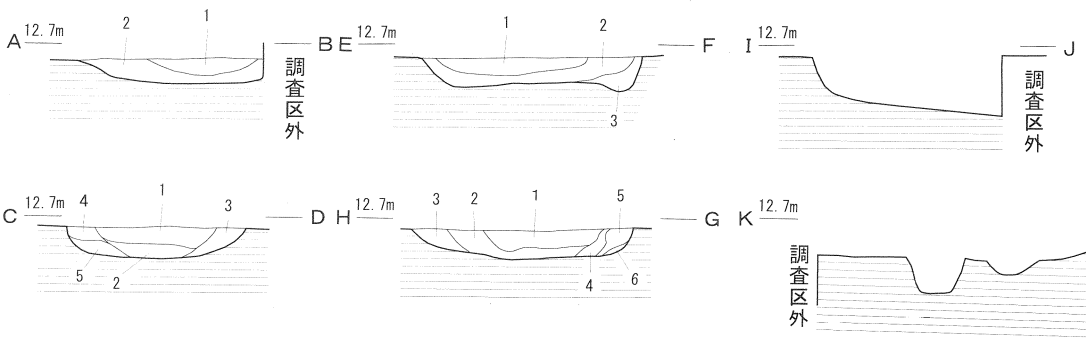
SD326（第26図）

２区で検出した南北方向の溝で、７世紀第４四半期の土器（第27図－１～18）が一括して出土した。湖西産と考えられる須恵器（第27図－５）が見られるほか、丹塗りの土師器（第27図－16、17、19）や手捏ね土器（第28図－24）が見られる。溝の埋土は褐色土で、多量の炭粒を伴っており、溝の中で火を焚いたような状況であったが、土器が焼けた形跡はない。また、調査区の北壁と南壁で、この溝がかかる部分を掘削したところ、壁から10cmほど掘った所で、溝が終っているように見えた。本来の調査区外なので、正確な判断はできないが、この所見が正しければ、溝のように細長い土坑ということになる。また、８世紀後半の土師器（第27図－19～24）も明らかに伴っていることから、埋没時期は８世紀後半ということになる。





1 明茶灰色土（SB304埋土）
2 褐色土（SB304床土）
3 炭と焼土

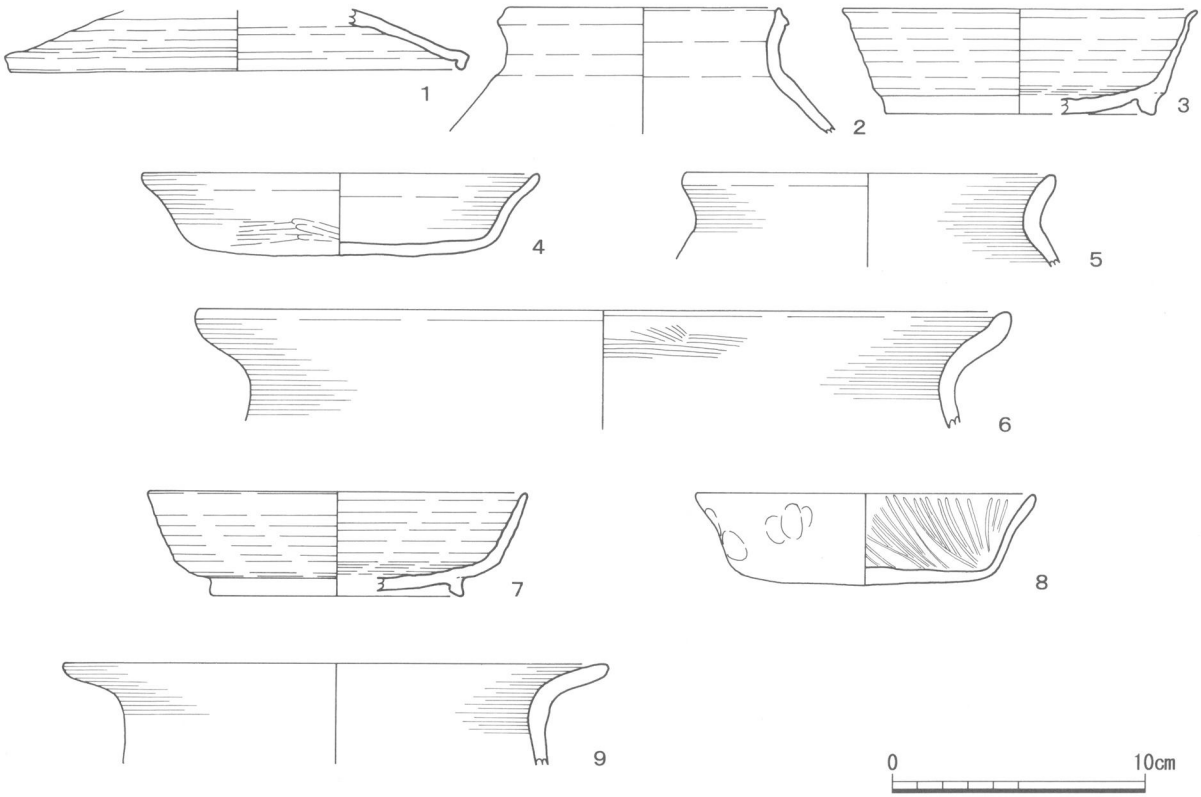


1 茶灰色土
（炭、焼土多い）
2 褐色土
（炭、焼土多い）
3 淡褐色土
4 茶灰色土
5 淡茶灰色土
（炭多い）

1 淡褐色土
2 褐色土
3 茶灰色土
4 黒褐色土（炭、焼土多い）
5 淡茶灰色土（煙道）
6 茶灰色土（煙道）

0 (1:50) 1m

第22図 SB303・304・305実測図



第23図　SB303・304・305出土遺物（1/3）

SD222（第28図、第29図）

２次調査２区で検出した南北方向の溝で、溝の埋土中と溝の周辺で遺物が集中して出土した。遺物は、溝の検出面でレベルが揃って出土したものと溝の埋土上層で出土したものがあるが、両者に接合関係があるため、一括して扱う。また、溝周辺の包含層から出土した遺物も、溝埋土内の遺物と接合するものがあるため、包含層出土ではあるが、ここではSD222出土遺物と一括して扱う。

７世紀第４四半期の須恵器（第43図－21、第52図－５）、８世紀後葉の須恵器（第52図－８）、10世紀前半の灰釉陶器（第52図－13）などが見られる。

SD222付近では、溝SR208と流路SD328～332が切りあって検出できたため、第29図に断面を示す。出土遺物が少ないため、時期判断に苦しむが、SD329は８世紀後半の遺物が出土している。また、SD328からは須恵器の壷（第43図－24）が出土しているが、時期は不明である。

SD403（第６図）

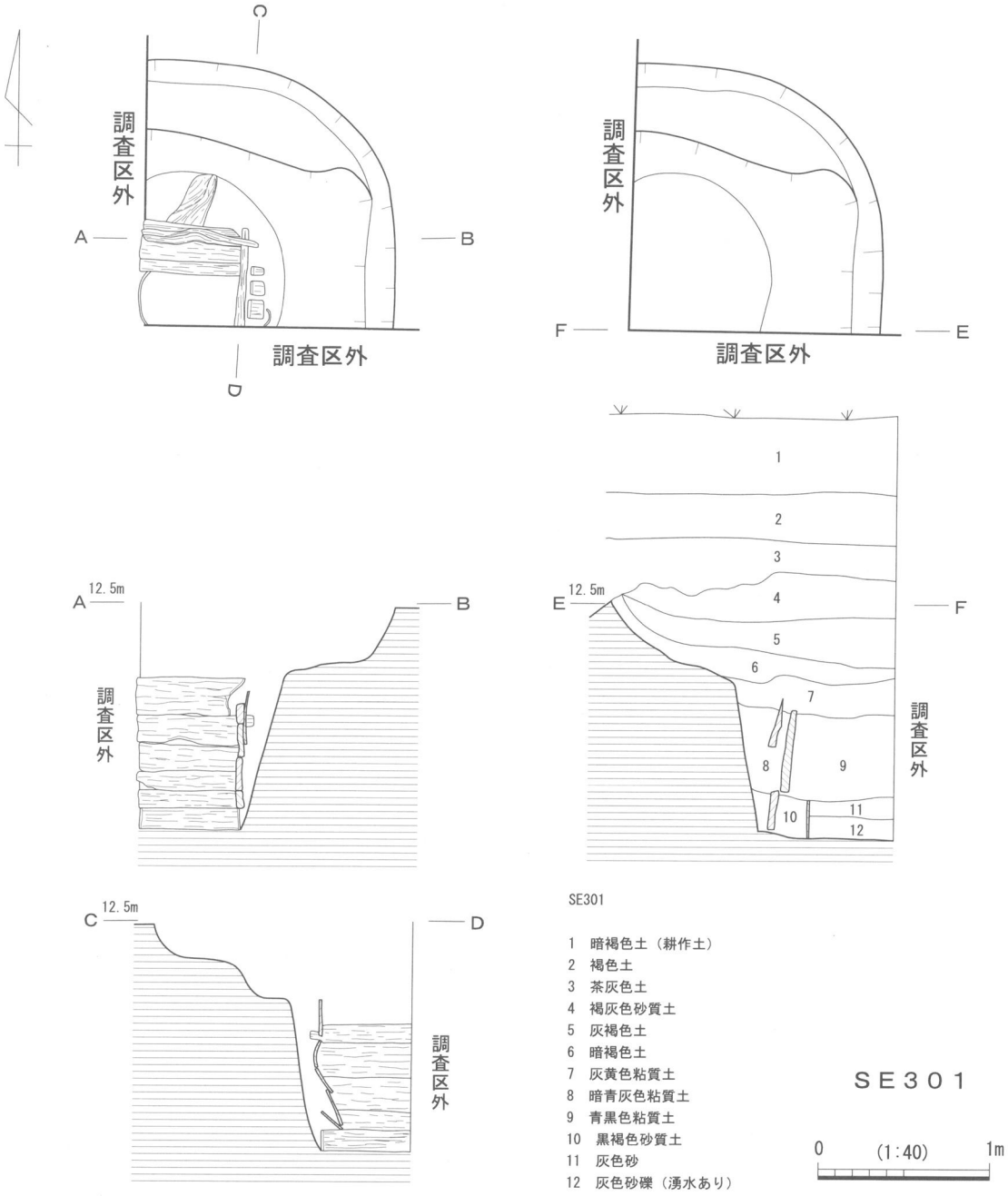
南西から北東方向に走る溝で、途中で直行する方向の溝が交わっている。区画溝の可能性がある。埋土は淡褐色砂質土である。遺物が出土していないが検出面から考えて、奈良・平安時代であろう。

柱穴跡（第５、６図）

４区と２区２面目、３面目では多くの柱穴跡を検出した。柱痕が見られるものが多く、布掘りと思われるものもあることから、掘立柱建物跡の柱穴と考えた。調査区が細長いため、組み合わせを明らかにできないが、本来は掘立柱建物跡が数棟あると考えられる。埋土は、いずれの土坑も褐色砂質土で共通していることから、近い時期のものと考えられる。

畑状遺構（第５図下段）

４区では南北方向と東西方向の溝が交わり、方形の区画をしたような遺構が見られた。形状から畑のような遺構と考えられる。また、この畑状遺構の東側でも、途中で途切れながらも類似の溝状遺構を検出している。これも畑状遺構の痕跡であろう。



第24図　SE301実測図

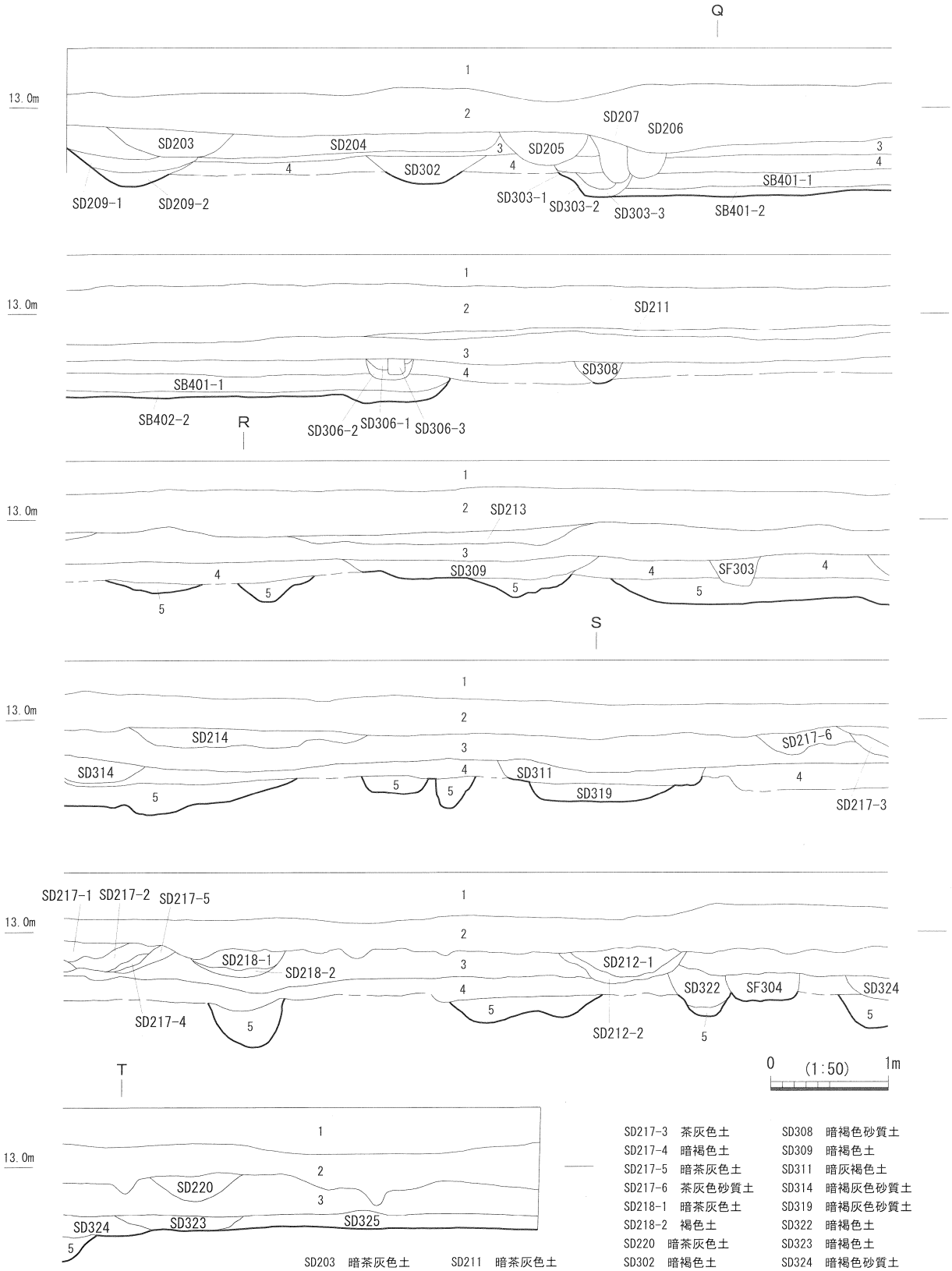
自然流路跡

SR301～303（第６図）

いずれも北東～南西方向で、調査区を斜めに横切っている。上層で検出したSR205、SR206に切られていることや同じ方向であることから、SR205、SR206と一連の流路と考えられる。SR302からは８世紀中葉の須恵器（第44図－４）、８世紀前半の須恵器（第44図－７）、時期不明の土師器（第44図－６）が出土している。

SR202（第６図）

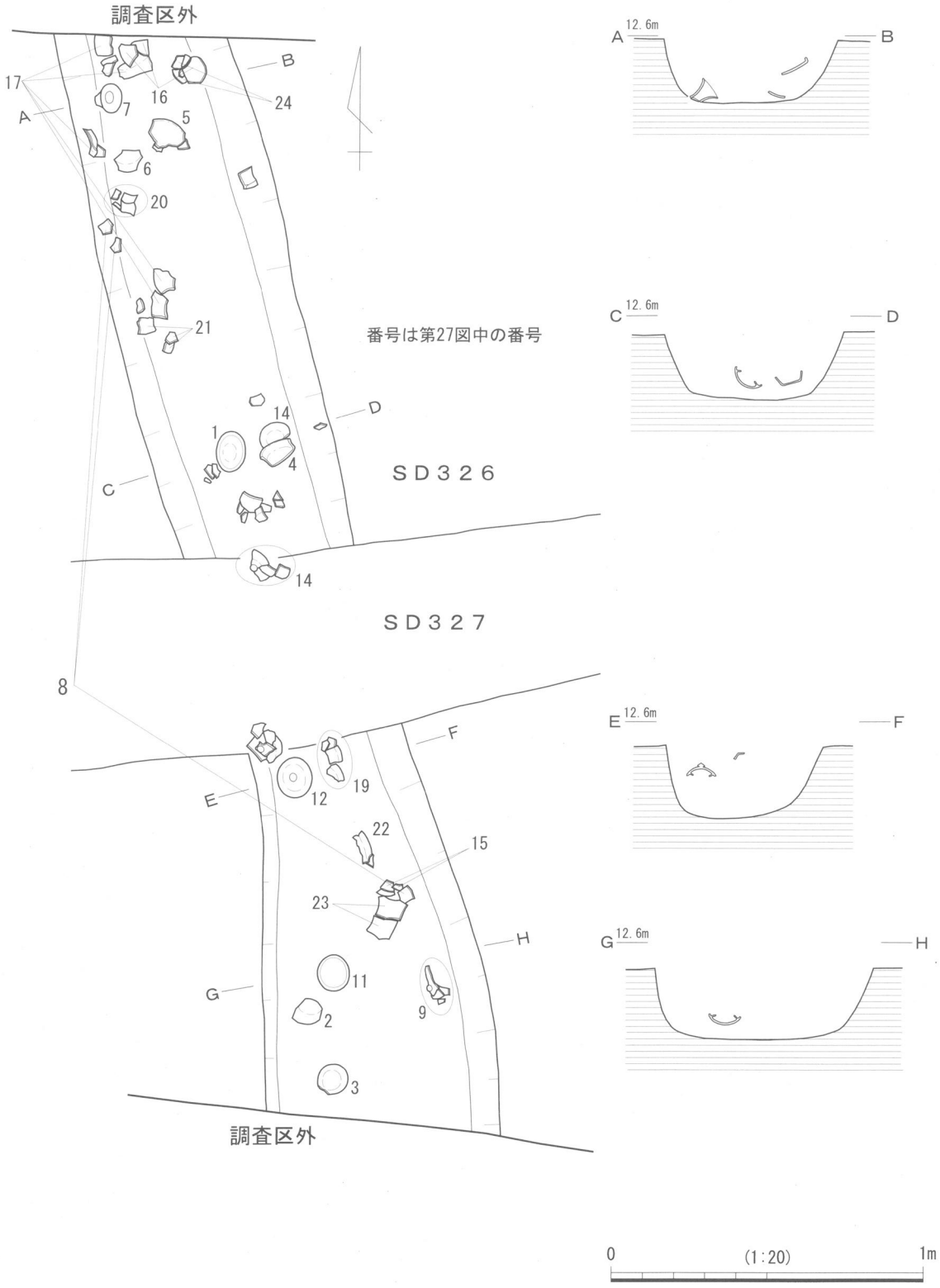
２次調査３区で検出した流路である。北西側は調査区外に出ているため、幅はわからない。下層の埋土は砂が目立ち、ラミナの発達も認められる（第30図）。19層上面では奈良時代の土器が多く出土し、洪水で一気に流されてきた状況である。また、30層上面では、同じく洪水砂に乗るようにして土器と、



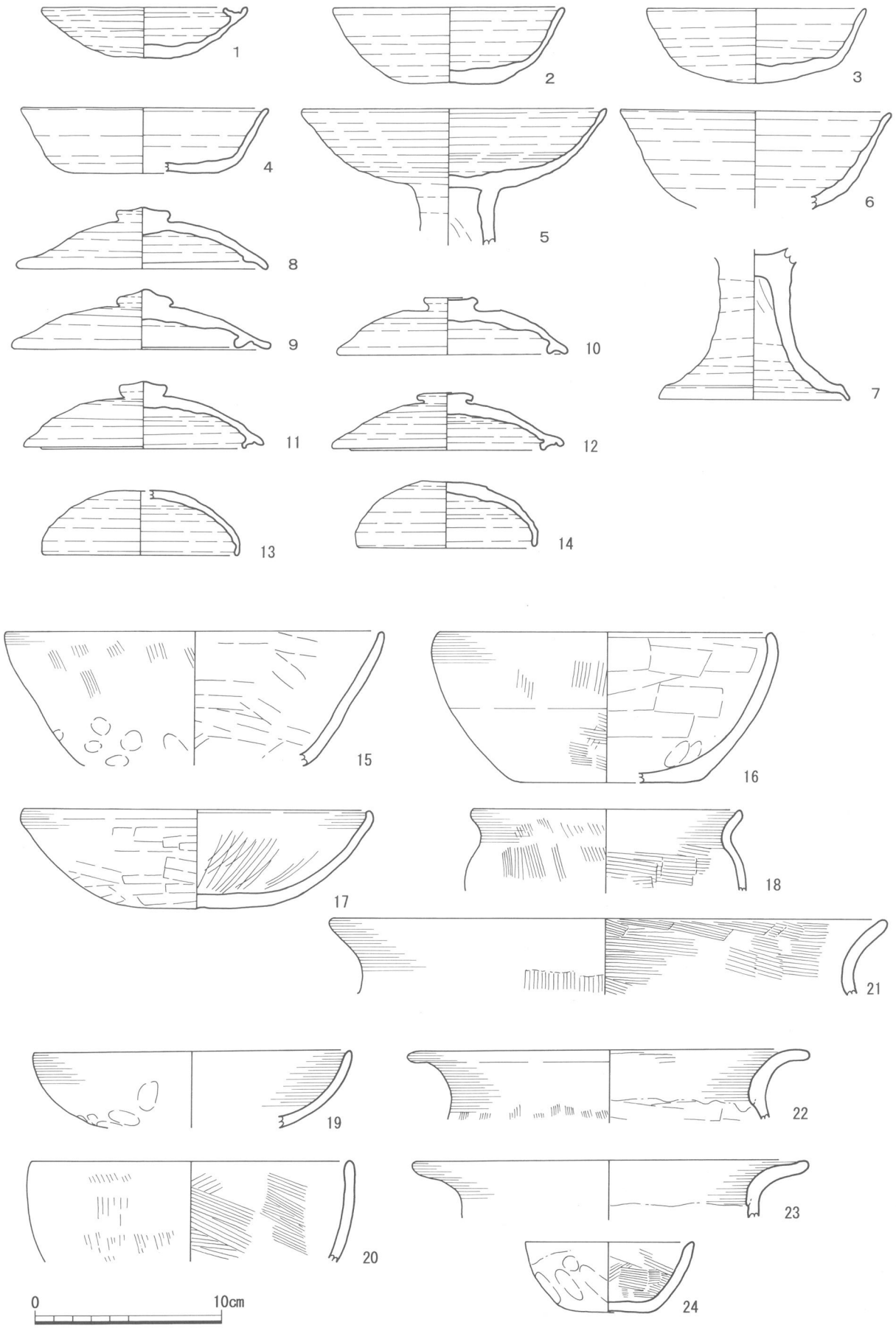
1 黒褐色土（耕作土）
2 茶灰色土（中世）
3 褐色土（古代）
4 灰色砂質土
5 灰色砂と灰色粘土の斑

SD203 暗茶灰色土
SD204 暗茶灰色土
SD205 暗茶灰色土
SD206 灰褐色土
SD207 褐灰色土
SD209-1 褐灰色土
SD209-2 灰色粘質土
SD211 暗茶灰色土
SD212-1 暗茶灰色土
SD212-2 暗茶灰色砂質土
SD213 暗茶灰色土
SD214 暗茶灰色土
SD217-1 暗茶灰色土
SD217-2 暗茶灰色砂質土
SD217-3 茶灰色土
SD217-4 暗褐色土
SD217-5 暗茶灰色土
SD217-6 茶灰色砂質土
SD218-1 暗茶灰色土
SD218-2 褐色土
SD220 暗茶灰色土
SD302 暗褐色土
SD303-1 暗褐灰色土
SD303-2 暗茶灰色土
SD303-3 褐色土
SD306-1 暗褐色土
SD306-2 灰色砂質土
SD306-3 褐色土
SD308 暗褐色砂質土
SD309 暗褐色土
SD311 暗灰褐色土
SD314 暗褐灰色砂質土
SD319 暗褐灰色砂質土
SD322 暗褐色土
SD323 暗褐色土
SD324 暗褐色砂質土
SD325 暗褐灰色土
SF303 暗褐色土
SF304 暗褐色土
SB401-1 暗灰褐色土（埋土）
SB401-2 灰色砂質土（床土）

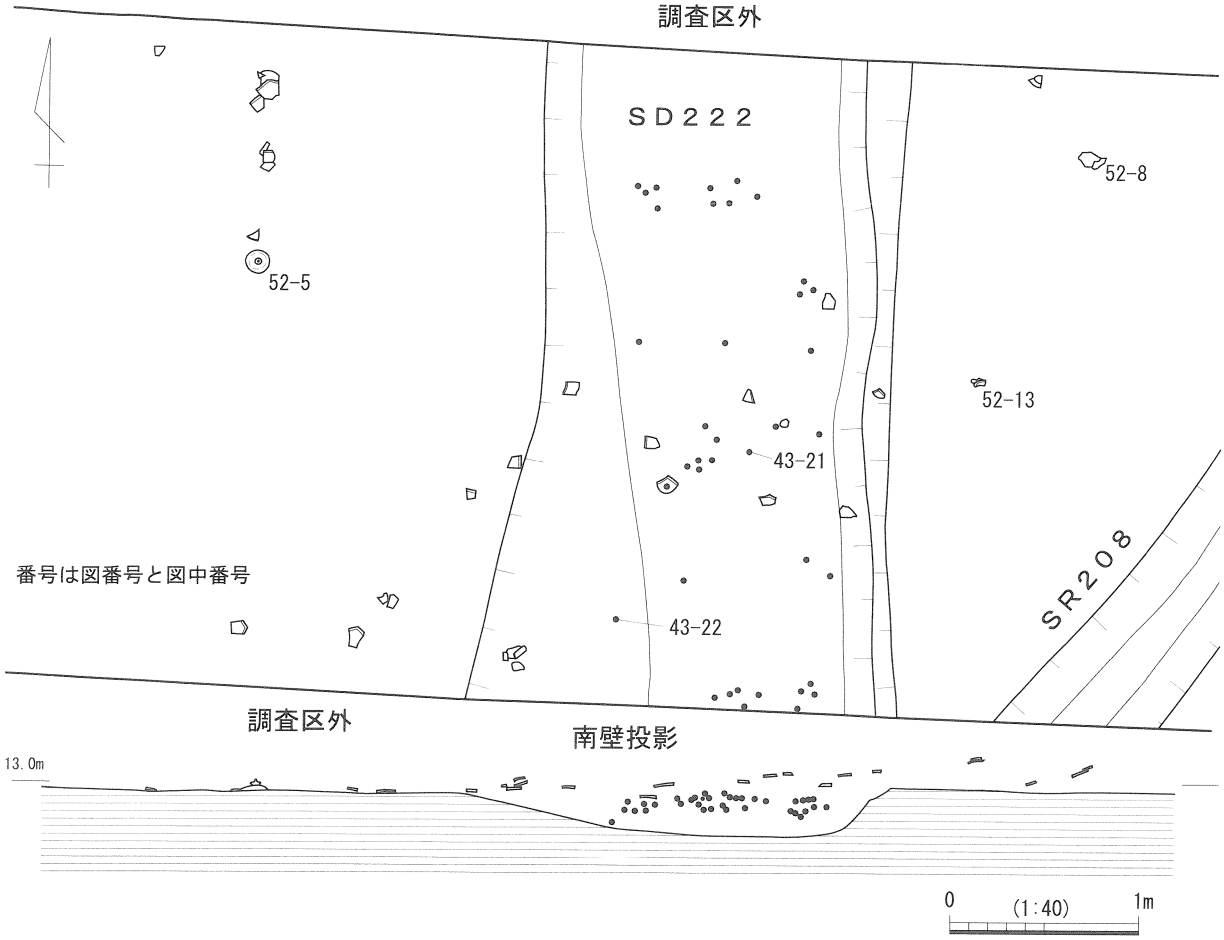
第25図　4区北壁断面図



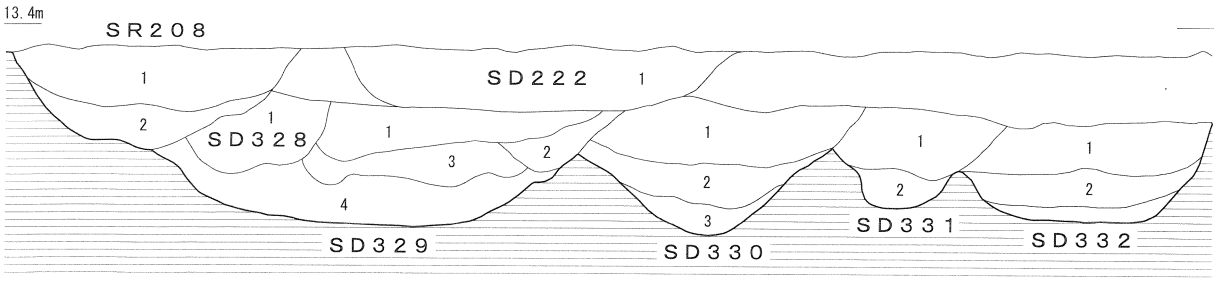
第26図　SD326実測図



第27図　SD326出土遺物(1/3)



第28図　SD222実測図



SR208
1　茶灰色土
2　暗茶灰色土

SD222
1　褐色土

SD328
1　褐色土

SD329
1　茶灰色土
2　明褐色土
3　灰褐色土
4　灰褐色砂質土

SD330
1　明褐色土
2　灰褐色土
3　灰褐色砂質土

SD331
1　明茶灰色土
2　灰褐色土

SD332
1　明褐色土
2　褐色土
3　褐色砂質土

0　(1:40)　1m

第29図　SD222他断面図

牛か馬の下顎骨がまとまって出土した（第31図上段）。洪水で流れてきた状況だが、土器の割れ面が摩滅していないことから、近くから流れてきたと思われる。遺物は、８世紀を主体として９世紀後半～10世紀前半のものまで見られる（第32図）。第32図－28の高盤は丹塗りである。30のミニチュア土器、31、33の獣足、32の馬形の土製品など、祭祀関連遺物も見られる。なお、溝の上面付近で、わずかながら12世紀末～13世紀初頭の常滑産山茶碗（第33図－15）などが出土している。したがって、奈良・平安時代を主体としながらも中世までは流路が続いていたらしい。この流路は、恒武西浦遺跡（埋文研1997年調査、2000年報告）で検出・報告したSR30とした流路と、複数の洪水跡を示し、ラミナが発達した砂の多い埋土といった状況や、流路の下面近くで、洪水砂に伴って遺物の集中する状況、溝の規模などが酷似しており、さらに方向もほぼ一致しているため、恒武西浦遺跡のSR30の延長の可能性が高い。

SR203（第６図）

SR201に隣接する流路で、SR201が単独の流路であるのに対して、断面観察から、複数の小流路が切り合って見かけ上、1本の流路になっている（第30図）。何度も流路を変えながら埋没していったらしい。この流路からは８世紀初頭の須恵器(第33図－６)、８世紀前半の須恵器（第33図－２、４、５、７～９）、８世紀中葉の須恵器（第33図－10）、９世紀前半の灰釉陶器（第33図－16）が出土している。土器は流路上層でレベルを揃えて出土したのものが多い（第31図断面投影図）。溝の上面付近では、わずかながら12世紀後半の山茶碗（第33図－14）が出土していることから、奈良・平安時代を主体としながらも中世までは流路が続いていたらしい。

SR204（第６図）

２次調査の２区と３区にまたがって検出した。全体の幅は10mを超える。２つの調査区にまたがって検出したため、通しの断面を観察できなかったが、断面の観察から、小規模な流路が何本も切りあっており、少なくとも９本の小規模な流路が頻繁に流路を変えていたことが観察できる（第30図）。砂礫を主体とする埋土は見られないことから、洪水のような激しい流れはなかったと考えられる。

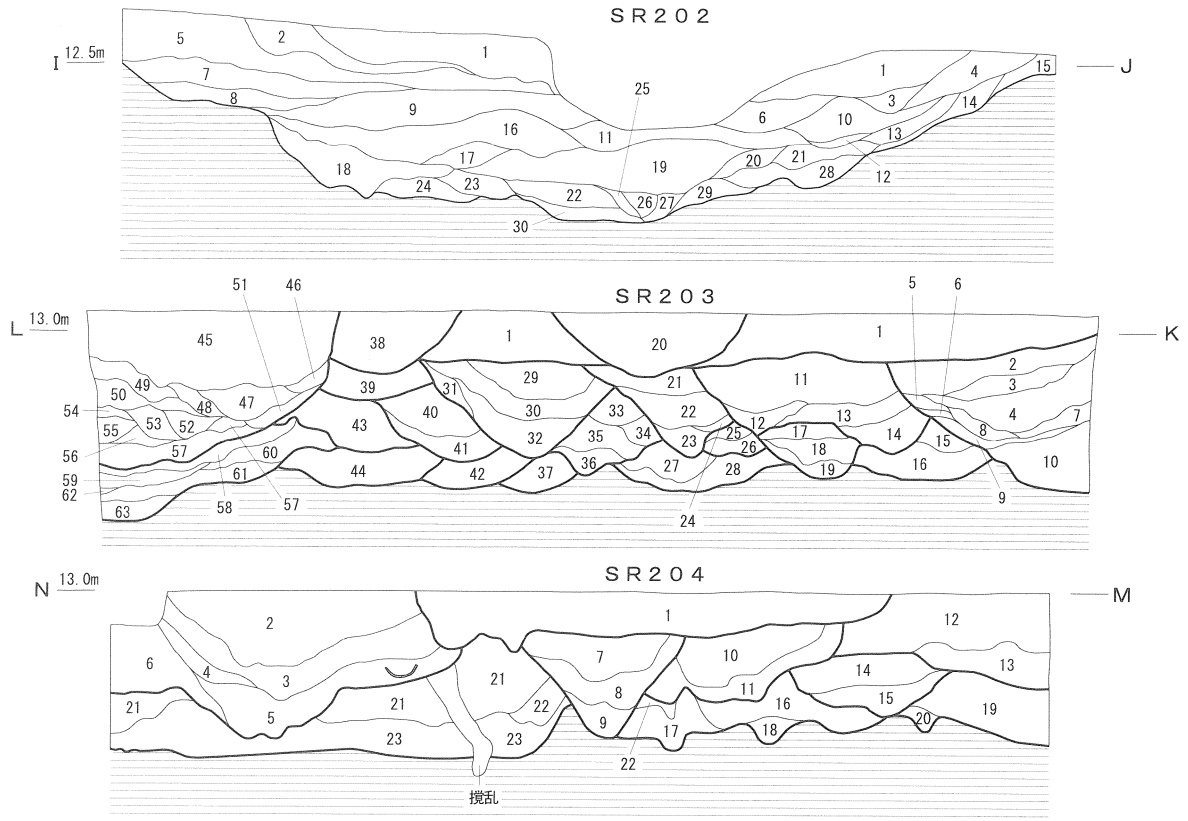
遺物は、７世紀後半の遺物（第33図－17～19、23）、８世紀前半の遺物（第33図－24、25、27）８世紀後半の遺物（第33図－21）が出土している。８世紀後半にはほとんどの部分が埋没していたと考えられる。また、祭祀関連と思われる遺物（第33図－25）も出土している。なお、溝の上面付近ではごくわずかながら中世の鍋（第33図－29）が出土している。したがって、８世紀後半にはほぼ埋没していながら、中世までは流路が続いていたらしい。

SR205、206（第6図）

２次調査３区で検出した流路で、上記のSR201～SR204と同一方向の流路であり、一連の流路と考えて良い。また、SR205の下層では、先述のSR302、SR206の下層でも、先述のSR301を検出しており、それぞれ同一方向で、規模も似ていることから、これらも一連の流路として考えて良い。SR205から７世紀第4四半期の須恵器（第44図－2）が出土している。

SR213（第35図）

1次調査1区で検出した幅の広い流路である。方向は北東－南西方向である。埋土は小礫を含んだ砂層を主体として、所々に粘土層をはさんでおり、複数回の洪水跡を示している（第35図）。断面を詳細に観察すると、幅の広い流路の中央付近に砂礫が堆積して、これを挟んで２本の流路に分かれた後に、徐々に埋没していったと考えられる。この流路の中層から下層にかけて、８世紀中葉～９世紀初頭の遺物が多く出土した（第36図～第42図）。遺物は流れ込んだ状態で、流路全体に広がるように出土しており、下層に堆積した砂礫層の直上に堆積したシルト層から特に多く出土した。割れ面が風化していないうえに、一個体に復元できるものが多く、ごく近くから流れてきたと考えられる。須恵器、土師器ともに各器種が揃っているが、祭祀関連の遺物が目立ち、列記すると下記のとおりである。



SR203-1
1　淡茶灰色土

SR202-2
2　茶灰色土　Mn粒を含む
3　茶灰色土　灰色粘質土のブロックとMn粒を含む
4　茶灰色土　Mn粒多い
5　灰色土
6　灰色土　灰褐色土のブロックを含む
7　茶灰色土　灰褐色土のブロックを含む
8　灰色土　灰褐色土のブロック多い
9　茶灰色粘質土　Mn粒を含む
10　茶灰色砂　Mn粒を含む

SR203-3
11　茶灰色土　Mn粒を含む
12　茶灰色土　灰色土のブロックを含む
13　茶灰色土　Mn粒多い
14　茶灰色砂質土　Mn粒多い

SR203-4
15　灰褐色砂
16　褐色砂

SR203-5
17　灰褐色土　Mn沈着
18　灰色砂質土
19　灰色砂

SR203-6
20　茶灰色土

SR203-7
21　茶灰色砂質土
22　茶灰色砂質土　Mn沈着
23　茶灰色砂
24　灰色砂質土

SR203-8
25　淡灰褐色砂質土
26　灰褐色砂質土（Mn沈着）

SR203-9
27　褐色砂
28　灰褐色砂

SR203-10
29　茶灰色土（Mn沈着少し）
30　茶灰色土（Mn沈着）
31　褐色砂質土（Mn多い）
32　暗褐色土

SR203-11
33　茶灰色土（Mn沈着）
34　灰褐色土
35　灰色砂質土（Mn沈着）
36　灰褐色砂質土

SR203-12
37　褐色砂

SR203-13
38　茶灰色土

SR203-14
39　茶灰色土（Mn沈着）

SR203-15
40　灰褐色土（Mn沈着多い）
41　褐色砂質土

SR203-16
42　褐色砂

SR203-17
43　褐色砂質土（Mn多い）

SR203-18
44　灰色砂（他より細かい）

SR203-19
45　茶灰色土
46　茶灰色弱砂質土
47　灰色土　Mn粒少しある
48　灰色弱砂質土
49　淡灰褐色土
50　淡灰褐色土　Mn粒少しある
51　茶灰色土　Mn粒ある
52　淡灰褐色土　土層にMn粒　下層にFe沈着
53　淡灰褐色弱砂質土　Fe沈着
54　茶灰色土
55　灰色砂質土
56　淡茶灰色土　Fe多い
57　灰色砂質土　下層に砂多い

SR203-20
58　灰色砂質土　13層より細かい
59　黄灰色砂　ザラザラ
60　淡灰色砂　Fe少し沈着
61　灰色砂質土　細かい
62　黄灰色砂　15層より細かい
63　灰色砂と褐色粗砂と小礫

SR202
1　茶灰色土　鉄分多い
2　灰色土
3　淡灰色砂
4　茶灰色土
5　灰色土　マンガン多い
6　灰色砂質土　ラミナあり
7　灰色砂質土
8　白色砂
9　オリーブ灰色砂質土
10　灰白いと砂質土　ラミナあり
11　灰色土
12　灰白色砂
13　褐色砂質土　ラミナあり
14　淡褐色砂質土
15　淡褐色土
16　淡灰色砂質土
17　白色砂と灰色砂質土の斑
18　灰色砂質土
19　白色粗砂　これの上面に土器多い
20　黒灰色砂質土
21　淡灰褐色土
22　黒灰色粘質土
23　白色砂
24　オリーブ灰色砂
25　オリーブ灰色砂質土
26　黒褐色砂
27　灰褐色土
28　灰褐色土
29　褐色砂
30　灰色砂

SR204-1
1　淡茶灰色土

SR204-2
2　淡灰色土
3　茶灰色土
4　茶灰色土　マンガン多い
5　茶灰色砂質土
6

SR204-3
7　茶灰色土
8　茶灰色土　マンガン沈着
9　灰色砂質土

SR204-4
10　淡褐色土
11　茶灰色土

SR204-5
12　茶灰色土
13　褐色砂質土　鉄分沈着

SR204-6
14　茶灰色砂質土
15　茶灰色砂

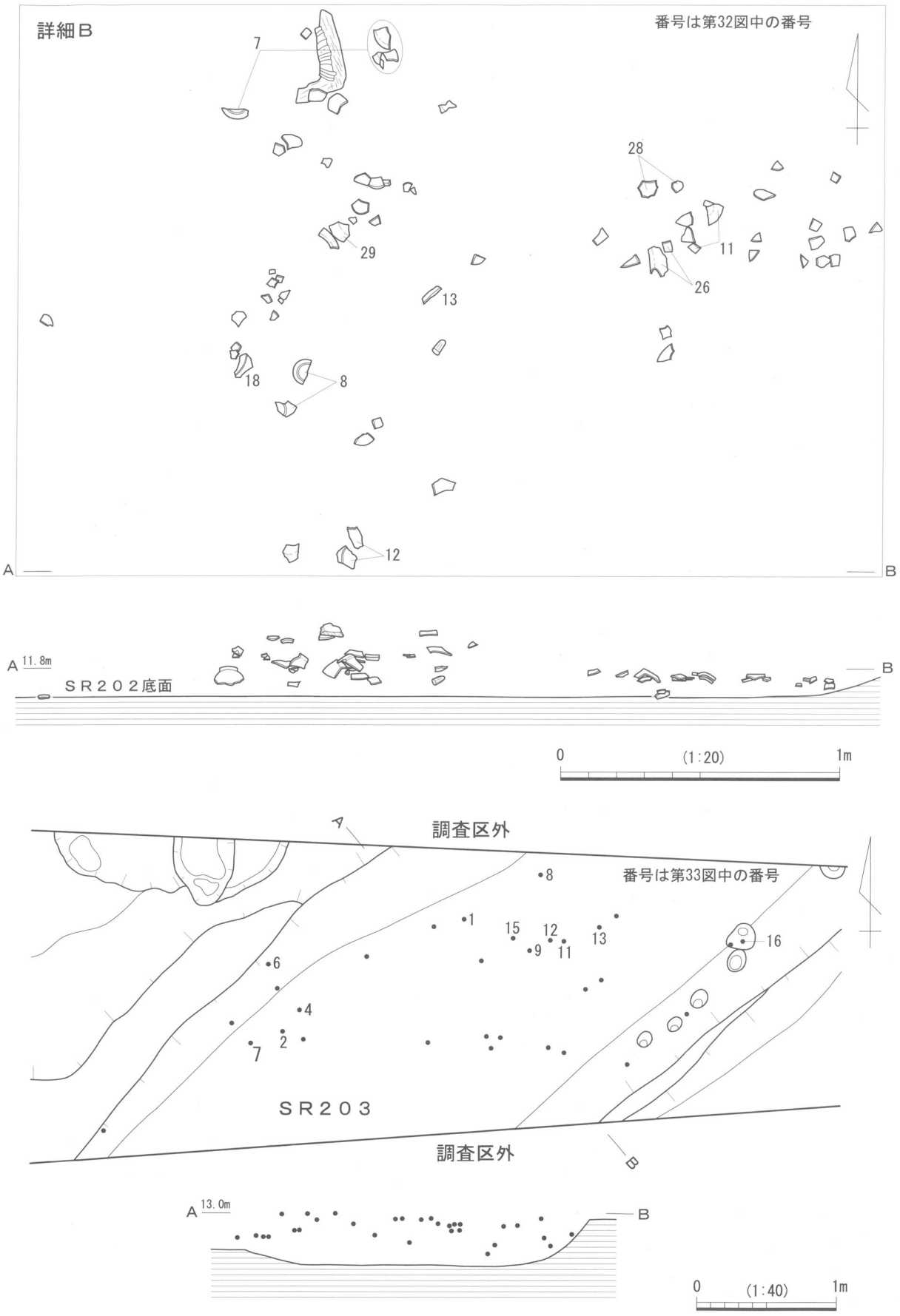
SR204-7
16　灰色砂質土
17　暗灰色砂質土
18　灰色砂

SR204-8
19　灰色砂質土
20　褐色砂

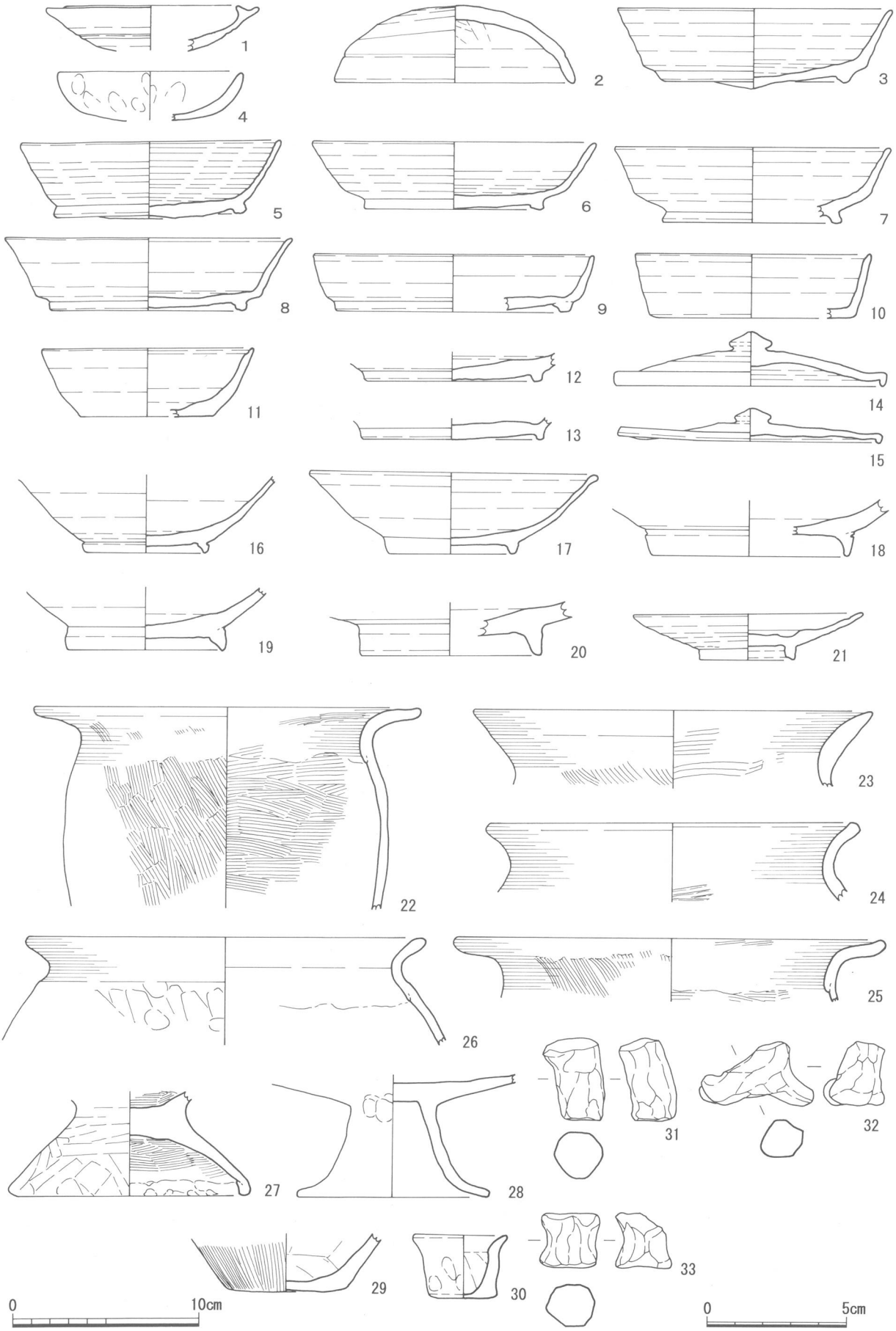
SR204-9
21　茶灰色砂質土
22　灰色砂質土
23　濃茶灰色砂質土

0　(1:40)　1m

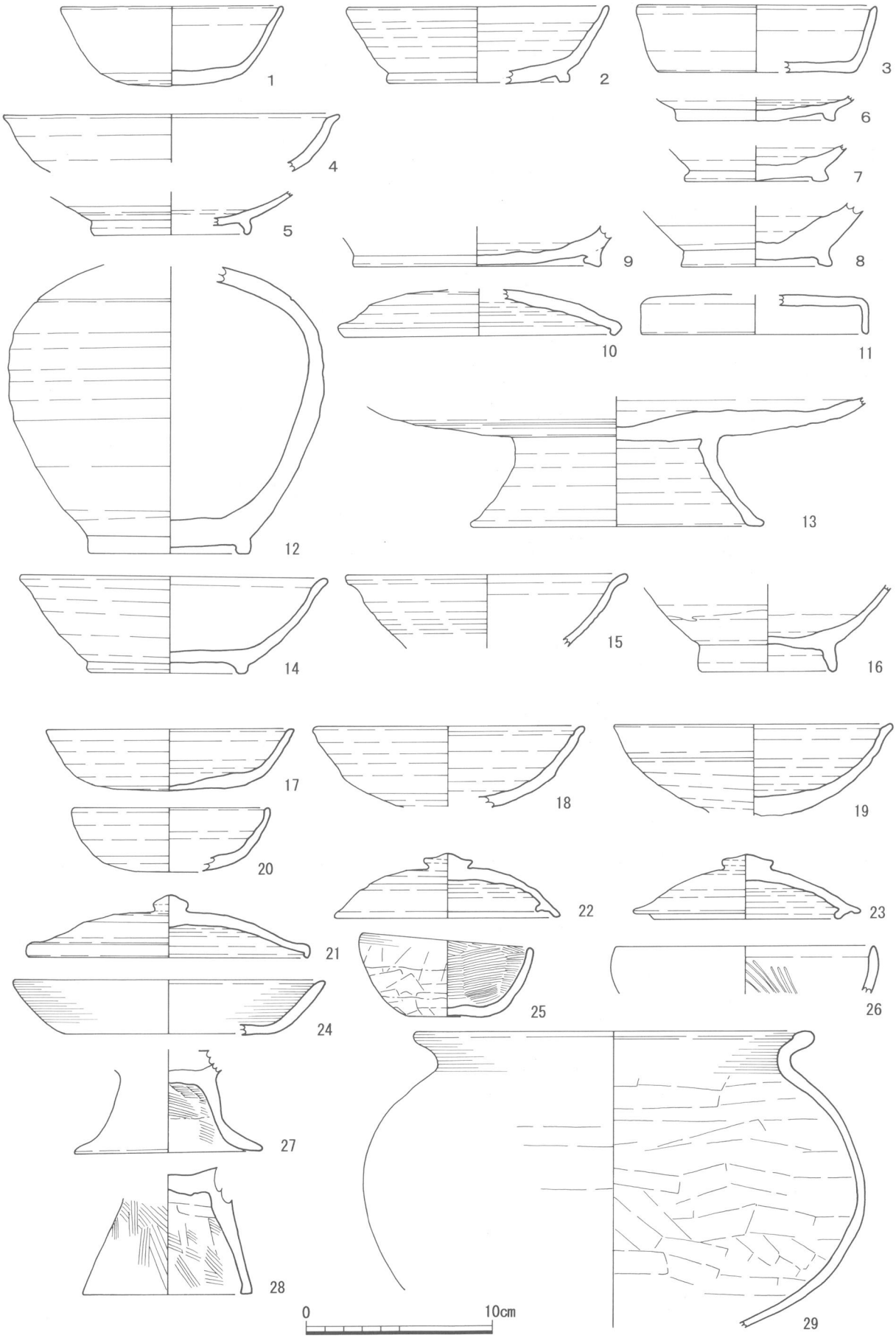
第30図　SR202・203・204断面図



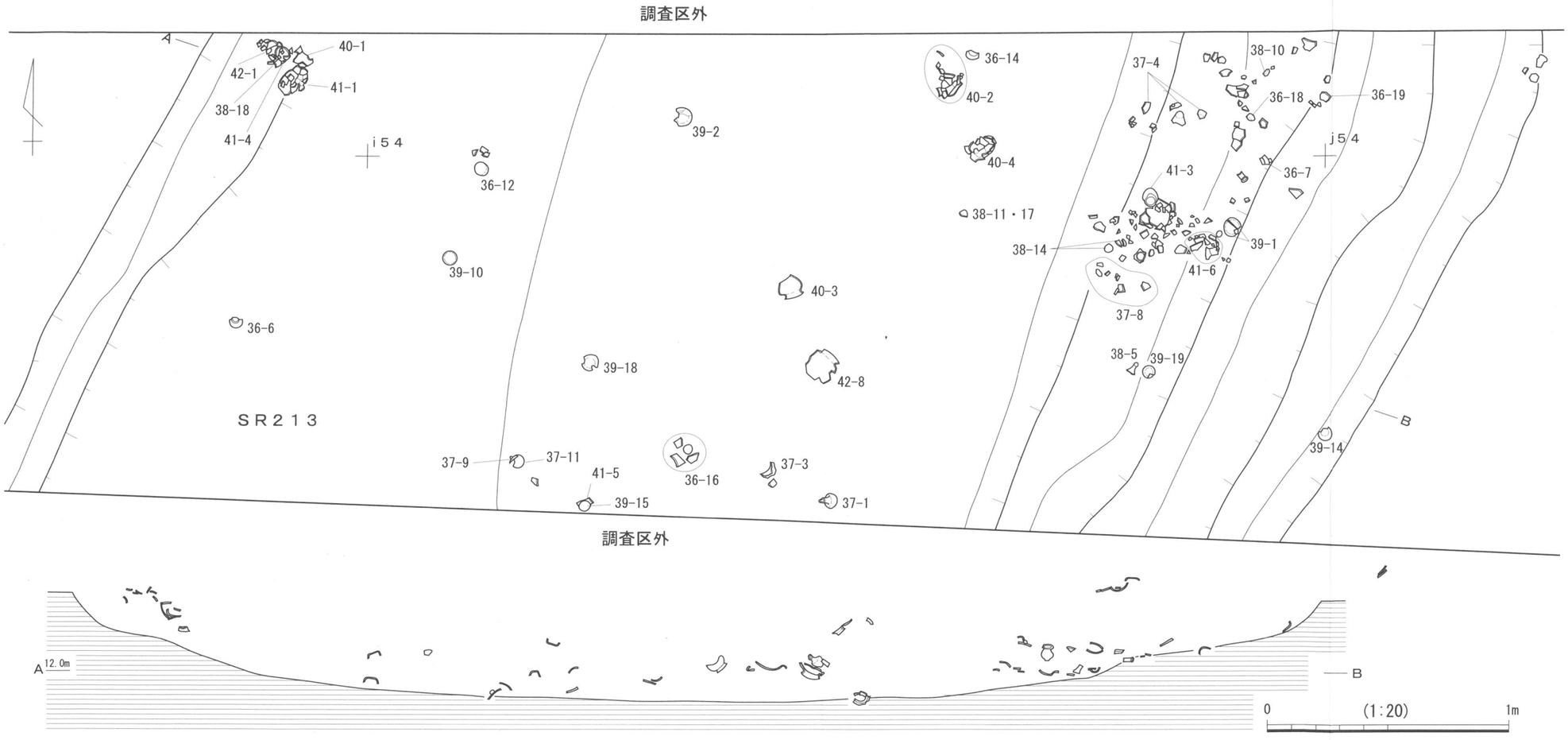
第31図　SR202遺物出土状況・SR203実測図



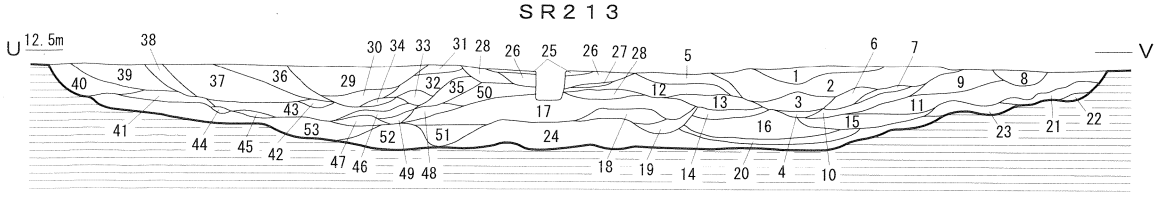
第32図　SR202出土遺物（1～30は1/3、31～33は1/2）



第33図　SR203・204出土遺物(1/3)



第34図　SR213実測図



1 黄灰色粘土シルト　細砂若干、Fe・Mn多
2 黄灰色細砂シルト　Fe・Mn多、土器少
3 灰褐色細砂シルト　Fe・Mn多
4 灰褐色粘土質シルト　Fe・Mn多
5 灰黄色汁と　細砂若干、Fe・Mn多、土器少
6 黄灰色粗砂　Fe多、粘土ブロック上少量
7 灰色細砂　ややしまる、黄灰粗砂ブロック上少量、Fe多
8 灰黄色細砂　ラミナ発達により粗砂との互層上になる、Fe多
9 灰黄色細砂　ややしまるラミナ発達、Fe・Mn多
10 灰黄色粗砂　ラミナ発達、Fe多
11 明灰色シルト質細砂　Fe・Mn多、土器・炭化物少、ラミナあり
12 灰色細砂　Fe・Mn多、土器多
13 灰色シルト　粗砂ブロック状に入る、土器多、Fe多
14 灰色粗砂　礫まじり、粘土小ブロックで入る
15 灰黄色粗砂　ラミナ発達、Fe多
16 灰色砂礫
17 灰色砂礫
18 灰色粗砂　土器少、ラミナあり、礫ややまじる
19 灰黄色粗砂　礫まじり、下部暗灰色粘土
20 暗灰色粘土　粗砂まじり
21 褐灰色粗砂　ラミナ発達、礫まじる、Fe多
22 灰褐色細砂　Fe・Mn多
23 明青灰色シルト　粘性あり、細砂まじる、Fe少
24 灰色砂礫　下部土器多
25 褐色粗砂　Fe多
26 暗褐色粗砂　礫まじる、土器少
27 灰色粗砂　礫まじり
28 灰黄色粗砂　ラミナあり、礫まじり
29 黄灰色細砂シルト　Fe・Mn多、土器少、粗砂まじる
30 暗黄灰色細砂シルト　Fe・Mn多、粗砂まじる
31 黄灰色シルト　細砂、粗砂まじる
32 褐色灰色粗砂　しまりあり、Fe・Mn多
33 明青灰シルト　粗砂まじり、ラミナあり、Fe多
34 明青灰細砂　粗砂まじり、Mn多
35 褐灰色粗砂　小礫多量、細砂まじる
36 灰黄色シルト　細砂まじる、Fe多
37 灰黄色細砂シルト、粗砂まじる、Fe・Mn多
38 褐灰色砂礫
39 灰黄色細砂シルト　粗砂まじる、小礫少、Fe・Mn多、36とほとんど同じ
40 灰黄色細砂　Fe・Mn多
41 名青灰色粘土シルト　粗砂まじり、Fe多、炭化物少
42 暗黄灰色粘土シルト　Fe・Mn多
43 灰色ｂ歳砂　粗砂まじる、ラミナ発達、西肩よりの方にFe多
44 褐灰色粗砂　Fe多
45 暗灰色細砂　粗砂まじり
46 灰色粘土シルト　粗砂多
47 黄灰色粗砂　礫まじり
48 灰色細砂　粗砂まじり、礫少
49 灰色粗砂　細砂まじる
50 黄灰色細砂　粗砂まじり、ラミナ発達、小礫少
51 暗灰色粘土　粗砂、礫まじる
52 灰色粗砂　礫まじる
53 灰色砂礫　土器片やや多

0　(1:50)　1m

第35図　SR213断面図

墨書土器：第37図－13（人面墨書）、第38図－1、第39図－1、2

墨書土器の可能性あり：第36図－15、17

転用硯：第37図－11

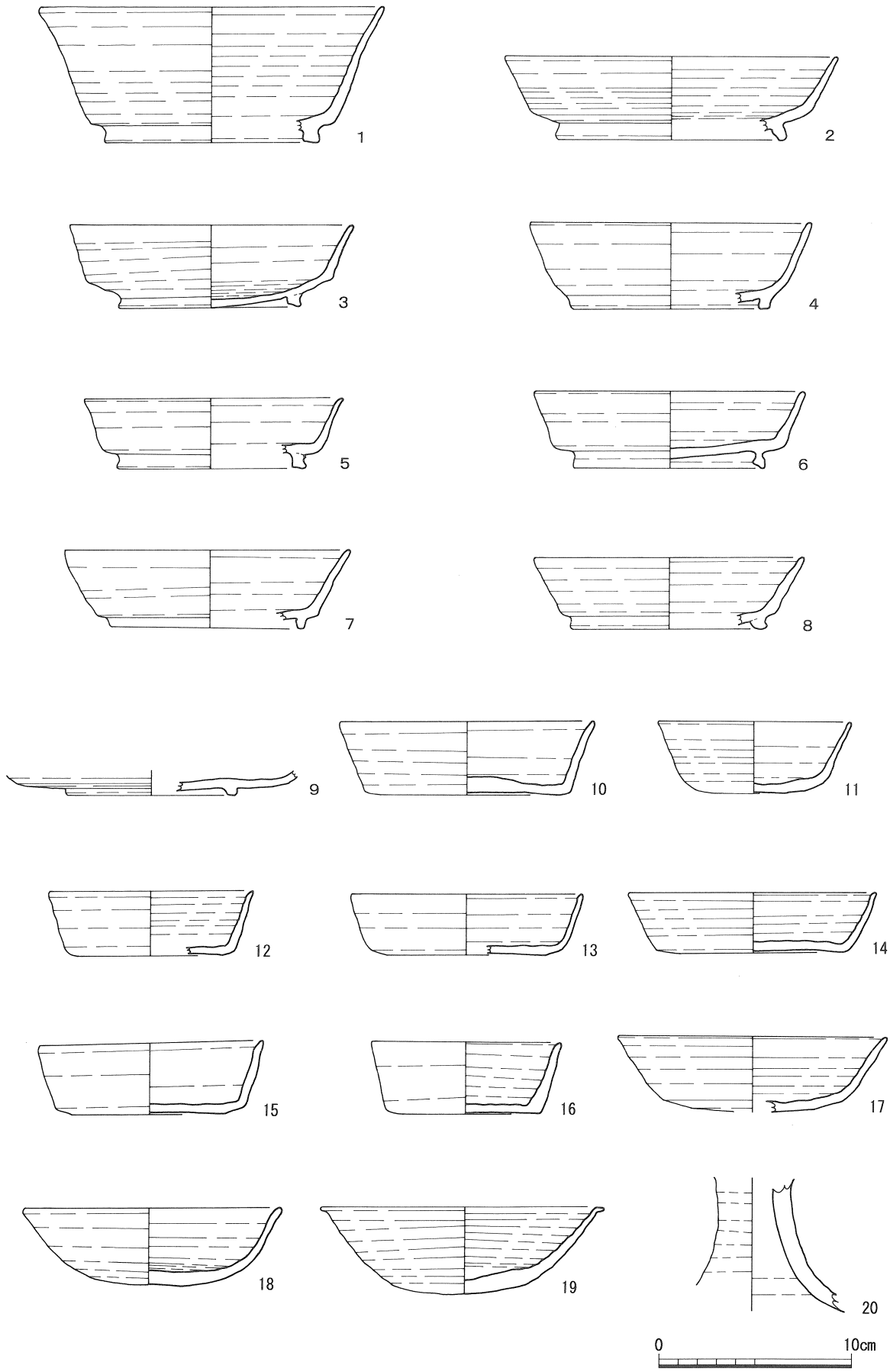
丹塗り土器：第38図－1、2、4、8（舌状赤彩）、18（舌状赤彩）、19（舌状赤彩）、第39図－1～4、7～19、第41図－4、6(舌状赤彩)

手捏ね土器：第38図－8、10～17

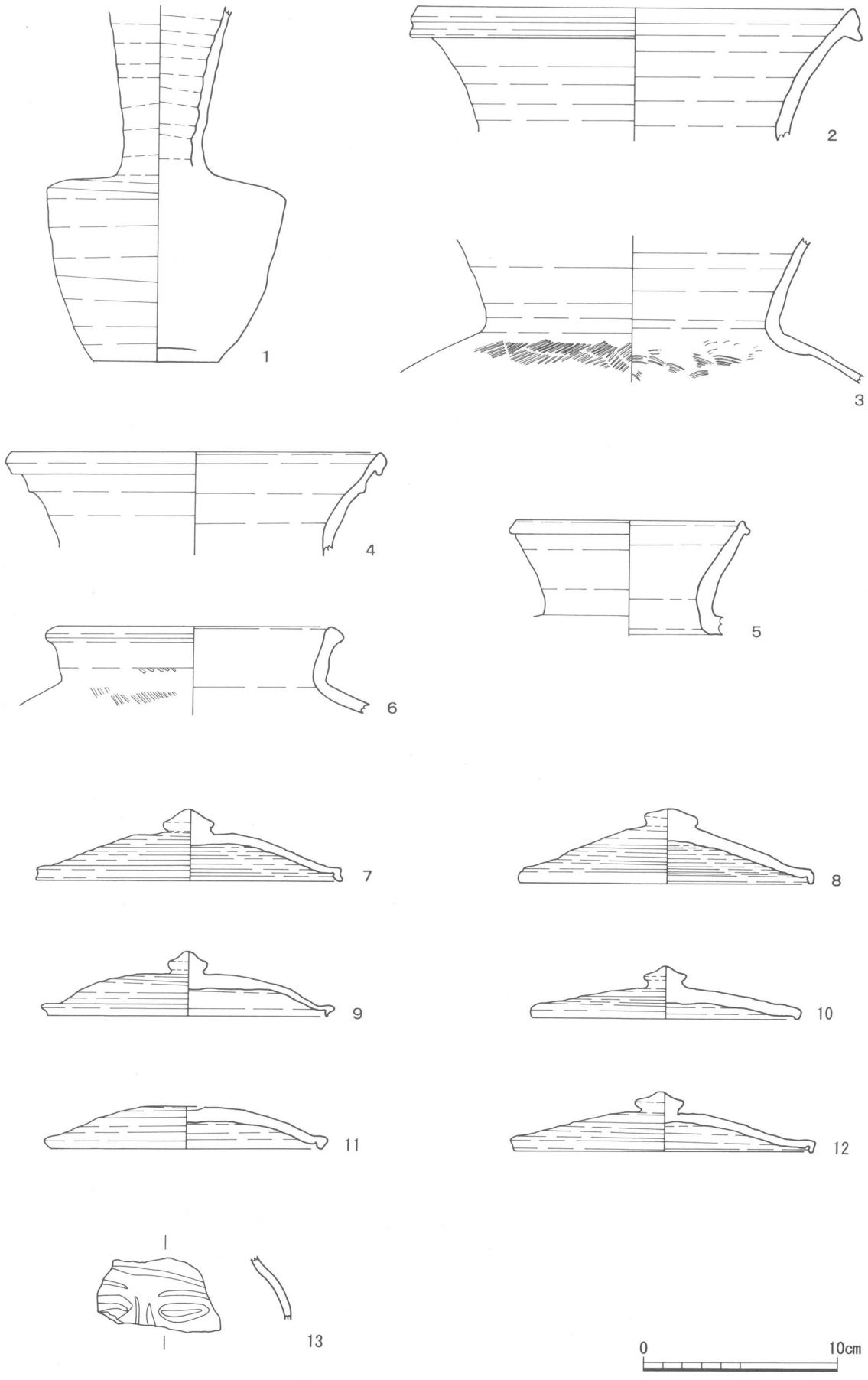
下記に主要遺物を記載する。第36図－2は8世紀第3四半期の須恵器で、底部にスノコの圧痕が見られる。第36図－9は、8世紀後葉～9世紀前葉の盤か台付皿である。第36図－15と17は墨書と思われる痕跡があるが、薄いため、詳細は不明である。第37図－11は8世紀後葉の須恵器の蓋で、硯に転用されており、内側に墨が明瞭に残っている。第37図－13は、人面墨書土器で、土師器甕の破片に人面が書かれており、目の部分が確認できる。第38図－10～17は手捏ね土器で、いずれも8世紀代と考えられる。第38図－1は、8世紀後葉の土師器の坏で、墨書文字の一部を確認できるが、一部しか残っていないため、判読できない。第39図－1、2は、8世紀後葉の土師器皿で、いずれも底面に「太」の墨書が書かれている。第38図－18、19は甑形土師器で、舌状赤彩が見られる。第42図－1～6、8～11の土師器の甕と鉢はいずれも8世紀末～9世紀初頭であり、この流路の埋没時期の下限を示している。

上記以外にも墨書土器の破片が出土しているが、すべて一部しか残っていないため、書かれている内容は不明である。

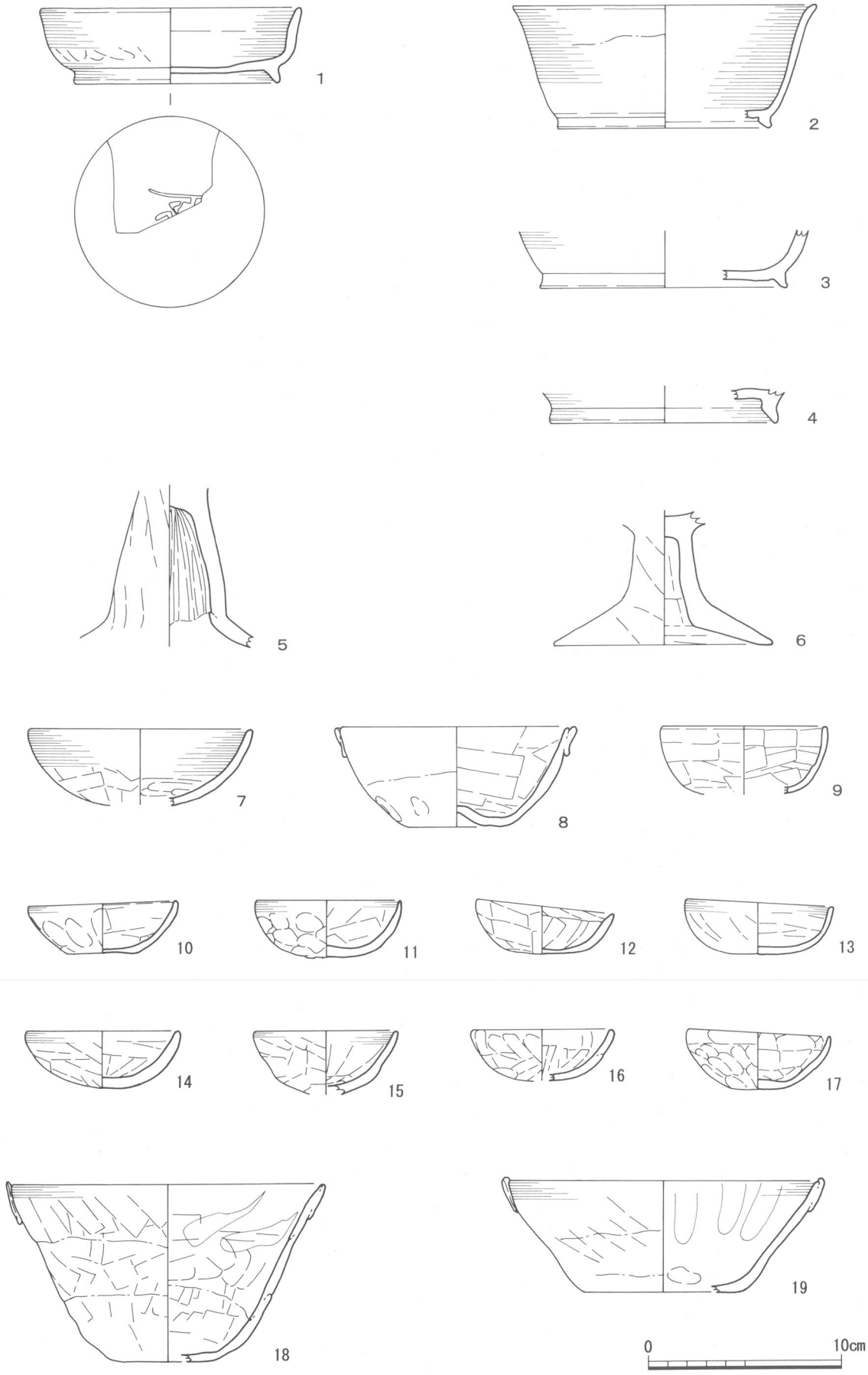
なお、この流路も複数の洪水の痕跡を残す断面の所見や、洪水砂の上で遺物が集中する状況、溝の幅などの点で、先述のSR202同様に、恒武西浦遺跡（埋文研1997年調査、2000年報告）で検出・報告したSR30とした流路と酷似していることから、SR30とつながる可能性が高い。



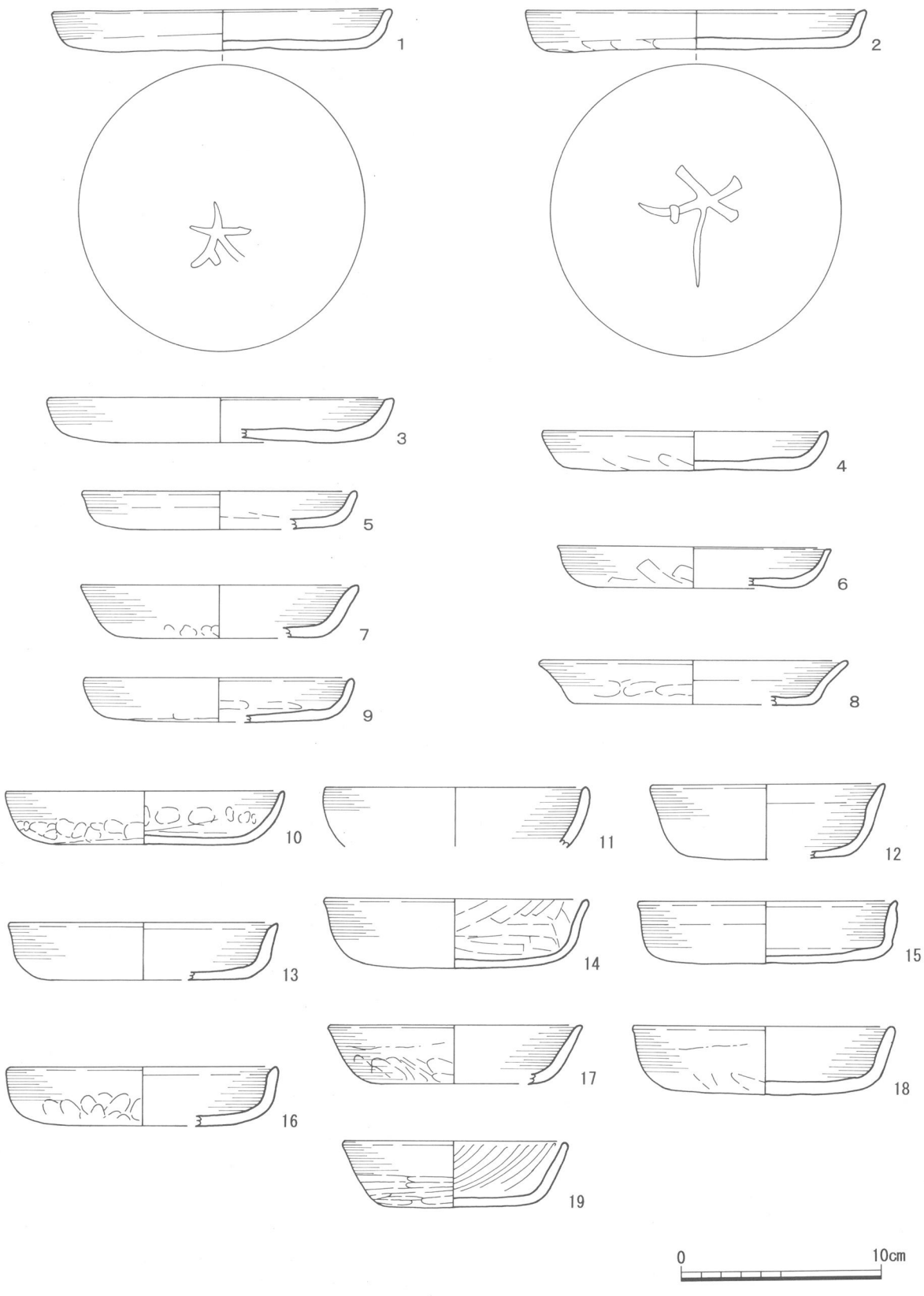
第36図　SR213出土遺物１(1/3)



第37図　SR213出土遺物 2 (1/3)

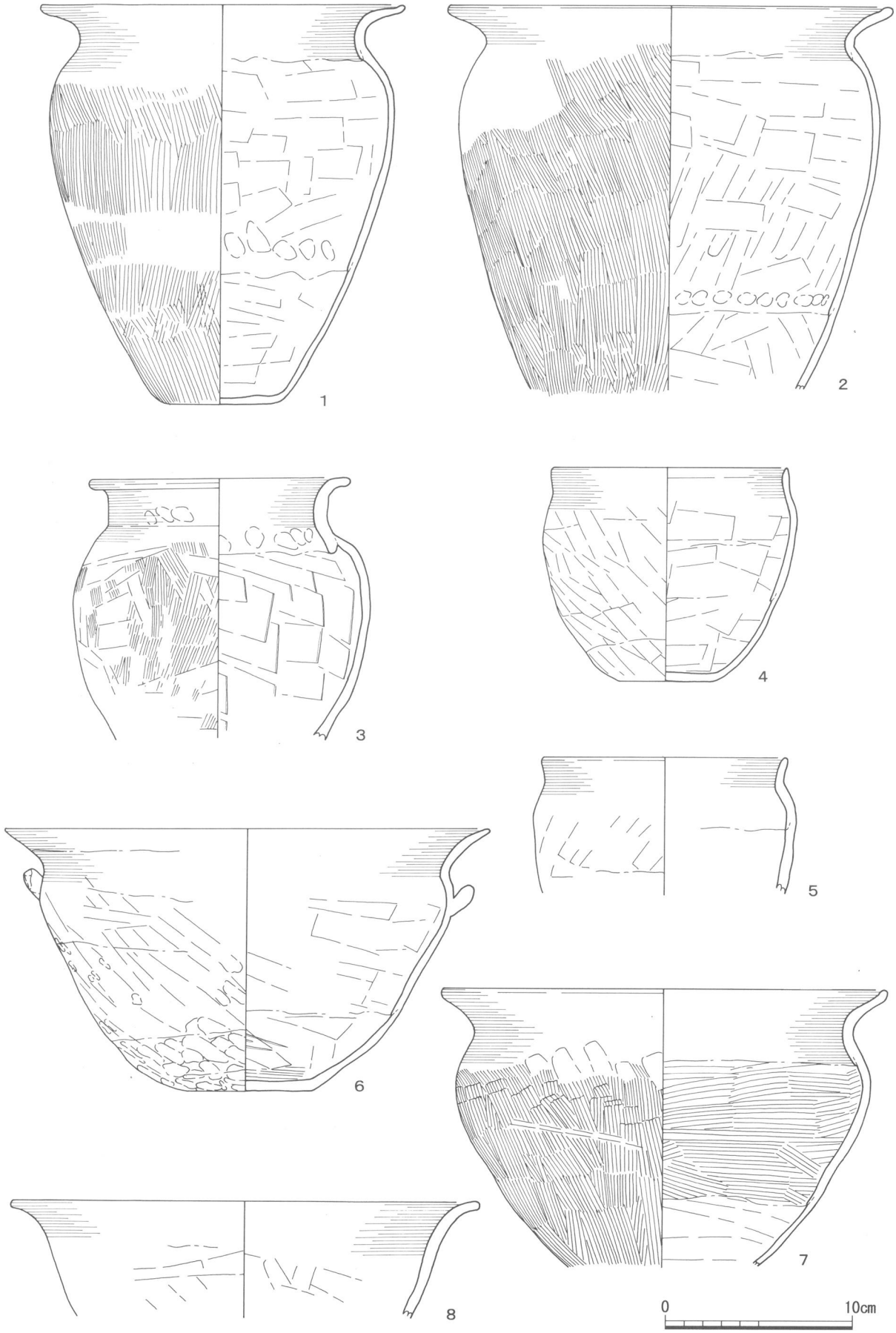


第38図　SR213出土遺物 3 (1/3)



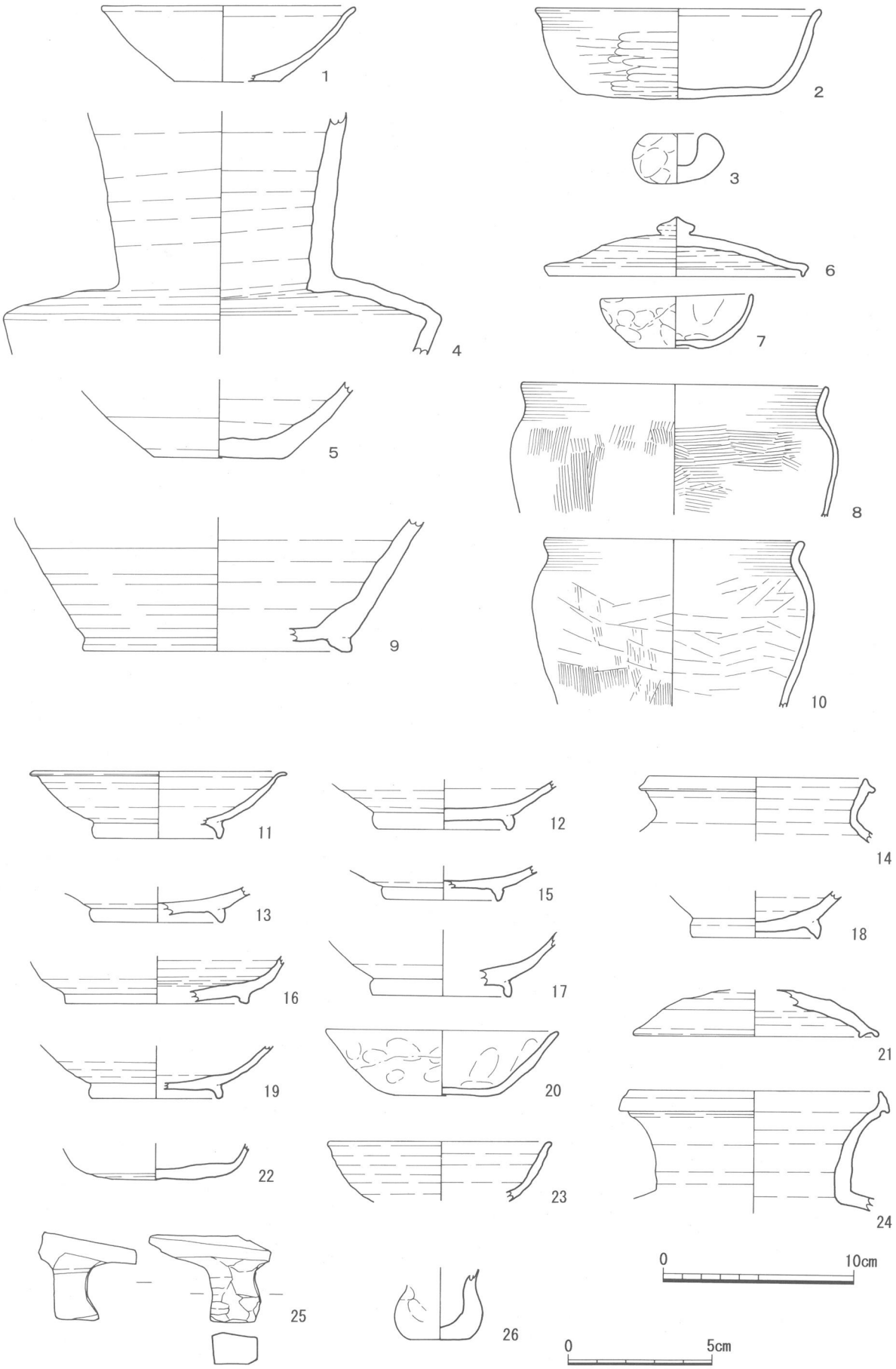
第39図　SR213出土遺物 4 (1/3)

第40図　SR213出土遺物 5 (1/3)

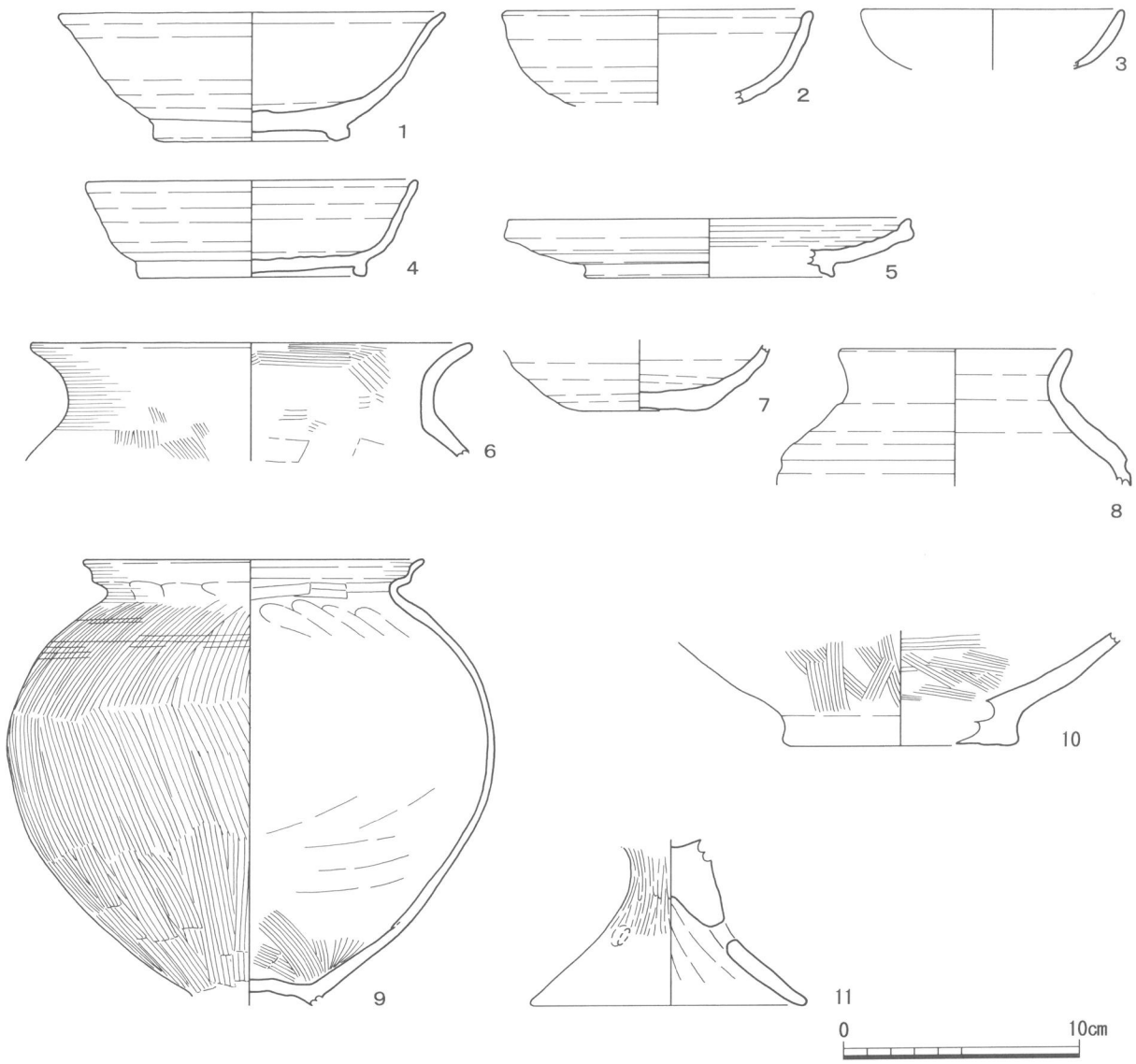


第41図　SR213出土遺物 6 (1/3)

第42図　SR213出土遺物 7 (1/3)



第43図　その他の遺構出土遺物１(１～24は1/3、25、26は1/2)



第44図　その他の遺構出土遺物２(1/3)

第４節　鎌倉時代以降の遺構と遺物

中世面で中世遺構を検出したのは、1次調査（第45図）だけである。２次調査では、中世面より上層は、近世以降の攪乱で破壊されており、奈良・平安時代面まで掘り込んだ遺構を奈良・平安時代面調査の際に検出したに過ぎない。また、１次調査でも奈良・平安時代面で検出した遺構を詳細に検討した結果、中世以降と判断した遺構もある。

井戸跡

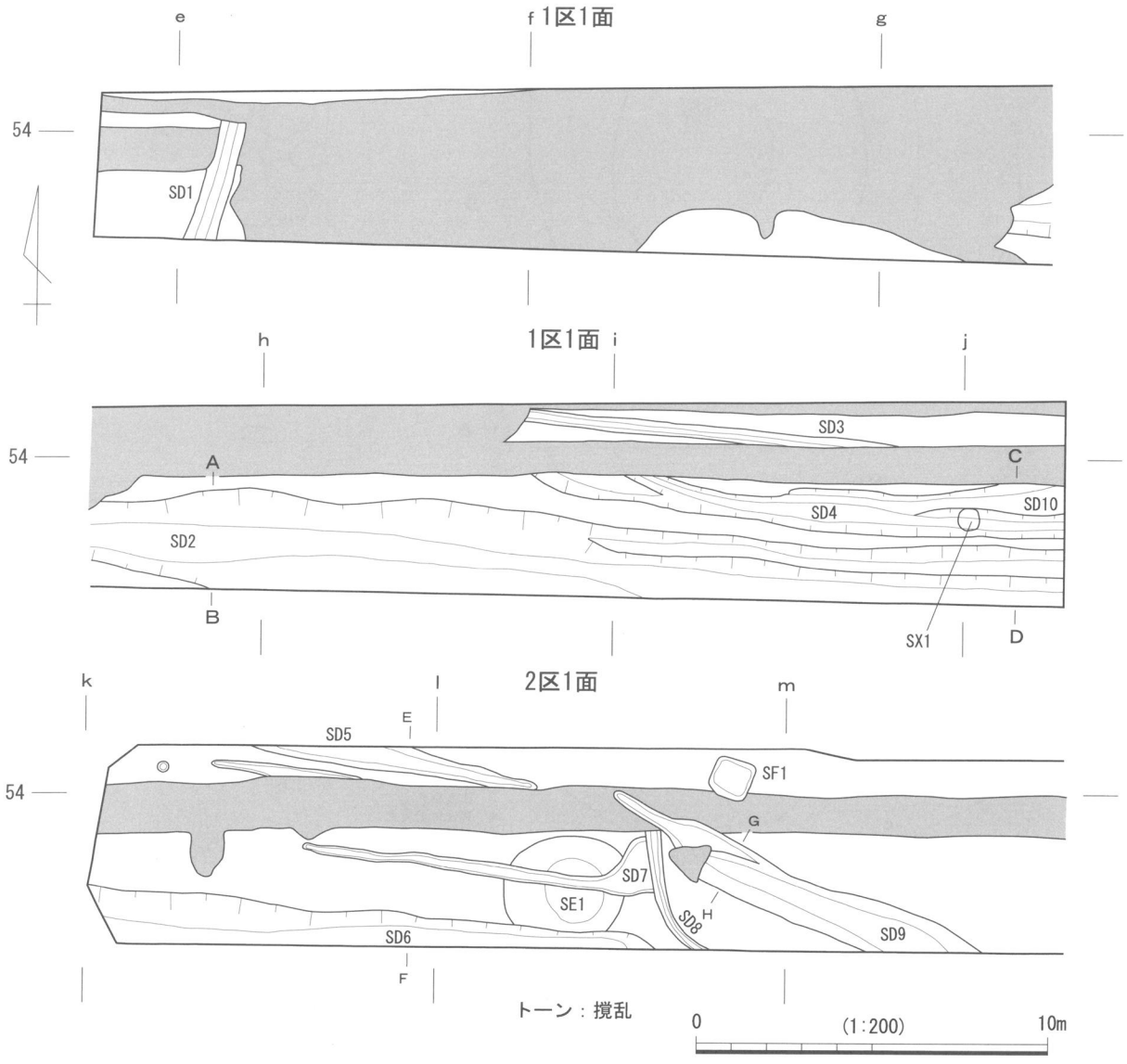
SE1（第46図）

１次調査２区でSD7に切られた状態で検出した。水溜め部分に板材を組み合わせた井戸枠が残っている。遺物は井戸の中に投げ込まれた状態で出土しており、12世紀の鉢（第49図－12）、13世紀の山茶碗（第49図－14）などが出土している。７世紀前半の須恵器（第49図－16）は混入品である。

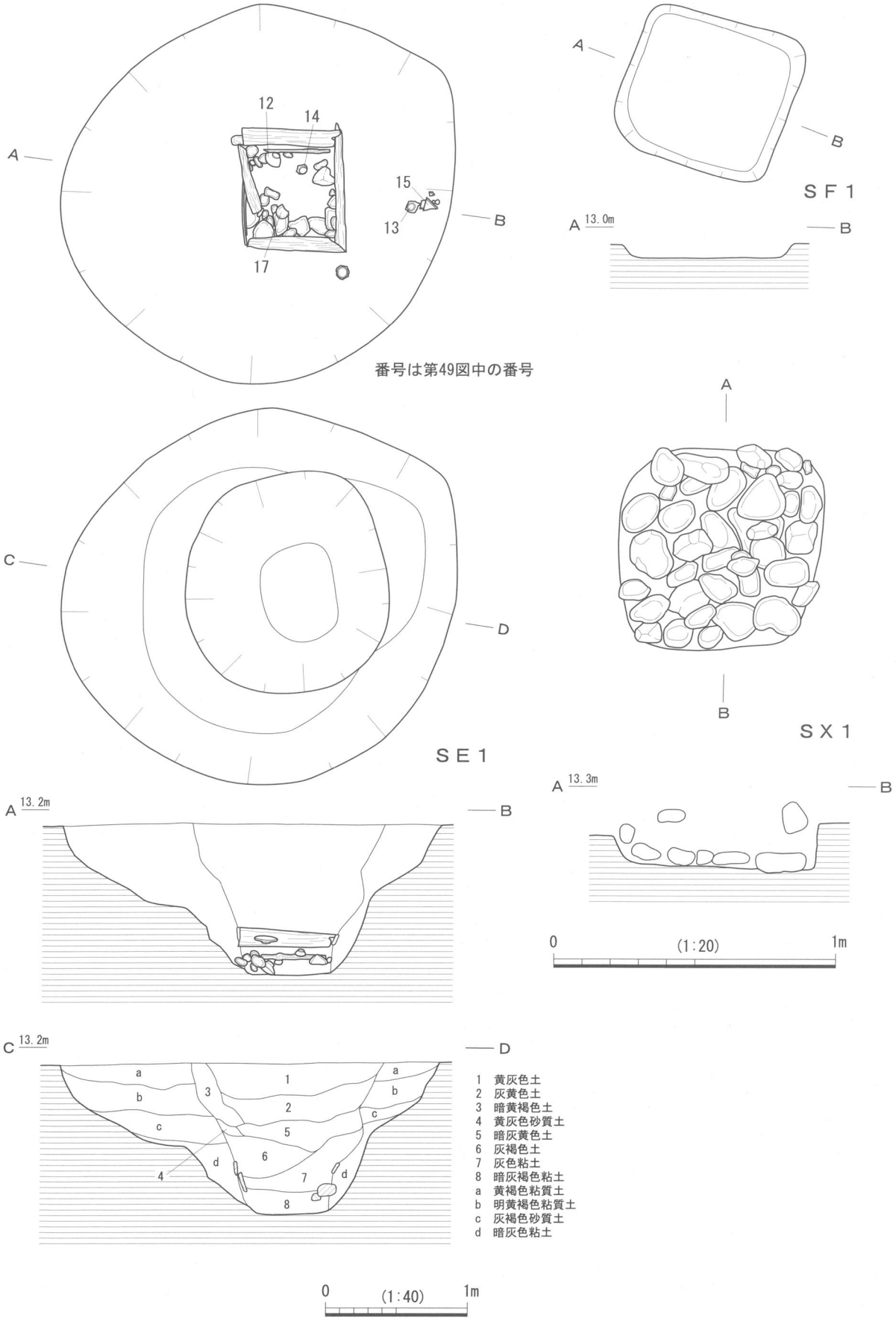
土坑

SF1（第47図）

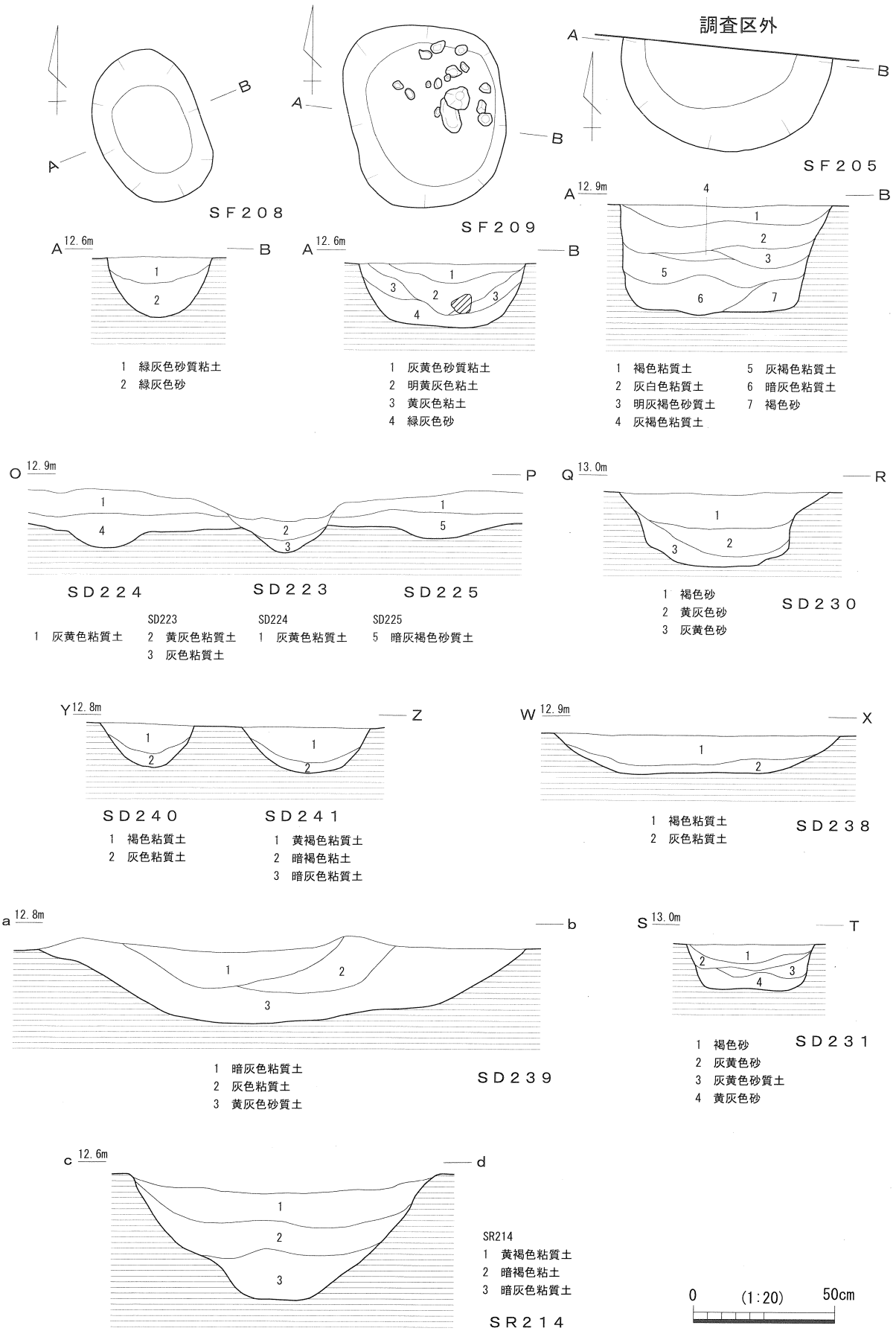
１次調査２区で検出した方形の土坑である。埋土は黄灰色土の単層である。遺物が出土しなかったため、時期を確定できないが、検出面から考えて中世以降であろう。



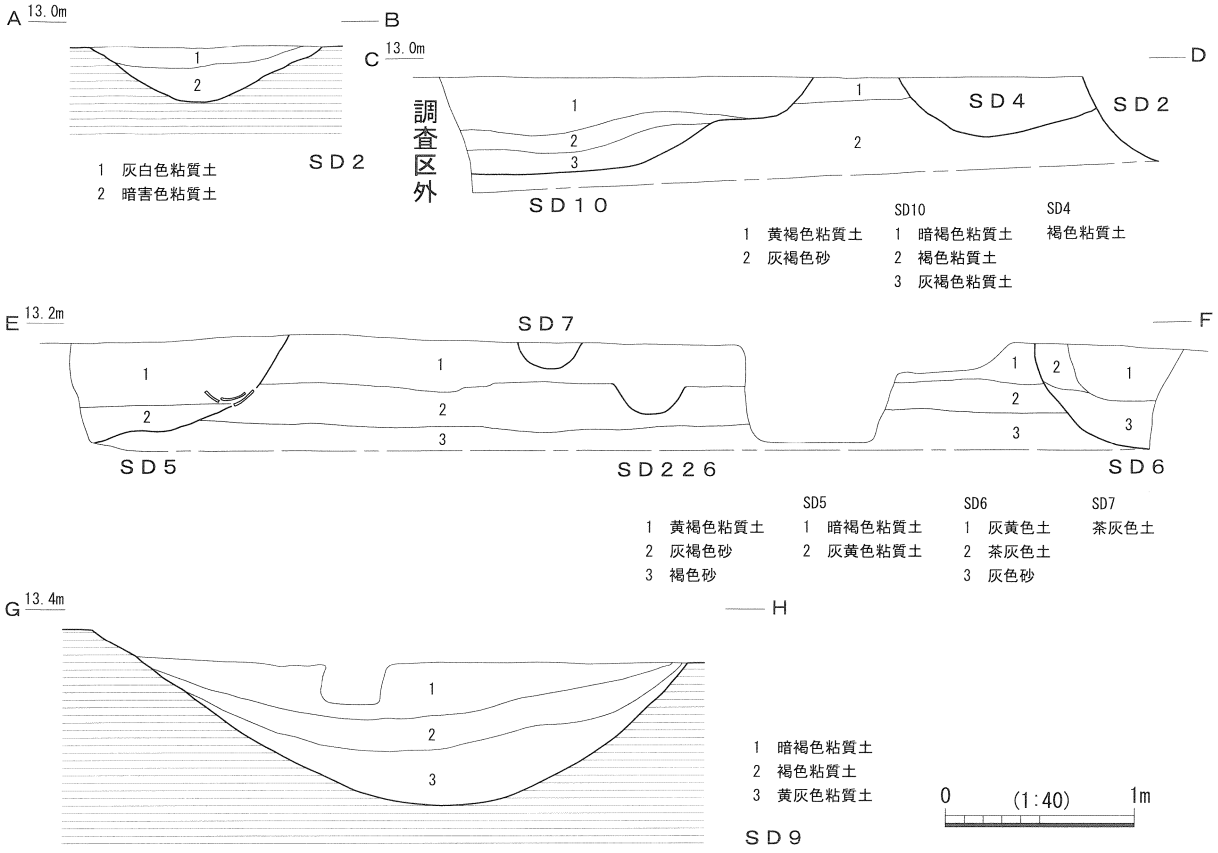
第45図　中世以降の遺構分布図



第46図　SE1・SF1・SX1実測図



第47図　SF208・209実測図、その他の遺構断面図1



第48図　その他の遺構断面図２

SF205（第47図）

１次調査２区、調査区北側の壁際で、SD235を切った状態で検出した。埋土は粘質土を基本としており、底に近い部分だけ砂が堆積している。

SF208、SF209（第47図）

１次調査２区の東端で並んで検出した。ともに最下層の埋土が緑灰色砂で共通しているが、その上の堆積層については、SF208は緑灰色砂質粘土、SF209は黄灰色粘土、灰黄色粘土と、違いがあるため、最終的な埋没時期には差があると考えられる。

性格不明遺構

SX1（第46図）

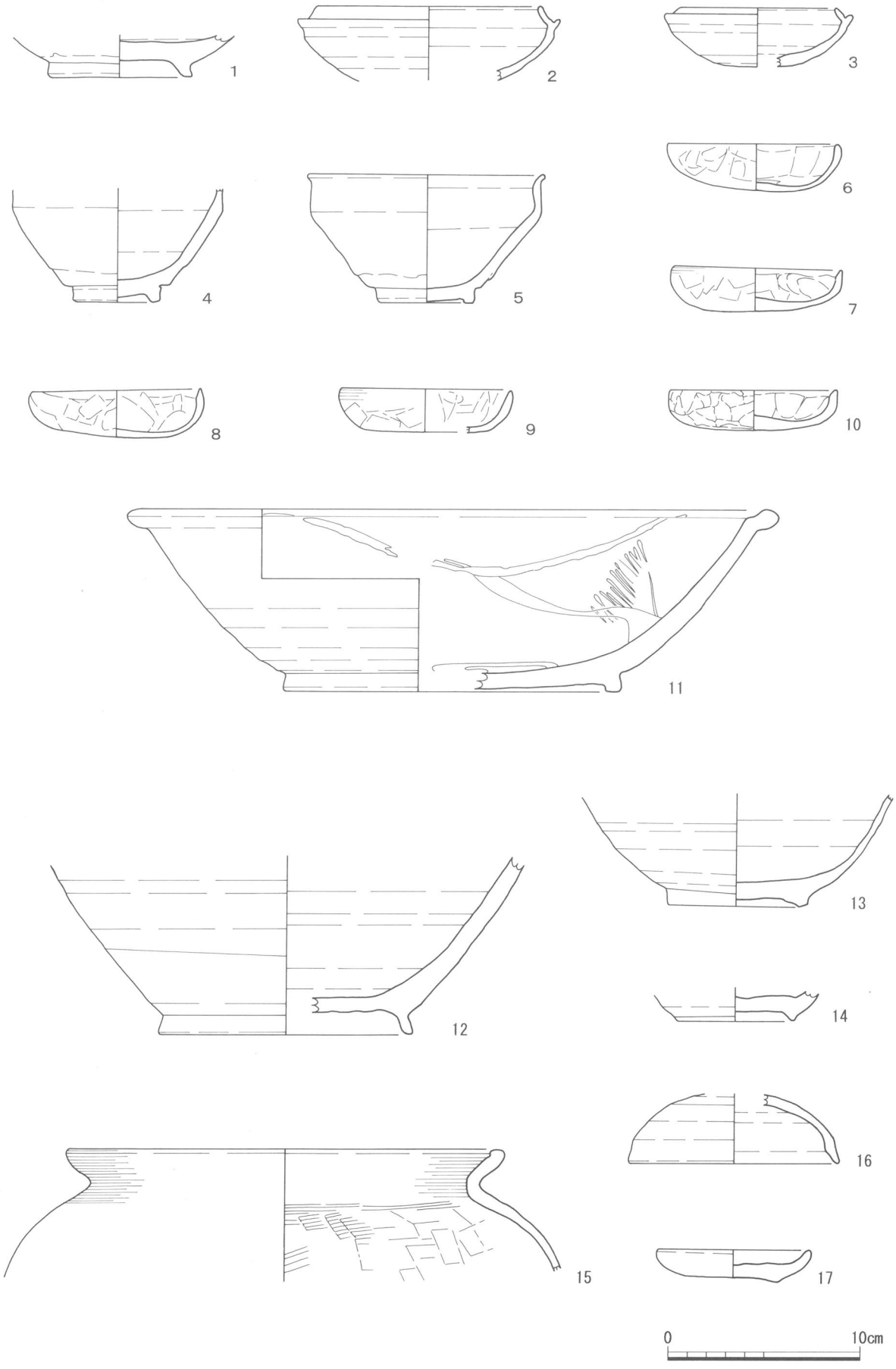
１次調査１区で円礫が集中する部分を検出した。精査したところ、方形の掘り込みがあり、その中に円礫を充填したようになっていた。性格を探る手がかりは得られず、遺物も出土しなかったため、時期も確定できない。検出面から考えて、中世以降の遺構というのにとどめる。

溝

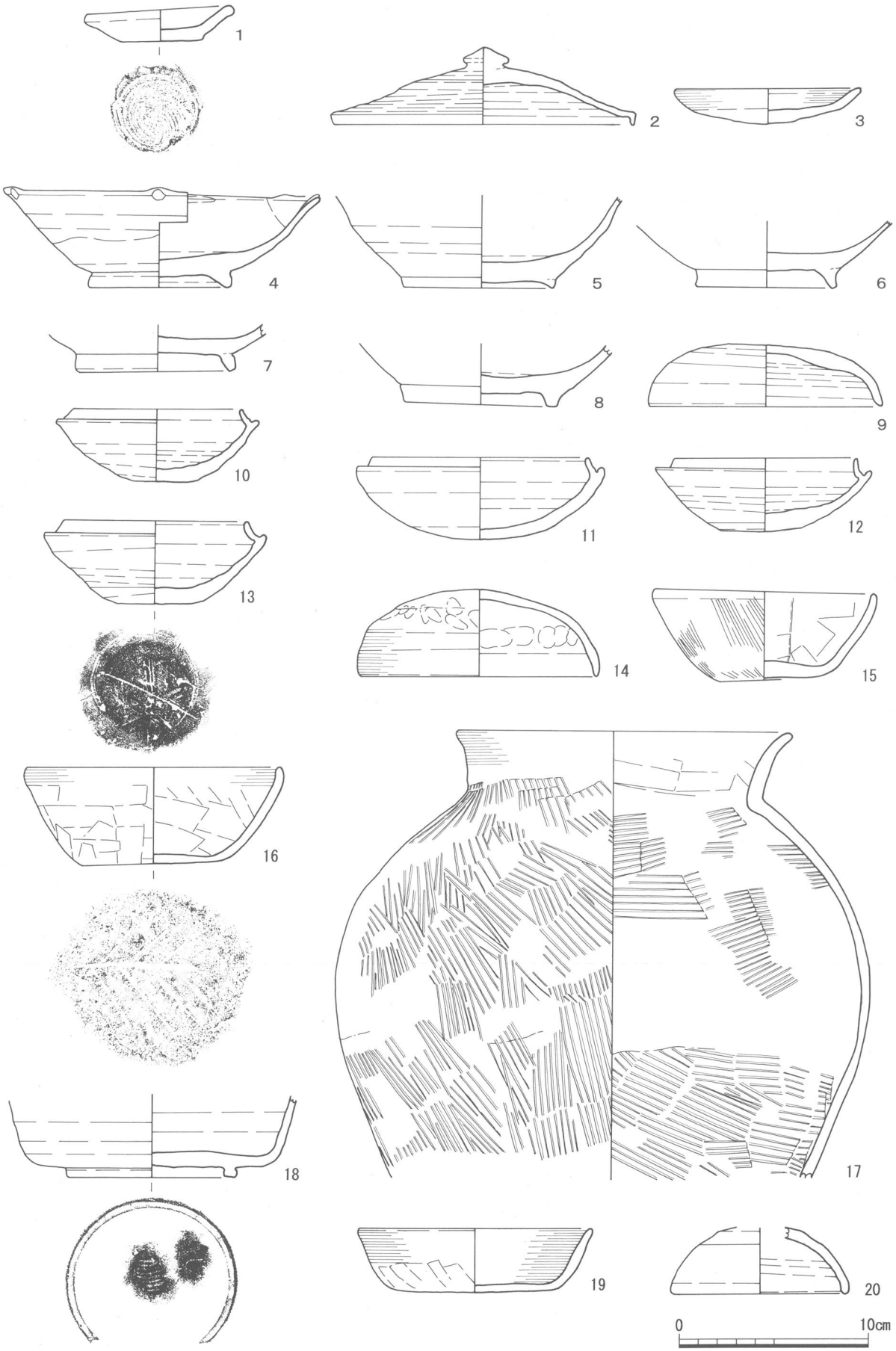
自然流路との区別が難しかったが、自然流路は北東－南西方向のものが主体であるのに対して、ここで検出したものは、SD1が南北方向になっている以外はほぼ東西方向であるため、人為的な遺構の可能性を考えた。

SD1（第45図）

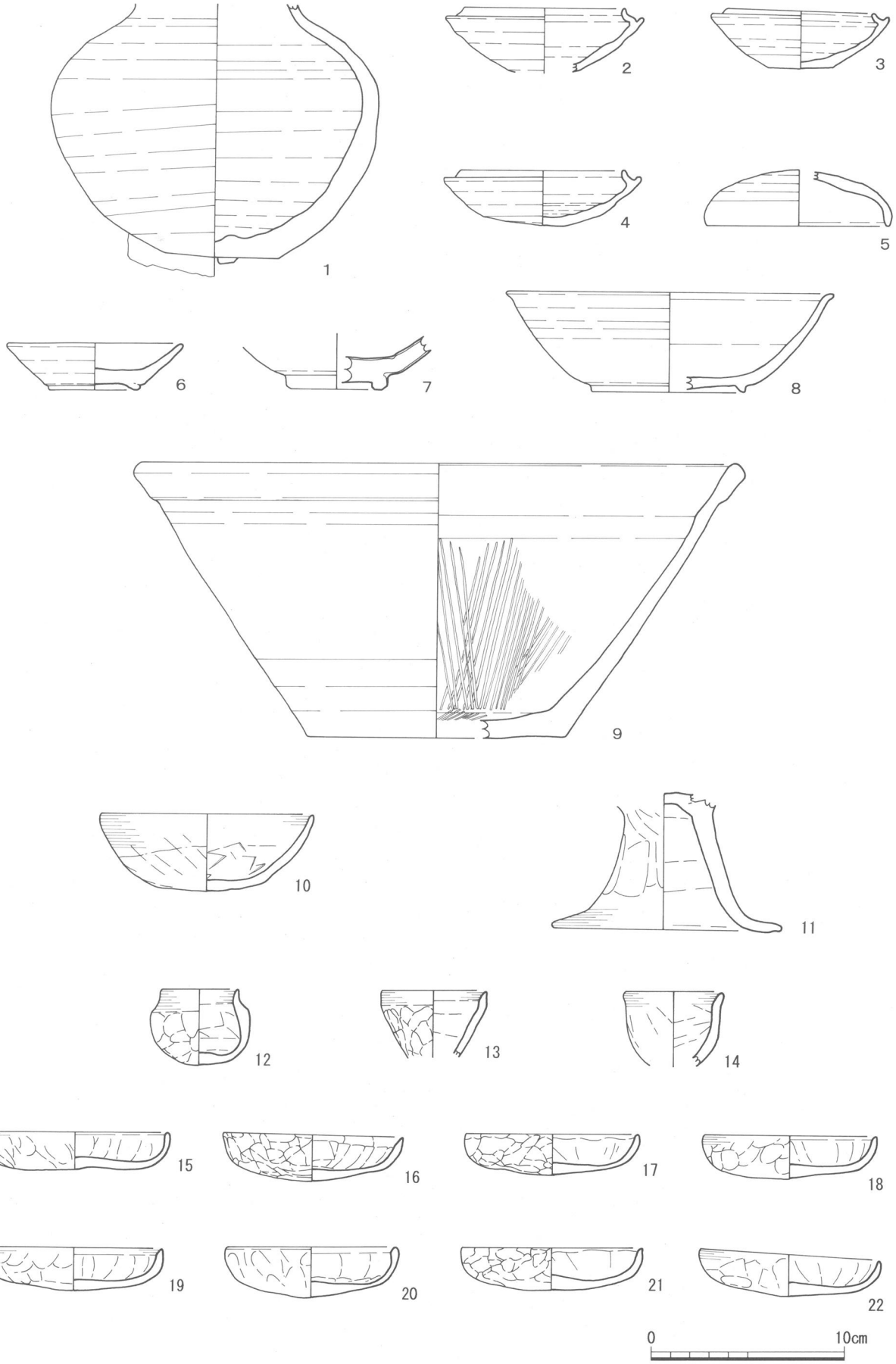
１次調査１区の西端で検出した。１次調査１区の西半分はほとんどの部分が攪乱を受けており、この溝はわずかに攪乱が及んでいない場所で検出した。北東－南西方向で、自然流路と同じ方向であるため、自然流路の一部の可能性もある。



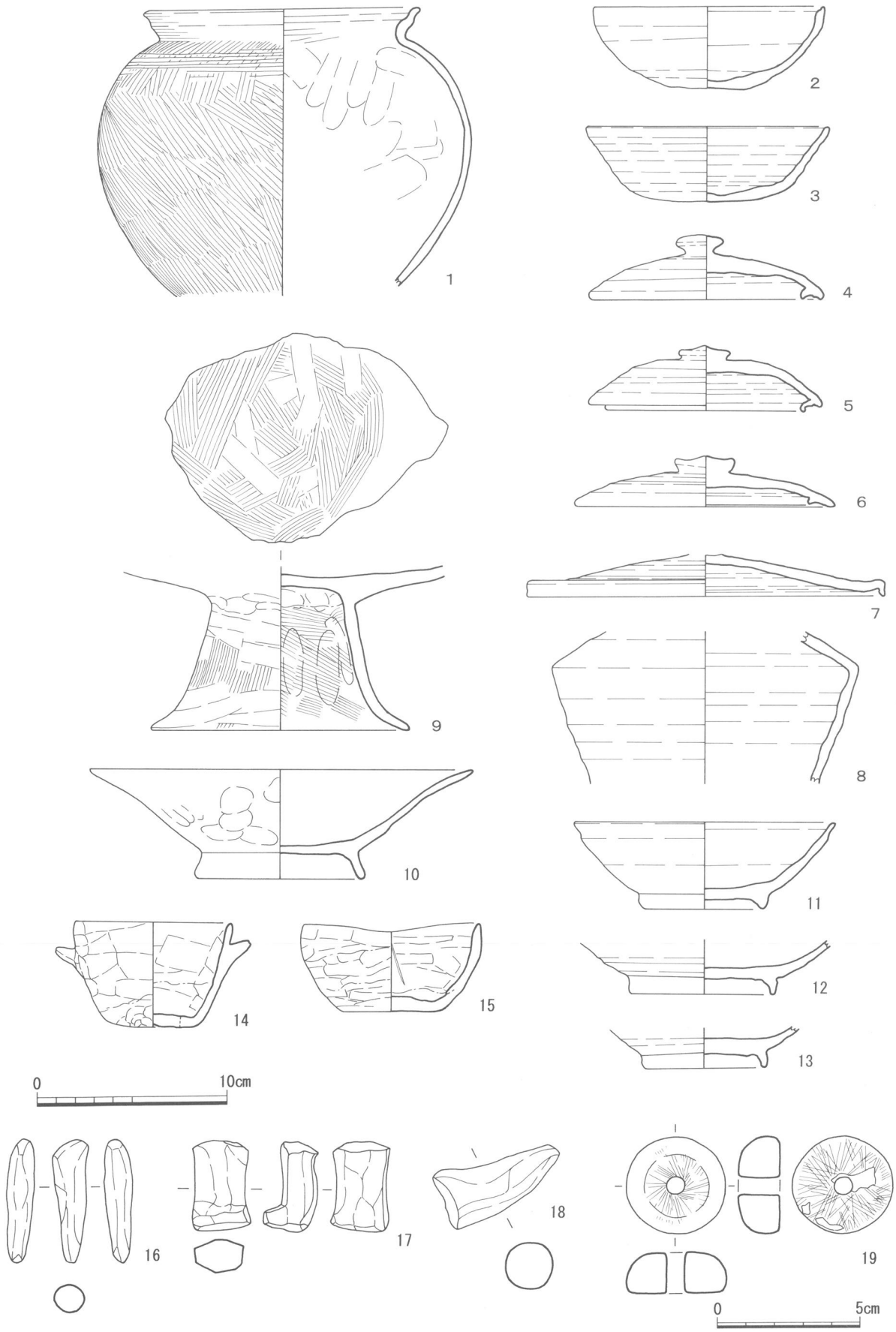
第49図　SD1・SE1出土遺物(1/3)



第50図　SR215・216・その他の遺構出土遺物(1/3)



第 51 図　包含層出土遺物1 (1/3)



第 52 図　包含層出土遺物2（1 ～15 は 1/3、16～19 は 1/2）

SD2、SD4、SD10（第45図）

１次調査１区で検出した東西方向の比較的規模の大きい溝である。SD2は、東に向かって幅が広がり、南側は調査区外に出ていく。SD4とSD10は、SD2にほぼ平行して検出したが、SD4とSD10は、ｉライン付近から西側は、やや北側に方向を変え、SD2から離れていくようである。３本とも埋土は、褐色粘質土を基本としており、埋没時期が近いと考えられる。

SD6（第45図）

１次調査２区で検出した東西方向の溝である。北側が調査区にかかっているだけで、南側の半分以上が調査区外に出ているので、幅はわからない。下層は砂が堆積している。近代まで機能していた溝と考えられ、近代の鉢（第49図－11）が出土している。この他には、17世紀前半の天目茶碗（第49図－４、５）、15世紀後半～16世紀の土師皿などが出土している（第49図－６～10）。

SD238（第６図）

１次調査２区で検出した南北方向の溝である。13世紀の井戸SE１に切られていることから、13世紀以前であることは確かである。南側半分は攪乱によって失われている。古代の遺構検出面で検出したため、当初は古代の溝と考えていたが、12世紀の山茶碗（第49図－１、第50図－４～８）がまとまって出土している。

自然流路

SR201（第６図）

２次調査２区で検出した。ほとんどの自然流路が北東－南西方向であるのに対して、この溝だけは北西－南東方向である。そして、その下にあるSR204を切っていることから、これだけが他の自然流路よりも新しくなる。埋土も1層であるため、水が流れたのも一時的なものであろう。なお、人工的な溝の可能性もあるが、この付近では自然流路以外に遺構が発見されなかったことと、他の自然流路と埋土が似ていることから、自然流路の中に含めた。図化はできなかったが、中世の土器片が出土している。

第５節　その他の出土遺物

ここでは遺構に伴わない遺物を一括して取り上げる。遺構出土の遺物でも祭祀関連遺物が目立ったが、ここでも下記の遺物を指摘できる。

丹塗り土器：第51図－11、第52図－９、10

手捏ね土器：第51図12～14、第52図－15

ミニチュア土器：第52図－14

土製品：第52図－16～18

手捏ね土器やミニチュア土器、土製品の時期の特定は困難だが、第51図－11の土師器は８世紀後半、第52図－９の土師器は８世紀後葉～９世紀初頭、第52図－10の土師器は９世紀前葉～中葉と考えられる。これ以外に図化はできなかったが、手捏ね土器や不明土製品が出土している。

この他に、特徴的な遺物を記載する。古墳時代後期の遺物としては、第51図－１～５、10、第52図－２、４、５があげられる。いずれも７世紀である。奈良時代～平安時代の遺物は、第51図－８、11、第52図－３、６～13があげられる。中世の遺物は、第51図－７の青磁碗と第51図－15～22の土師皿がある。遺構に伴わない遺物も、全体的に奈良・平安時代の遺物が主体で、それ以外の時期の遺物は少ない。特に中世以降の遺物は、包含層自体が近世以降の攪乱により失われているためか、極めて少ない。

第Ⅴ章　まとめ

1　旧地形の復元

天竜川平野は、天竜川が運んだ土砂が堆積した平野であるため、旧河川跡と遺跡の立地に大きな関係があり、旧地形の復元が、遺跡の範囲推定の重要な手がかりとなっている。今回の調査は、東西に細長い調査区であったため、南北方向を中心とする旧流路の位置や微高地の位置を推定することができた。

２次調査１区は南北方向に流路が流れ、低地に当たっていると推定される。ここから西へ行った１次調査地から２次調査２区にかけては、住居跡や掘立柱建物跡などが検出され、微高地にあたっていると判断される。特に２次調査２区は、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて３面の遺構面が見られた。さらに西に行った２次調査３区のあたりは再び低地に当たっており、北東～南西方向の流路が複数本見られ、奈良・平安時代を中心として、中世まで流れていた可能性がうかがわれた。このあたりは現在でも同じ方向に笠井都市下水路が流れている。この西側にある２次調査４区のあたりは微高地になっており、３面の遺構面が見られた。流路に削られていないため、３面の遺構面が残っていたと考えられる。

2　祭祀関連資料

浜松市恒武町、笠井町付近の遺跡では、以前より墨書土器や硯といった文字に関する資料、丹塗り土器、獣足、動物形土製品、ミニチュア土器などの祭祀関連遺物が多く出土することから、郡の支配者レベルの集団が存在した可能性が推定され、近隣に官衙関連遺跡の存在が指摘されていた。今回の調査でも同様の遺物が出土した。列記すると下記のとおりである。

SR213からは、８世紀代の墨書土器、丹塗り土器、獣足、ミニチュア土器などがまとまって出土した。流路に流れ込んだ遺物ではあったが、遺物はほとんど摩滅していない上に、完形に近い形まで接合する土器も多いことから、近くから流れてきたと考えられる。

SR202からも同様に、丹塗りの土師器、獣足、馬形土製品、ミニチュア土器などが出土した。洪水砂と共に出土したもので、摩滅していないことから、近い所からまとまって流れてきたと考えられる。

遺物以外では、２区と４区で掘立柱建物跡と思われる柱穴跡が多く検出された。調査区が細長いため、３棟が組み合っただけだが、柱穴の数から考えて、さらに掘立柱建物跡があることは間違いない。これらの柱穴跡は２層に渡って検出できたため、長期間に渡って掘立柱建物跡が存在したことになる。

以上の成果に従来の調査成果を合わせると、ごく近いところに官衙関連遺跡が存在する可能性がさらに高まったことになる。

3　遺構の時期別変遷

これまでの恒武遺跡群や隣接する笠井若林遺跡の調査では、古墳時代後期から中世以降までの遺構が発見され、特に奈良・平安時代が主体であった。今回の調査もこれと同様の結果であった。今回の調査で、出土遺物によって時期が明確な遺構を時期別に列記すると下記のようになる。

古墳時代後期：18（溝・流路・土坑等14　住居跡４）

奈良・平安時代：41（溝・流路・土坑等35　住居跡４　掘立柱建物跡２棟）

中世以降：14（溝・流路・土坑等15　住居跡０）

古墳時代後期の遺構は、恒武遺跡群でも南側に多く、北側に少ない傾向があり、奈良・平安時代では、逆に北側に多く、南側に少ない傾向がある。恒武東覚遺跡は、恒武遺跡群では北側にあり、奈良・平安時代の遺構が中心になるという、これまでと同様の傾向を示しており、集落域の移動を検討する上で重要な資料を提供している。

最後になりましたが、調査に当たっては下記の諸氏に御教示を得ました。記して御礼申上げます。

後藤健一、佐藤由紀男　佐野一夫　鈴木一有　鈴木敏則　辰巳　均　松井一明、向坂鋼二（50音順）

表2　検出遺構一覧

調査次	調査区	旧番号	新番号	大きさ	深さ	方向	時期	備考
1次	1区	SD101	SD2	－	69	E		
1次	1区	SD102	SD4	30	10	E		
1次	1区	SD103	SD3	40	24	S82°E		
1次	1区	SD104	SD1	80	40	N16°E		
1次	1区	SD201	SR213	1200	55	N18°E	8世紀後葉～9世紀初頭	大溝
1次	1区	SD202	SD231	100	34	N32°E		
1次	1区	SD203	SD230	70	38	N19°E	13世紀	
1次	1区	SD204	SD229	82	13	N		
1次	1区	SD205	SD233	40	10	N77°W		
1次	1区	SD206	SD232	40	8	N71°W	6世紀末～7世紀前葉？	
1次	1区	SD207	SD234	－	11	N20°E		
1次	1区	SD208	SD223	90	17	N14°W		
1次	1区	SD209	SD224	66	26	N66°W		
1次	1区	SD210	SD225	60	10	N64°W		
1次	1区	SD212	SD226	60	15	N62°W		
1次	1区	SD213	SD227	74	21	N62°W		
1次	1区	SD214	SD228	72	20	N60°E		6末～7初の甕出土
1次	1区	－	SD10	36	5	E		
1次	1区	－	SD243	30	6	N65°W		
1次	1区	－	SR212	180	14	N		
1次	2区	SD105	SD6	－	50	W－E	近世	
1次	2区	SD106	SD7	46	5	N80°W	中世	
1次	2区	SD107	SD8	28	5	N8°W	中世	
1次	2区	SD108	SD9	130	15	N68°W	13世紀	
1次	2区	SD109	SD5	56	20	N78°W	中世	
1次	2区	SD215	SD240	80	36	N	中世以降	
1次	2区	SD216	SD241	86	25	N	中世以降	
1次	2区	SD217	SD238	176	30	N25°W	中世	
1次	2区	SD219	SR215	1240	46	N	6世紀末～7世紀後半	大溝
1次	2区	SD219a	SR216	160	14	N	6世紀末～7世紀後半	
1次	2区	SD220	SD237	68	8	N10°E		
1次	2区	SD221	SD239	256	34	N28°W	9世紀後半	
1次	2区	SD223	SD242	84	19	N4°E	7世紀中葉？	
1次	2区	SD224	SD236	50	12	N2°E		
1次	2区	SD225	SD235	44	10	N2°E		
1次	2区	SD226	SR215	250	30	N0°	7世紀前半	
1次	2区	SD227	SR214	210	56	N11°W		
1次	2区	SF101	SF1	118×108	8		中世	
1次	2区	SF201	SF206	182×100	26		中世	
1次	2区	SF202	SF207	170	38			
1次	2区	SF203	SF208	108×74	38		中世	
1次	2区	SF204	SF209	134×112	47		中世	
1次	2区	SF205	同じ	150	68			碗
1次	2区	SX102	SE1	340	108		中世	
1次	2区	SX204	SX201	154	47		中世	
2次	1区	SR101	SR224	－	23	N10°E	古墳後期	
2次	1区	SR102	SR223	240	34	N10°E	古墳後期	
2次	1区	SR103	SR217	340	60	N5°E	古墳後期	
2次	1区	SR104	SR219	180	20	N0°	古墳後期	
2次	1区	SR105	SR222	30～120	24	N4°E	古墳後期	
2次	1区	SR106	SR220	220	14	N6°E	古墳後期	
2次	1区	SR107	SR221	100	13	N0°	古墳後期	
2次	1区	SR108	SR218	530	30	N0°	古墳後期	
2次	1区	SX101	SX202	－	53		古墳後期	
2次	1区	同上	SX203	－	23			
2次	1区	同上	SX204	－	37			
2次	2区	SB201	SB303	－	26	S65°E	8世紀後葉	
2次	2区	SB202	SB304	690×－	17	E	8世紀後葉	
2次	2区	SB203	SB305	620×－	18	－	8世紀後葉	
2次	2区	SB204	SB301	－	－	S43°E	7世紀後半	
2次	2区	SB205	SB302	260×－	10	－	8世紀後葉	一括廃棄遺物
2次	2区	SB206	SB402	－	5	－	7世紀後葉	
2次	2区	SB207	SB403	－	9	－	7世紀後葉	

調査次	調査区	旧番号	新番号	大きさ	深さ	方向	時期	備考
2次	2区	SD201	SD326	56	24	N25°W	7世紀後葉・8世紀後葉	一括廃棄遺物
2次	2区	SF101	SF204	−	29			
2次	2区	SF202	SF312	86×70	20			
2次	2区	SH301	SP410	340×70	26			布掘り
2次	2区	SH302	SP404	−	26			布掘り
2次	2区	SP201	SP316	52×44	17			
2次	2区	SR101	SR211	−	30	N35°E	8世紀前半	
2次	2区	SR102	SR209	120	12	N33°E	8世紀後葉	
2次	2区	SR103	SR210	130	36	N46°E	8世紀前半	
2次	2区	SR104	SR208	52	13	N31°E		
2次	2区	SR105	SR207	408	12	N55°E	8世紀前半	
2次	2区	SR106	SR205	360	25	N47°E	8世紀前葉～中葉	
2次	2区	SR107	SR206	140	36	N47°E	8世紀	
2次	2区	SR108	SD222	200	23	N0°	8世紀	
2次	2区	SR109	SR303	150	46	N45°E	中世	
2次	2区	SR110	SR201	160	41	N32°W	中世	
2次	2区	SR201	SD329	190	27	N4°W	8世紀後半	
2次	2区	SR202	SR302	540	44	N40°E	8世紀前半	
2次	2区	SR203	SR301	140	36	N47°E	8世紀前半	
2次	2区	SR204	SD328	40	21	N0°		
2次	2区	SR205	SD331	100	17	N4°W		
2次	2区	SR206	SD327	58	17	N80°E	8世紀後半	
2次	2区	SR207	SD330	104	18	N7°W		
2次	2区	SR208	SD332	114	18	N6°W	7世紀後半？	
2次	2区	SR301	SD403	60	23	N63°E		区画溝
2次	2区	−	SF311	148×72	16			
2次	2区	−	SH301			N56°W		
2次	2区	−	SP308	60×−	9			
2次	2区	−	SP309	90×−	27			
2次	2区	−	SP310	80×−	15			
2次	2区	−	SP311	50×50	17			
2次	2区	−	SP312	66×50	12			
2次	2区	−	SP313	54×52	13			
2次	2区	−	SP314	62×46	13			
2次	2区	−	SP315	54×52	13			
2次	2区	−	SP317	64×−	18			
2次	2区	−	SP318	84×66	15			
2次	2区	−	SP319	−	20			
2次	2区	−	SP320	40×30	13			
2次	2区	−	SP321	36×30	27			
2次	2区	−	SP405	46×46	47			
2次	2区	−	SP406	76×56	32			
2次	2区	−	SP407	44×−	14			
2次	2区	−	SP408	−	22			
2次	2区	−	SP409	50×48	20			
2次	2区	−	SP411	64×50	15			
2次	2区	−	SP412	75×200	20			
2次	2区	−	SP412	72×72	33			
2次	2区	−	SP413	102×−	14			
2次	2区	−	SP414	28×28	12			
2次	2区	−	SP415	120×−	30			
2次	2区	−	SP416	52×−	44			
2次	2区	−	SP417	64×50	16			
2次	2区	−	SP418	30×30	15			
2次	2区	−	SP419	20×20	15			
2次	2区	−	SP420	62×54	39			
2次	2区	−	SP421	52×−	33			
2次	3区	SF206	SF203	92×46	22			
2次	3区	SR201	SR202	−	100	N58°E	8世紀～10世紀前半	
2次	3区	SR202	SR203	640	100	N50°E	8世紀～10世紀前半	
2次	3区	SR203	SR204	900	46	N48°E	7世紀？～8世紀	
2次	4区	SB301	SB401	560×−	10	−	6世紀後半	
2次	4区	SD101	SD212	58	17	S71°W	10世紀前半	

調査次	調査区	旧番号	新番号	大きさ	深さ	方向	時期	備考
2次	4区	SD102	SD219	−	8	N71°E	8世紀前半	
2次	4区	SD103	SD218	60	26	N11°E	8世紀前半	
2次	4区	SD104	SD217	60	16	N20°E	8世紀中葉	
2次	4区	SD105	SD220	30	8	N8°E		
2次	4区	SD106	SD221	−	7	N18°E	8世紀中葉	
2次	4区	SD107	SD214	226	10	N	9世紀後半～10世紀前半	区画溝
2次	4区	SD108	SD215	62	10	N69°W		
2次	4区	SD109	SD216	60	6	N83°W		
2次	4区	SD110	SD213	286	12	N	9世紀後半～10世紀前半	区画溝
2次	4区	SD111	SD211	30	10	N85°E	8世紀前葉	
2次	4区	SD112	SD210	40	6	N85°E		
2次	4区	SD113	SD207	44	8	N70°W		
2次	4区	SD114	SD208	100	6	N80°E	8世紀後葉	
2次	4区	SD115	SD209	98	7	N10°W		
2次	4区	SD116	SD206	50	10	N5°W	9世紀後半～10世紀前半	
2次	4区	SD117	SD205	80	18	N10°W	10世紀前半	
2次	4区	SD118	SD203	148	10	N16°W	8世紀後葉～10世紀前半	
2次	4区	SD119	SD201	−	18	N19°W	8世紀後葉～10世紀前半	
2次	4区	SD120	SD204	288	11	N10°W	10世紀前半	8Cの遺物も多い
2次	4区	SD201	SD323	80	14	N60°W	8世紀後半	
2次	4区	SD202	SD322	50	10	N40°E		
2次	4区	SD203	SD319	58	14	N72°W		
2次	4区	SD204	SD320	46	10	N28°E		
2次	4区	SD205	SD321	80	10	N66°W		
2次	4区	SD206	SD324	150	18	N35°E		
2次	4区	SD207	SD325	−	6	N28°E		
2次	4区	SD208	SD311	100	6	N16°E	6世紀末～7世紀初？	
2次	4区	SD209	SD301	52	15	N16°W		
2次	4区	SD210	SD306	68	14	N6°E		
2次	4区	SD211	SD303	50	10	W		
2次	4区	SD212	SD309	140	11	N		区画溝
2次	4区	SD213	SD315	30	9	N69°W		
2次	4区	SD214	SD316	70	3	N82°W		
2次	4区	SD215	SD313	40	13	N5°E		
2次	4区	SD216	SD312	76	6	N82°W		
2次	4区	SD217	SD314	104	7	N		
2次	4区	SD218	SD318	60	25	N56°W		
2次	4区	SD219	欠番					
2次	4区	SD220	SD310	60	9	N33°E		
2次	4区	SD221	SD317	60	16	N70°W		
2次	4区	SD301	SD401	45	10	N54°W	8世紀前半	
2次	4区	SD302	SD402	45	10	N105°W		
2次	4区	SD303	SD302	60	11	N15°W		
2次	4区	SD304	SD307	44	9	N		
2次	4区	SD305	SD304	60	7	N23°E		
2次	4区	SD306	SD305	82	9	N70°W～W		
2次	4区	SD307	欠番					
2次	4区	SD308	同じ	60	6	N2°E		
2次	4区	SE201	SE301	−	135		8世紀後葉	
2次	4区	SF101	SF202	150×−	15		8世紀後半	
2次	4区	SF102	SF210	60×−	25			
2次	4区	SF201	SF305	116×76	4			
2次	4区	SF201	SF308	110×94	10			
2次	4区	SF202	SF307	94×72	14			
2次	4区	SF202	SP303	80×−	5			
2次	4区	SF203	SF302	230×126	10			
2次	4区	SF301	同じ	62×46	25	N20°W		
2次	4区	SF303	SP304	54×54	10			
2次	4区	SH101	SH201	柱間160		N45°W	9世紀後半	
2次	4区	SP101	SP214	76×62	16			
2次	4区	SP102	SP208	80×66	10			
2次	4区	SP103	SP209	70×−	4			
2次	4区	SP104	SP210	70×60	9			

調査次	調査区	旧番号	新番号	大きさ	深さ	方向	時期	備考
2次	4区	SP105	SP211	70×60	11			
2次	4区	SP106	SP212	60×60	14			
2次	4区	SP107	SP213	40×40	11			
2次	4区	SP108	SP207	70×70	5		8世紀後葉	
2次	4区	SP109	SP204	100×78	8		10世紀前半	
2次	4区	SP110	SP205	82×70	15			
2次	4区	SP111	SP206	60×46	6			
2次	4区	SP112	SP202	100×76	12			
2次	4区	SP113	SP203	54×54	22			
2次	4区	SP114	SP201	58×44	10			
2次	4区	SP116	SF201	72×72	5			
2次	4区	SP117	SP219	66×−	6			
2次	4区	SP119	SP220	50×50	8		6世紀末～7世紀初	
2次	4区	SP120	SP217	50×50	11			
2次	4区	SP121	SP218	86×−	11			
2次	4区	SP122	SP216	54×50	9			
2次	4区	SP123	SP215	64×46	14			
2次	4区	SP201	SP327	45×40	10			
2次	4区	SP202	SF310	54×70	22			
2次	4区	SP203	SP307	150×44	11			布掘り
2次	4区	SP204	SF309	80×80	24			
2次	4区	SP205	同上	同上	同上			
2次	4区	SP206	SF306	73×60	35			
2次	4区	SP207	SF304	60×60	24			
2次	4区	SP208	SP322	50×40	26			
2次	4区	SP209	SP323	80×40				
2次	4区	SP210	SP324	40×40	15			
2次	4区	SP211	SP306	78×52	20			
2次	4区	SP212	SP303	54×−	13			
2次	4区	SP213	SP325	55×45	20			
2次	4区	SP214	SP326	30×30	10			
2次	4区	SP215	SP305	60×60	10			
2次	4区	SP301	SP401	100×85	25			
2次	4区	SP302	SP402	90×62	14			
2次	4区	SP303	SP403	72×54	25			
2次	4区	SP305	SF401	120×110	8			
2次	4区	SP306	畑状遺構					
2次	4区	SP308	SP302	60×48	10			
2次	4区	SP309	SP301	40×40	13			
2次	4区	−	SF303	150×−	15			

表3　遺物観察表

図番号	図中番号	図版番号	遺構	種別	器種	時期	口径	最大径	底径	高台径	器高	つまみ径	色調	残存率	反転実測	備考
9	1		SB402	須	壷		(11.2)	−	−	−	−	−		10	○	
9	2		SB402	土	甕		−	−	5.4	−	−	−	橙	10	○	
9	3		SB402	須	高坏	7世紀 3～4四半期	(15.3)	−	−	−	−	−	灰	30	○	自然釉
9	4	25	SB402	須	坏	7世紀 3～4四半期	(11.4)	−	−	−	−	−	灰	30	○	
9	5	25	SB402	須	蓋	7世紀 3～4四半期	10.1	12.3	−	−	3.2	2.4	灰	100	−	自然釉
9	6		SB402	土	甕	7世紀 3～4四半期	(17.6)	−	−	−	−	−	橙	20	○	
9	7		SB402	土	坏	7世紀 3～4四半期	(10.0)	−	−	−	(5.6)	−	淡褐	50	○	
9	8		SB402	土	甕	7世紀 3～4四半期	(32.2)	−	−	−	−	−	淡褐	10	○	
9	9		SB402	土	?	7世紀後葉	−	−	(13.6)	−	−	−	淡橙	10		脚部のみ
9	10		SB402	土	台付甕	7世紀 3～4四半期	−	−	−	−	−	−	淡褐	10		丹塗り
11	1		SB301	土	坏	7世紀後葉	(12.6)	−	7.0	−	4.5	−	黒灰	60		
11	2		SB301	須	坏	7世紀 3～4四半期	(10.9)	−	−	−	−	−	灰	50	○	
11	3		SB301	須	坏	7世紀 3～4四半期	(11.4)	−	(3.4)	−	4.0	−	赤褐	30	○	
11	4		SB301	須	坏	7世紀4四半期	(10.3)	−	(5.8)	−	3.8	−	灰	50	○	
11	5		SB301	土	皿	7世紀前半	11.2	−	−	−	2.3	−	灰白	40	○	
11	6		SB301	土	坏	7世紀後半	−	−	−	−	−	−				
11	7		SB301	須	坏	7世紀4四半期	−	−	3.0	−	−	−	灰	20	○	
11	8		SB301	須	坏	7世紀4四半期	−	−	3.0	−	−	−	灰	30	○	
11	9		SB301	須	坏	7世紀4四半期	−	−	−	9.3	−	−	灰	10	−	台付
11	10		SB301	須	高坏		−	−	−	−	−	−	灰	50	−	
11	11		SB301	須	蓋	7世紀 3～4四半期	10.4	12.2	−	−	3.1	2.7	灰	100	−	自然釉
11	12		SB301	須	蓋	7世紀 3～4四半期	10.1	12.2	−	−	2.7	2.8	灰	30	○	
11	13		SB301	須	蓋	7世紀4四半期	10.0	12.1	−	−	3.2	2.8	灰	30	○	自然釉
11	14	25	SB301	須	蓋	7世紀 3～4四半期	3.8	12.0	−	−	3.3	2.9				
11	15	25	SB301	土	坏	7世紀前半	8.3	−	3.4	−	3.7	−	淡褐	100	−	手捏ね
11	16		SB301		土錘		2.3	1.1	1.1							
15	1	25	SR215	土	甕	6世紀後半 ～7世紀前半	17.0	28.8	10.0	−	27.4	−	黄褐	80	−	
15	2	25	SR215	土	甕	6世紀後半 ～7世紀前半	15.9	−	6.6	−	17.4	−	黄褐	80	−	
15	3		SR215	須	坏	6世紀末 ～7世紀初頭	11.2	12.4	8.3	−	5.6	−	緑灰	40	○	TK209
15	4		SR215	須	坏	6世紀後半	−	−	3.6	−	−	−	青灰	10	○	
15	5		SR215	土	高坏	5世紀後葉	15.9	−	10.6	−	11.4	−	橙	50	○	
15	6		SR215	土	甕	5世紀後半	14.9	33.1	7.3	−	32.9	−	灰白	90	○	
15	7	25	SR215	土	甕	6世紀中葉	(13.2)	(16.9)	−	−	−	−	橙	40	○	
20	1		SB302	須	坏	7世紀4四半期	(9.1)	−	(5.4)	−	3.5	−	灰	20	○	
20	2	27	SB302	須	坏	7世紀後半	(10.6)	−	5.2	−	3.7	−	灰	80	−	焼成不良
20	3		SB302	須	坏	7世紀後半	(11.6)	−	4.0	−	3.8	−	灰	30	○	
20	4	27	SB302	須	坏	7世紀後半	11.1	−	5.4	−	3.5	−	灰	90	−	
20	5		SB302	須	坏	7世紀4四半期	(15.4)	−	−	−	−	−	灰	20	○	
20	6		SB302	土	甕	8世紀後葉	(16.7)	(17.6)	−	−	−	−	淡橙	30	○	
20	7	27	SB302	土	甕		22.2	−	−	−	−	−	黄橙	40	○	

図番号	図中番号	図版番号	遺構	種別	器種	時期	口径	最大径	底径	高台径	器高	つまみ径	色調	残存率	反転実測	備考
20	8		SB302	土	甕		(19.5)	−	−	−	−	−	赤灰	10	○	
20	9		SB302	土	甕		(23.0)	−	−	−	−	−	赤灰	10	○	
20	10		SB302	土	甕	8世紀？	(21.6)	−	−	−	−	−	淡褐	10	○	
20	11		SB302	土	甕	7世紀	(12.8)	−	−	−	−	−	橙	10	○	
20	12		SB302	土	甕	8世紀	(21.0)	−	−	−	−	−	淡褐	10	○	
20	13		SB302	土	甕	8世紀後葉	(19.6)	−	−	−	−	−	淡橙	10	○	
20	14		SB302	土	甕		(21.2)	−	−	−	−	−	赤灰	10	○	
20	15		SB302	土	甕		(22.4)	−	−	−	−	−	淡褐	10	○	
20	16		SB302	土	甕	8世紀後葉	(20.8)	−	−	−	−	−	淡橙	10	○	
20	17		SB302	土	台付甕	8世紀後葉	−	−	−	−	−	−	淡橙	10		丹塗り
21	1		SB302	土	台付甕	7世紀3四半期	−	−	−	−	−	−	橙	20		
21	2		SB302	土	坏	7世紀	(10.6)	−	−	−	3.1	−	淡褐	40	○	手捏ね
21	3		SB302	土	坏	7世紀	(10.1)	−	−	−	4.5	−	淡褐	20	○	手捏ね
23	1		SB303	須	蓋	8世紀前葉	(18.7)	−	−	−	−	−	灰白	20	○	焼成不良
23	2		SB304	須	壷		(10.6)	−	−	−	−	−	灰	10	○	
23	3		SB304	須	坏	8世紀中葉	(14.0)	−	−	(10.6)	4.2	−	灰	20	○	
23	4	27	SB304	土	皿	8世紀	16.0	−	12.0	−	3.3	−	赤褐	50		丹塗り
23	5		SB304	土	甕		(14.2)	−	−	−	−	−	橙	10	○	
23	6		SB304	土	甕	8世紀後葉	(31.8)	−	−	−	−	−	褐	10	○	
23	7		SB305	須	坏	8世紀中葉	(14.8)	−	−	9.8	4.1	−	灰	40	○	
23	8	27	SB305	土	坏	8世紀後葉	13.3	−	8.0	−	3.6	−	淡褐	70		丹塗り
23	9		SB305	土	甕	8世紀後葉	(21.4)	−	−	−	−	−	茶灰	10	○	
27	1	28	SD326	須	坏	7世紀4四半期	10.8	11.0	−	−	2.7	−	灰	100		
27	2	28	SD326	須	坏	7世紀4四半期	(12.2)	−	5.2	−	4.1	−	灰	50	○	
27	3	28	SD326	須	坏	7世紀4四半期	11.5	−	8.0	−	4.0	−	淡灰	70	−	
27	4	28	SD326	須	坏	7世紀4四半期	(31.1)	−	−	−	3.5	−	灰	30	○	
27	5		SD326	須	高坏	7世紀4四半期	(16.2)	−	−	−	−	−	灰	30	○	湖西産
27	6		SD326	須	高坏	7世紀4四半期	(14.4)	−	−	−	−	−	灰	20	○	
27	7		SD326	須	高坏	7世紀4四半期	−	−	−	−	−	−	灰	30	−	
27	8		SD326	須	蓋	7世紀4四半期	13.1	13.5	−	−	3.3	3.0	黒灰	30	−	
27	9	28	SD326	須	蓋	7世紀4四半期	13.5	13.8	−	−	3.3	3.0	灰	50	−	
27	10		SD326	須	蓋	7世紀4四半期	12.1	12.4	−	−	3.1	2.9	淡灰	20	○	
27	11	28	SD326	須	蓋	7世紀4四半期	10.8	12.9	−	−	3.6	2.6	灰	100		
27	12	28	SD326	須	蓋	7世紀4四半期	10.2	12.4	−	−	3.0	3.0	灰	100		自然釉
27	13		SD326	須	蓋	7世紀4四半期	(10.3)	−	−	−	3.5	−	灰	30	○	
27	14		SD326	須	蓋	7世紀4四半期	(9.4)	−	−	−	3.5	−	灰	30	○	
27	15		SD326	土	鉢	7世紀4四半期	(20.0)	−	−	−	−	−	茶灰	10	○	
27	16	28	SD326	土	坏	7世紀4四半期	(17.8)	−	9.0	−	8.1	−	淡褐	40	○	丹塗り
27	17	28	SD326	土	坏	7世紀4四半期	(18.6)	−	6.0	−	5.3	−	淡褐	30	○	丹塗り
27	18		SD326	土	甕	7世紀4四半期	(14.2)	−	−	−	−	−	赤褐	10		
27	19		SD326	土	坏	8世紀前半	(16.8)	−	−	−	−	−	茶灰	20	○	丹塗り
27	20		SD326	土	坏	8世紀後葉	(16.6)	−	−	−	−	−	淡褐	10	○	
27	21		SD326	土	甕		(29.6)	−	−	−	−	−	茶灰	10	○	
27	22		SD326	土	甕	8世紀前半	(19.8)	−	−	−	−	−	橙	10	○	
27	23		SD326	土	甕	8世紀後葉	(20.3)	−	−	−	−	−	茶灰	10	○	
27	24	28	SD326	土	坏	8世紀後葉	9.0	−	4.0	−	3.8	−	灰白	60		手捏ね
32	1		SR202	須	坏	7世紀中葉	(9.4)	(11.4)	−	−	−	−	灰白	20	○	
32	2		SR202	須	蓋	6世紀末～7世紀初頭	12.8	−	−	−	3.2	−	灰	10	○	
32	3	27	SR202	須	坏	8世紀前半	(15.0)	−	−	(10.3)	4.4	−	灰白	50	○	
32	4		SR211	土	坏	7世紀	(9.7)	−	−	−	(2.2)	−	灰白	40	○	

図番号	図中番号	図版番号	遺構	種別	器種	時期	口径	最大径	底径	高台径	器高	つまみ径	色調	残存率	反転実測	備考
32	5		SR202	須	坏	8世紀前半	(14.2)	−	−	10.6	4.4	−	灰白	50	○	
32	6		SR202	須	坏	8世紀前半	(15.4)	−	−	(9.7)	3.7	−	灰	20	○	
32	7		SR202	須	坏	8世紀中葉	(15.1)	−	−	(9.8)	4.2	−	灰白	30	○	
32	8		SR202	須	坏	8世紀中葉	(15.7)	−	−	(10.7)	4.0	−	灰	30	○	
32	9		SR202	須	坏	8世紀前半	(15.2)	−	−	(12.7)	3.2	−	黄灰	20	○	
32	10		SR202	須	坏	8世紀後半	(12.8)	−	(11.2)	−	3.5	−	灰	20	○	
32	11		SR202	須	坏	8世紀末～9世紀初頭	11.2	−	7.2	−	3.6	−	灰	40	○	
32	12		SR202	須	坏	8世紀前半	−	−	−	(9.7)	−	−	灰白	10	○	自然釉
32	13		SR202	須	坏	8世紀前半	−	−	−	(10.0)	−	−	灰白	10	○	自然釉
32	14		SR202	須	蓋	8世紀前葉～中葉	14.4	14.7	−	−	3.0	2.4	黄灰	30	○	
32	15		SR202	須	蓋	8世紀末～9世紀初頭	−	14.2	−	−	1.8	1.9	青灰	60	−	
32	16		SR202	灰	碗	9世紀末～10世紀初	−	−	−	6.2	−	−	淡褐	20	○	
32	17		SR202	灰	碗	10世紀後半	(15.8)	−	−	7.0	4.5	−	灰白	60	○	
32	18		SR202	灰	碗	9世紀後半～10世紀前半	−	−	−	10.4	−	−	灰白	10	○	
32	19		SR202	灰	碗	9世紀末～10世紀初	−	−	−	(8.5)	−	−	灰白	20	○	
32	20		SR202	灰	大碗	9世紀後半～10世紀前半	−	−	−	9.5	−	−	灰白	10	○	
32	21	27	SR202	灰	段皿	9世紀中葉～後葉	12.1	12.4	5.0	7.0	2.5	−	灰白	50	−	
32	22		SR202	土	甕	8世紀前半	20.4	−	−	−	−	−	灰白	25	○	
32	23		SR202	土	甕	5世紀？	(21.2)	−	−	−	−	−	淡褐	10	○	
32	24		SR202	土	甕	8世紀	19.2	−	−	−	−	−	灰白	25	−	
32	25		SR202	土	甕	8世紀	(22.6)	−	−	−	−	−	褐	10	○	
32	26		SR202	土	甕	8世紀	(20.8)	−	−	−	−	−	橙	10	○	
32	27		SR202	土	台付甕	8世紀	−	−	−	13.2	−	−	褐	10	○	
32	28		SR202	土	高盤	8世紀後葉	−	−	−	10.0	−	−	淡褐	30		丹塗り
32	29		SR202	土	甕	7世紀～8世紀前半	−	−	6.4	−	−	−	橙	10		
32	30	27	SR202	土	ミニチュア	8世紀	5.2	−	3.7	−	3.5	−	黄橙	100		
32	31	27	SR202		獣足		3.0	2.1	1.8							
32	32	27	SR202		土製品		2.3	4.2	1.4							馬形？
32	33	27	SR202		獣足		2.0	2.1	1.5							
33	1		SR203	須	坏		(11.9)	−	(8.2)	−	4.3	−	灰	50	○	
33	2		SR203	須	坏	8世紀前半	(14.2)	−		(10.0)	4.3	−	灰白	20	○	
33	3		SR203	須	坏	8世紀後半	(13.1)	−	(10.8)	−	3.7	−	灰	30	○	
33	4		SR203	須	高坏	8世紀前半	(18.2)	−	−	−	−	−	灰白	10		
33	5		SR203	須	坏	8世紀前半										
33	6		SR203	須	碗	8世紀初頭	−	−	−	(8.7)	−	−	灰白	10	○	
33	7		SR203	須	壷	8世紀前半	−	−	−	7.9	−	−	灰白	10	○	自然釉
33	8		SR203	須	壷	8世紀前半	−	−	−	8.0	−	−	灰白	10	○	自然釉
33	9		SR203	須	壷	8世紀前半	−	−	−	(13.5)	−	−	灰	10	○	
33	10		SR203	須	蓋	8世紀中葉	14.7	15.4	−	−	−	−	灰	80		
33	11		SR203	須	蓋	8世紀	(12.7)	−	−	−	2.2	−	灰	20	○	
33	12	32	SR203	須	壷	8世紀	−	16.9	−	8.5	−	−	灰	60	−	
33	13	32	SR203	須	盤	9世紀前葉	−	−	15.7	11.1	−	−	灰白	10	○	台付
33	14		SR203	山	碗	12世紀後半	16.7	−	−	8.7	5.3	−	灰白	100		
33	15		SR202	山	碗	12世紀末～13世紀初	14.8	−	−	−	−	−	灰白	10	○	常滑産

図番号	図中番号	図版番号	遺構	種別	器種	時期	口径	最大径	底径	高台径	器高	つまみ径	色調	残存率	反転実測	備考
33	16		SR203	灰	碗		−	−	−	7.4	−	−	黄灰	10		
33	17		SR204	須	坏	7世紀後半	(13.5)	−	8.1	−	3.4	−	灰白	40	○	
33	18		SR204	須	高坏	7世紀後半	(14.8)	−	−	−	−	−	灰白	20	○	
33	19		SR204	須	高坏	7世紀中葉～後葉	15.2	−	−	−	−	−	灰	50		
33	20		SR204	須	坏		(10.2)	−	−	−	3.4	−	灰	20	○	
33	21		SR204	須	蓋	8世紀後半	(15.1)	(15.3)	−	−	3.4	1.8	灰	30	○	
33	22		SR204	須	蓋	7世紀4四半期	(11.8)	12.0	−	−	3.5	2.6	灰	50	−	自然釉
33	23		SR204	須	蓋	7世紀後半	(9.6)	(12.4)	−	−	3.5	2.8	灰白	30	○	
33	24		SR204	土	坏	8世紀前半	16.4	−	11.2	−	2.9	−	黄橙	20	○	丹塗り
33	25	32	SR204	土	坏	8世紀前半	9.5	−	4.5	−	4.6	−	赤褐	100		手捏ね
33	26		SR204	土	坏		13.8	−	−	−	−	−			−	
33	27		SR204	土	盤	8世紀前半	−	−	−	10.2	−	−	赤褐	50		丹塗り
33	28		SR204	土	台付甕		−	−	(9.0)	−	−	−	橙	10	○	
33	29		SR204	土	鍋	中世	20.9	26.7	−	−	−	−	黄橙		−	伊勢鍋
36	1	29	SR213	須	坏	8世紀3四半期	18.2	−	−	11.2	7.1	−	灰白	10	○	
36	2		SR213	須	坏	8世紀3四半期	16.3	−	−	11.8	4.4	−	灰白	20	○	ｽﾉｺ圧痕
36	3		SR213	須	坏	8世紀3四半期	15.9	−	9.3	9.3	4.4	−	灰白	40	−	
36	4		SR213	須	坏	8世紀3四半期	14.7	−	−	10.2	4.6	−	灰白	30	○	
36	5	29	SR213	須	坏	8世紀3四半期	13.5	−	9.7	9.7	3.7	−	灰赤	90	○	
36	6		SR213	須	坏	8世紀3四半期	14.1	−	11.7	10.0	4.1	−	灰赤	60	○	
36	7	29	SR213	須	坏	8世紀後葉	15.0	−	−	10.0	4.1	−	灰白	40	○	
36	8		SR213	須	坏	8世紀中葉	14.1	−	−	10.0	3.8	−	灰白	10	○	
36	9		SR213	須	盤？	8世紀後葉～9世紀前葉	−	−	−	8.8	−	−	灰白	10	○	台付皿？
36	10	29	SR213	須	坏	8世紀後葉	13.4	−	9.2	−	4.9	−	灰白	100	−	
36	11		SR213	須	坏	7世紀後半	10.2	−	(4.2)	−	3.7	−	灰	50	○	
36	12		SR213	須	坏	8世紀後葉	11.7	−	8.0	−	3.8	−	灰白	50		
36	13		SR213	須	坏	8世紀後葉	12.0	−	8.3	−	3.2	−	灰	100	−	
36	14	29	SR213	須	坏	8世紀後葉	12.9	−	9.5	−	3.1	−	灰	40	−	
36	15		SR213	須	坏	8世紀後葉	10.8	−	7.3	−	3.4	−	灰	100	−	墨書？
36	16	29	SR213	須	坏	8世紀後葉	10.0	−	8.2	−	3.8	−	灰	60	−	
36	17		SR213	須	坏	8世紀3四半期	14.1	−	−	−	4.0	−	灰白	100	○	墨書？
36	18		SR213	須	坏	8世紀中葉	13.4	−	3.4	−	4.0	−	灰白	50	○	
36	19		SR213	須	坏	8世紀中葉	14.0	14.0	7.2	−	4.5	−	灰	60	○	
36	20		SR213	須	高坏		−	−	−	−	−	−	灰	10		
37	1	31	SR213	須	長頸壷	8世紀後半	(7.3)	12.6	6.7	−	(18.7)	−	ｵﾘｰﾌﾞ灰	80	−	自然釉
37	2		SR213	須	甕	8世紀	22.9	−	−	−	−	−	灰白	10	○	
37	3		SR213	須	甕	8世紀	−	−	−	−	−	−	灰白	10	○	
37	4		SR213	須	壷	8世紀	(19.4)	−	−	−	−	−	ｵﾘｰﾌﾞ灰	10	○	
37	5		SR213	須	壷	8世紀	12.0	−	−	−	−	−	灰白	10	○	自然釉
37	6		SR213	須	壷	8世紀	14.4	−	−	−	−	−	灰白	10	○	
37	7		SR213	須	蓋	8世紀後葉	16.0	−	−	−	3.0	2.7	灰	30	○	
37	8	29	SR213	須	蓋	8世紀後葉	15.3	−	−	−	3.9	2.8	灰	95	−	
37	9		SR213	須	蓋	8世紀後葉新	14.6	15.4	−	−	3.4	2.1	灰	40	○	
37	10	29	SR213	須	蓋	8世紀末～9世紀初	14.0	14.2	−	−	2.8	2.1	灰白	60	−	
37	11		SR213	須	蓋	8世紀後葉	14.2	14.9	−	−	2.2	−	灰	70	−	転用硯
37	12	29	SR213	須	蓋	8世紀後葉	15.6	16.1	−	−	3.1	2.0	灰	50	−	
37	13		SR213	土	甕		−	−	−	−	−	−	橙	10	−	人面墨書
38	1		SR213	土	坏	8世紀後葉	13.6	−	−	10.7	4.0	−	赤華	40	○	丹塗り 墨書

図番号	図中番号	図版番号	遺構	種別	器種	時期	口径	最大径	底径	高台径	器高	つまみ径	色調	残存率	反転実測	備考
38	2		SR213	土	坏	8世紀後葉	(16.0)	−	−	(11.2)	(6.4)	−	赤褐	10	○	丹塗り
38	3		SR213	土	坏	8世紀末～9世紀初	−	−	−	(12.9)	−	−	黄橙	10	○	
38	4		SR213	土	台付碗	8世紀末～9世紀初	−	−	−	−	−	−	赤褐	10	○	丹塗り
38	5		SR213	土	高坏	5世紀？	−	−	−	−	−	−	黄橙	40	○	
38	6		SR213	土	高坏		−	−	(11.4)	−	−	−	黄橙	10	○	
38	7		SR213	土	坏	8世紀前半	(11.6)	−	−	−	(4.0)	−	黄橙	20	○	
38	8	32	SR213	土	鉢	8世紀後半～9世紀初頭	10.9	−	5.5	−	5.3	−	橙	70	○	手捏ね 底部穿孔 舌状赤彩
38	9		SR213	土	坏	8世紀	(8.6)	−	−	−	(3.5)	−	橙	20	○	
38	10		SR213	土	坏	8世紀	7.7	−	13.5	−	2.7	−	橙	95	−	手捏ね
38	11		SR213	土	坏	8世紀	7.6	−	3.5	−	3.0	−	黄橙	90	−	手捏ね
38	12		SR213	土	坏	8世紀	7.2	−	2.5	−	2.5	−	橙	95	−	手捏ね
38	13		SR213	土	坏	8世紀	7.7	−	3.0	−	2.7	−	橙	9	−	手捏ね
38	14		SR213	土	坏	8世紀	(8.0)	−	2.0	−	2.9	−	黄橙	70	−	手捏ね
38	15		SR213	土	坏	8世紀	(7.4)	−	−	−	(3.4)	−	橙	30	○	手捏ね
38	16		SR213	土	坏	8世紀	7.3	−	1.7	−	2.6	−	黄橙	40	−	手捏ね
38	17		SR213	土	坏	8世紀	7.5	−	2.9	−	2.9	−	黄橙	80	−	手捏ね
38	18	31	SD213	土	甑形	8世紀後半	16.3	−	(5.0)	−	9.3	−	橙	70	−	底部穿孔 舌状赤彩
38	19		SR213	土	甑形	8世紀後半	16.1	−	8.0	−	5.8	−	黄橙	25	○	舌状赤彩
39	1	32	SR213	土	皿	8世紀後葉	17.1	−	14.6	−	2.1	−	赤褐	80	−	丹塗り 墨書
39	2	32	SR213	土	皿	8世紀後葉	17.4	−	14.8	−	2.0	−	赤褐	90		丹塗り 墨書
39	3		SR213	土	皿	8世紀後葉	17.4	−	11.0	−	2.3	−	橙	10	○	丹塗り
39	4		SR213	土	皿	8世紀後葉	14.6	−	(10.5)	−	2.0	−	赤華	30	○	丹塗り
39	5		SR213	土	皿	8世紀後葉	14.0	−	−	−	−	−	橙	10	○	
39	6		SD213	土	皿	8世紀後葉	14.1	−	(10.2)	−	2.1	−	黄褐	20	○	
39	7		SR213	土	皿	8世紀後葉	(14.0)	−	−	−	2.7	−	黄橙	10	○	丹塗り
39	8		SR213	土	皿	8世紀後葉	(15.4)	−	−	−	2.3	−	黄橙	10	○	丹塗り
39	9		SR213	土	皿	8世紀後葉	13.6	−	10.8	−	2.3	−	赤褐	40	○	丹塗り
39	10	32	SR213	土	坏	8世紀後葉	14.1	−	8.5	−	2.7	−	赤橙	100	−	丹塗り
39	11		SR213	土	坏	8世紀後葉	13.3	−	−	−	−	−	橙	10	○	丹塗り
39	12		SR213	土	坏	8世紀後葉	(11.9	−	(7.4)	−	(3.8)	−	赤褐	20	○	丹塗り
39	13		SR213	土	坏	8世紀後葉	(13.6)	−	11.1	−	(2.9)	−	赤褐	20	○	丹塗り
39	14	32	SR213	土	坏	8世紀後葉	13.3	−	8.8	−	3.5	−	赤褐	70	−	丹塗り
39	15	32	SR213	土	坏	8世紀後葉	13.1	−	11.2	−	13.1	−	橙	90	−	丹塗り
39	16		SR213	土	坏	8世紀後葉	(13.5)	−	(8.8)	−	(3.0)	−	黄橙	20	−	丹塗り
39	17		SR213	土	坏	8世紀後葉	(12.8)	−	−	−	(3.0)	−	赤褐	20	○	丹塗り
39	18		SR213	土	坏	8世紀後葉	13.3	−	11.0	−	3.5	−	橙	80	−	丹塗り
39	19	29	SR213	土	皿	8世紀後葉	11.3	−	(7.4)	−	3.4	−	橙	90	−	丹塗り 暗文
40	1	30	SR213	土	甕	8世紀後葉	23.5	23.5	6.5	−	30.3	−	橙	90	−	
40	2	30	SR213	土	甕	8世紀後葉	20.3	20.4	5.8	−	23.7	−	橙	70	−	
40	3	30	SR213	土	甕	8世紀中葉	24.9	−	7.3	−	24.2	−	橙	50	−	
40	4	30	SR213	土	甕	8世紀後葉	17.3	17.3	7.2	−	28.0	−	黄橙	80	−	
41	1	30	SR213	土	甕	8世紀後葉	(19.5)	(19.5)	(6.1)	−	(21.6)	−	橙	30	○	
41	2	30	SR213	土	甕	8世紀後葉	23.6	22.8	−	−	−	−	橙	20	○	
41	3		SR213	土	甕	8世紀後葉	13.9	16.1	−	−	−	−	橙	30	○	丹塗り
41	4	31	SR213	土	坩	8世紀後葉	12.5	13.6	4.9	−	11.6	−	橙	90	○	

図番号	図中番号	図版番号	遺構	種別	器種	時期	口径	最大径	底径	高台径	器高	つまみ径	色調	残存率	反転実測	備考
41	5		SR213	土	坩	8世紀後葉	(13.1)	(14.2)	−	−	−	−	橙	20	○	
41	6	31	SR213	土	甕	8世紀末～9世紀初頭	26.1	22.2	7.0	−	14.2	−	橙	60	−	舌状赤彩
41	7	31	SR213	土	甕	8世紀後葉	23.8	22.4	−	−	(15.1)	−	橙	30	○	
41	8		SR213	土	甕	8世紀後葉	25.0	−	−	−	−	−	橙	10	○	
42	1		SR213	土	甕	8世紀末～9世紀初頭	23.7	−	−	−	−	−	黄橙	10	○	
42	2		SR213	土	甕	8世紀末～9世紀初頭	(24.4)	−	−	−	−	−	橙	10	○	
42	3		SR213	土	甕	8世紀末～9世紀初頭	(25.4)	−	−	−	−	−	橙	10	○	
42	4		SR213	土	甕	8世紀末～9世紀初頭	24.1	−	−	−	−	−	橙	10		
42	5		SR213	土	甕	8世紀末～9世紀初頭	(24.7)	−	−	−	−	−	橙	10	○	
42	6		SR213	土	甕	8世紀末～9世紀初頭	(25.5)	−	−	−	−	−	橙	10	○	
42	7		SR213	土	甕	8世紀後葉	(22.7)	−	−	−	−	−	橙	10	○	
42	8	31	SR213	土	鉢	8世紀末～9世紀初頭	40.0	−	9.9	−	40.0	−	橙	50	○	
42	9		SR213	土	甕	8世紀末～9世紀初頭	(39.4)	−	−	−	−	−	黄橙	10	−	
42	10		SR213	土	甕	8世紀末～9世紀初頭	35.2	−	−	−	−	−	橙	10	○	
42	11		SR213	土	甕	8世紀末～9世紀初頭	−	−	−	−	−	−	黄橙	10	○	
43	1		SH201	灰	碗	9世紀後半	(13.0)	−	−	−	4.0	−	淡灰	30	○	
43	2		SF202	土	坏		(14.8)	−	12.0	−	4.8	−	赤褐	30	○	丹塗り
43	3		SF202	土	坏		1.9	3.2	2.0	−	1.8	−	淡褐	100		ミニチュア
43	4		SE301	須	壷	8世紀前半	−	−	−	−	−	−	灰	10		自然釉
43	5		SE301	須	壷		−	−	7.0	−	−	−	灰	10		
43	6		SE301	須	蓋	8世紀前半	(13.4)	(13.9)	−	−	3.2	2.0	灰	50	○	
43	7		SE301	土	坏		8.0	−	3.5	−	2.6	−	赤灰	100		手捏ね
43	8		SE301	土	甕		(15.8)	−	−	−	−	−	褐	10	○	
43	9		SE201	須	鉢		−	−	−	13.9	−	−	灰白	10	○	
43	10		SE201	土	甕		13.4	14.8	−	−	−	−	赤灰	30	○	
43	11		SE201	灰	碗	10世紀後半	(13.6)	−	−	(6.7)	3.6	−	灰白	20	○	
43	12		SE301	灰	碗	9世紀末～10世紀初頭	−	−	−	6.8	−	−	灰	10	○	台付
43	13		SD201	須	坏		−	−	−	(6.6)	−	−	灰	10	○	台付
43	14		SD204	須	壷		(11.3)	−	−	−	−	−	灰	10	○	
43	15		SD204	灰	碗	9世紀末～10世紀初頭	−	−	−	(5.8)	−	−	灰白	10		
43	16		SD206	須	坏	8世紀	−	−	−	(9.4)	−	−	灰	10	○	台付
43	17		SD212	灰	碗	10世紀前半	−	−	−	(7.2)	−	−	灰白	10	○	
43	18		SD213	灰	碗	10世紀前半	−	−	−	(6.6)	−	−	灰白	10	○	
43	19		SD214	灰	碗	10世紀前半	−	−	−	(6.5)	−	−	灰白	10	○	
43	20		SD218	土	坏		(12.1)	−	−	5.0	3.5	−	淡灰	30	○	丹塗り
43	21		SD222	須	蓋	7世紀4四半期	(10.8)	(12.8)	−	−	−	−	灰	40	○	自然釉
43	22		SD222	須	壷		−	−	5.2	−	−	−	灰	10	○	
43	23		SD327	須	坏	7世紀後葉	11.4	−	−	−	−	−	灰	20	○	
43	24		SD328	須	壷		(13.5)	−	−	−	−	−	灰	10	○	自然釉
43	25		SD205		獣足		3.1	3.4	1.2							須恵質
43	26	27	SD329	土	ミニチュア		−	3.2	2.0	−	−	−	黄橙	80		
44	1		SR301	山	碗	12世紀4四半期	(15.9)	−	−	7.2	5.5	−	灰白	60	−	

図番号	図中番号	図版番号	遺構	種別	器種	時期	口径	最大径	底径	高台径	器高	つまみ径	色調	残存率	反転実測	備考
44	2		SR205	須	坏	7世紀4四半期	−	−	−	−	−	−	灰	10	○	
44	3		SR211	土	坏	8世紀前半	(11.0)	−	−	−	−	−	灰白	30	−	
44	4		SR302	須	坏	8世紀中葉	(13.8)	−	−	(9.4)	4.1	−	灰	40	○	
44	5		SR207	灰	碗	10世紀前半	13.4	−	−	6.2	4.6	−	灰白	30	−	
44	6		SR302	土	甕		18.4	−	−	−	−	−			−	
44	7		SR302	須	坏	8世紀前半	−	−	5.2	−	−	−	灰	10	○	
44	8		SR328	須	壷	8世紀前葉	(9.6)	−	−	−	−	−	灰	10	○	自然釉
44	9	26	SR224	土	甕	4世紀前半	12.1	20.7	−	−	−	−	灰褐	70	○	台付
44	10		SX202	土	甕		−	−	−	−	−	−	橙	10	○	
44	11		SX202	土	高坏	7世紀中葉	−	−	(11.4)	−	−	−	橙	10	−	
49	1		SD2	山	碗	12世紀4四半期	−	−	−	9.2	−	−	灰白	10	−	
49	2		SD6	須	坏	6世紀末 ～7世紀初頭	11.6	13.9	−	−	−	−	灰	20	○	
49	3		SD6	須	坏	7世紀2四半期	(6.2)	(10.0)	(4.0)	−	(3.2)	−	灰	25	○	ヘラ記号
49	4		SD6	陶	天目	17世紀前半	−	11.1	−	4.5	−	−	淡黄	20	○	
49	5		SD6	陶	天目	17世紀前半	12.2	−	−	4.9	6.8	−	灰白	20	○	暗褐色釉
49	6		SD6	土	皿	16世紀	9.0	−	4.0	−	2.5	−	黄橙	60	○	手づくね 灯明皿
49	7		SD6	土	皿	16世紀	8.9	−	4.0	−	2.4	−	黄橙	70	−	手づくね
49	8		SD6	土	皿	16世紀	8.9	−	4.0	−	2.5	−	黄橙	80	−	手づくね
49	9		SD6	土	皿	16世紀	9.0	−	5.0	−	2.3	−	黄橙	15	○	灯明皿
49	10		SD6	土	皿	16世紀	8.8	−	3.3	−	2.2	−	橙	90	−	灯明皿
49	11		SD6	陶	鉢	18世紀	32.8	−	−	17.6	9.5	−	灰白	20	−	瀬戸・美濃
49	12		SE1	須	鉢	12世紀4四半期	−	−	−	13.2	−	−	灰	25		大平鉢 常滑産
49	13		SE1	山	碗	12世紀 3～4四半期	−	−	−	7.0	−	−	灰白	40	○	
49	14		SE1	山	碗	13世紀中葉	−	−	−	6.0	−	−	茶灰	10	○	
49	15		SE1	土	甕		(22.8)	−	−	−	−	−	灰白	10	−	
49	16		SE1	須	蓋	7世紀前葉	(11.0)	−	−	−	(3.7)	−	灰白	25		
49	17		SE1	土	皿	16世紀後半 ～17世紀	8.0	−	5.0	−	1.5	−	橙	70	−	
50	1		SF209	土	皿	16世紀	8.0	−	3.6	−	1.9	−	橙	80		灯明皿
50	2	26	SD223	須	蓋	8世紀後葉	16.6	16.8	−	−	4.1	2.4	灰	70	○	
50	3		SD238	土	皿	中世	9.9	−	3.2	−	1.9	−	黄橙	100	−	
50	4		SD238	山	碗	12世紀前半	16.9	−	−	7.3	5.3	−	灰白	100	−	輪花碗 灰釉か
50	5		SD238	山	碗	12世紀後半	−	−	−	7.8	−	−	灰白	40		
50	6		SD238	山	碗	12世紀後半	−	−	−	7.2	−	−	灰白	30	○	
50	7		SD238	山	碗	12世紀後半	−	−	−	8.0	−	−	灰白	30		
50	8		SD238	山	碗	12世紀後半	−	−	−	8.0	−	−	灰白	30		
50	9		SR215	須	蓋	6世紀末 ～7世紀初頭	12.5	−	−	−	3.3	−	暗灰	50	−	自然釉
50	10	26	SR216	須	坏	7世紀2四半期	9.1	11.0	4.0	−	3.9	−	灰	90	−	
50	11		SR215	須	坏	6世紀末 ～7世紀初頭	11.8	15.1	−	−	4.4	−	灰	70	−	TK209
50	12	26	SR216	須	坏	7世紀前葉	9.6	11.7	4.3	−	4.0	−	灰	80	−	
50	13	26	SR216	須	坏	7世紀前葉	9.9	12.0	4.1	−	4.5	−	灰	100	−	ヘラ記号
50	14		SR215	土	蓋		12.6	−	−	−	4.7	−	橙	90		
50	15	26	SR215	土	坏		12.2	−	6.0	−	5.0	−	茶灰	80		
50	16	26	SR216	土	坏		13.6	−	7.0	−	5.2	−	褐灰	90	−	底木葉痕
50	17	26	SR215	土	甕	5世紀後半	17.4	28.7	−	−	−	−	黄橙	30	○	
50	18		SD242	須	坏	8世紀3四半期	−	−	−	9.2	−	−	青灰	40	−	
50	19		SD239	土	坏	8世紀後葉	(12.4)	−	8.8	−	3.4	−	橙	70	−	丹塗り

図番号	図中番号	図版番号	遺構	種別	器種	時期	口径	最大径	底径	高台径	器高	つまみ径	色調	残存率	反転実測	備考
50	20		SD239	須	蓋	7世紀3四半期	(9.6)	−	−	−	(3.6)	−	灰白	30	○	
51	1		包含層	須	壷	7世紀	−	17.3	−	−	−	−	灰白	40	○	自然釉
51	2		包含層	須	坏	7世紀2四半期	8.6	10.6	−	−	(3.4)	−	灰白	30	−	
51	3		包含層	須	坏	7世紀 2～3四半期	7.2	9.5	4.3	−	3.1	−	灰	60	○	
51	4		包含層	須	坏	7世紀2四半期	8.5	10.5	4.2	−	2.9	−	灰白	50	−	焼成不良
51	5		包含層	須	蓋	7世紀2四半期	(9.8)	−	−	−	(2.9)	−	灰	25	○	
51	6		包含層	山	碗		(9.4)	−	(4.9)	2.5	−	−	灰白	40	○	自然釉
51	7		包含層	青	碗	13～14世紀	−	−	−	(5.4)	−	−	灰白	10	−	
51	8		包含層	灰	坏	9世紀後半	17.2	−	−	8.1	5.3	−	灰白	20	○	自然釉K90
51	9		包含層	陶	擂鉢	18世紀	31.5	−	13.7	−	14.5	−	褐	20	○	瀬戸・美濃
51	10		包含層	土	坏	7世紀	11.2	−	3.5	−	4.2	−	黄褐	60	−	
51	11		包含層	土	高盤	8世紀後半	−	−	11.9	−	−	−	橙	50	−	丹塗り
51	12		包含層	土	壷		4.0	4.3	−	−	4.0	−	橙	100	−	手捏ね
51	13		包含層	土	鉢		5.5	−	−	−	−	−	黄褐	40	○	手捏ね
51	14		包含層	土	鉢？		5.1	−	−	−	−	−	橙	20	○	手捏ね
51	15		包含層	土	皿	16世紀	9.7	−	6.6	−	2.1	−	黄橙	60	○	灯明皿
51	16		包含層	土	皿	16世紀	9.5	−	−	−	2.6	−	橙	100	−	灯明皿
51	17		包含層	土	皿	16世紀	9.1	−	6.8	−	2.2	−	黄橙	95	−	灯明皿
51	18		包含層	土	皿	16世紀	9.0	−	7.3	−	2.3	−	黄橙	60	−	灯明皿
51	19		包含層	土	皿	16世紀	9.1	−	7.4	−	2.3	−	黄橙	80	−	灯明皿
51	20		包含層	土	皿	16世紀	9.8	−	7.5	−	2.7	−	黄橙	70	−	灯明皿
51	21		包含層	土	皿	16世紀	9.5	−	6.7	−	2.2	−	橙	60	−	灯明皿
51	22		包含層	土	皿	16世紀	9.6	−	6.3	−	2.5	−	黄橙	90	−	灯明皿
52	1		包含層	土	甕	4世紀	19.0	−	−	−	−	−	褐	70	−	
52	2		包含層	須	坏	7世紀中葉	12.0	−	−	4.0	4.3	−	灰	70	○	
52	3		包含層	須	坏	8世紀前葉	(12.6)	−	3.4	−	4.0	−	灰	30	○	
52	4		包含層	須	蓋	7世紀 3～4四半期	10.3	12.3	−	−	3.4	2.2	灰白	100	−	自然釉
52	5		包含層	須	蓋	7世紀4四半期	(13.3)	(13.7)	−	−	2.7	3.2	黒灰	40	○	
52	6		包含層	須	蓋	8世紀後葉	(18.6)	(18.8)	−	−	−	−	灰	20	○	
52	7		包含層	須	蓋	8世紀後葉										
52	8		包含層	須	壷	8世紀後葉	−	(16.0)	−	−	−	−	灰	10	○	
52	9		包含層	土	高盤	8世紀後葉 ～9世紀初頭	−	−	−	13.6	−	−	淡褐	35		丹塗り
52	10		包含層	土	台付鉢	9世紀前葉 ～中葉	(20.2)	−	−	8.6	5.8	−	淡褐	40	○	丹塗り
52	11		包含層	山	碗	10世紀前半	13.6	−	−	6.4	4.6	−	灰白	50		
52	12		包含層	灰	碗	10世紀前半	−	−	2.9	−	−	−	灰白	10	○	
52	13		包含層	灰	碗	10世紀前半	−	−	−	6.1	−	−	淡褐	10	○	自然釉
52	14		包含層	土	甑		8.1	−	3.1	−	5.4	−	淡褐	95		ミニチュア 底部穿孔
52	15		包含層	土	坏		9	−	4.8	−	4.6	−	赤灰	30	○	手捏ね
52	16		包含層		獣足		4.4	1	1	−	−	−	淡褐	−		土師質
52	17		包含層		獣足		3.2	2.1	1	−	−	−	灰	−		須恵質
52	18		包含層		尾？		4.4	1.7	1.6	−	−	−	淡褐	−		土師質
52	19		包含層		紡錘車		3.5	3.5	1.5	−	−	−	濃紺	100		石材不明

種別の略号　須：須恵器　土：土師器　灰：灰釉陶器　山：山茶碗　陶：陶器　青：青磁

写　真　図　版

図版1

恒武遺跡群周辺地形（北東から）

図版2

2 次調査 2 区奈良・平安時代面全景

土層断面（２次調査４区）

図版4

SD326遺物出土状況

SD326出土遺物

図版6

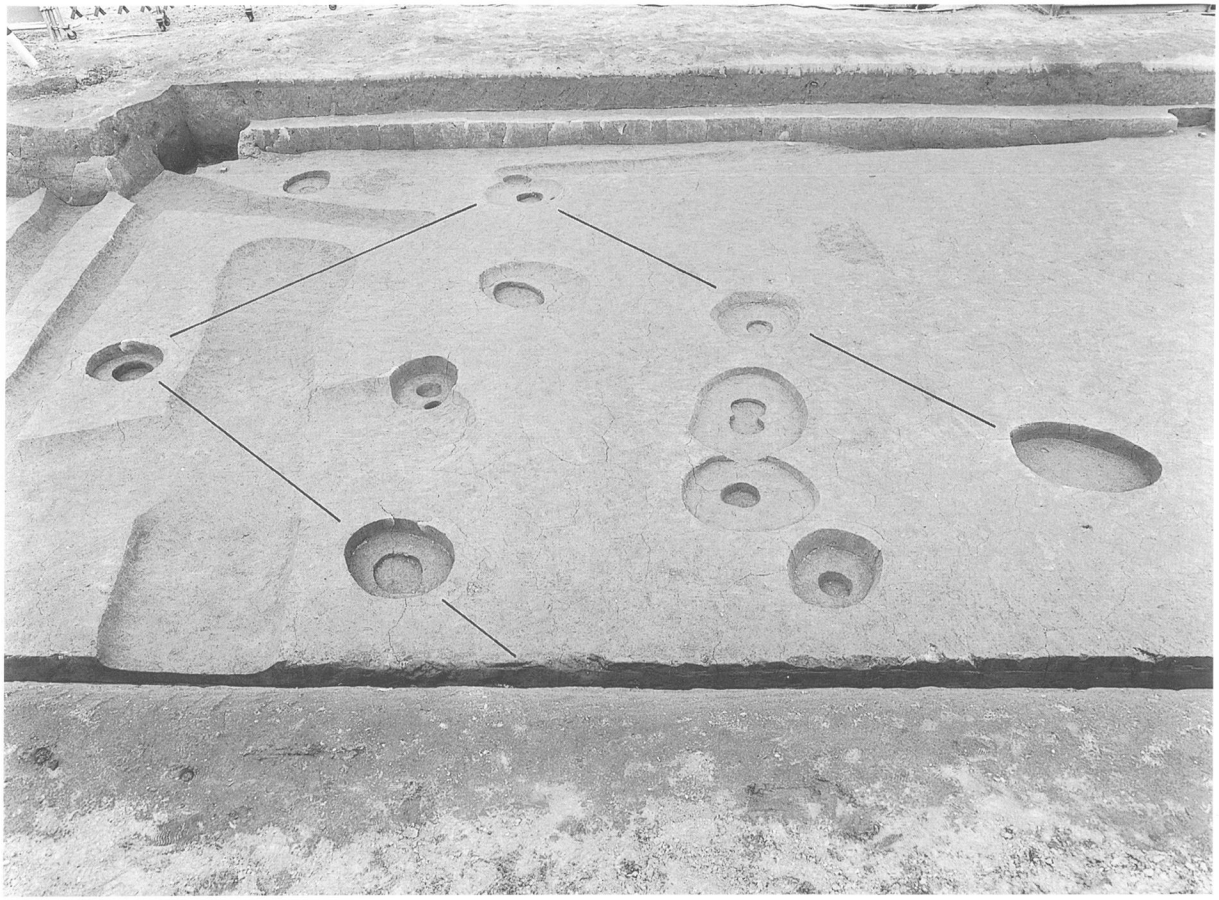
SR213出土遺物

SR213出土墨書土器

SB301出土遺物

図版8

SR202～SR204出土遺物



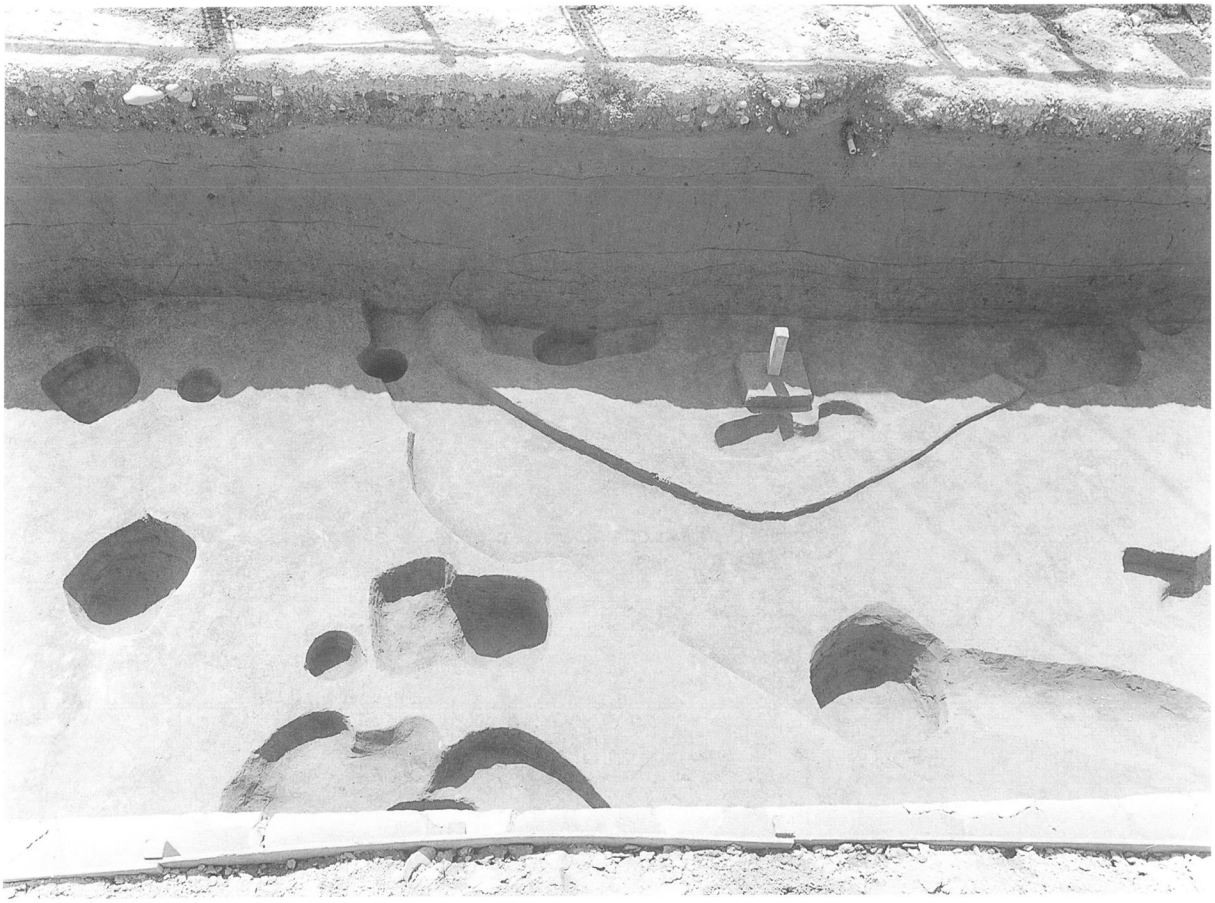
掘立柱建物跡SH201

掘立柱建物跡SH301

図版10

SE301井戸枠検出状況

SB401完掘状況

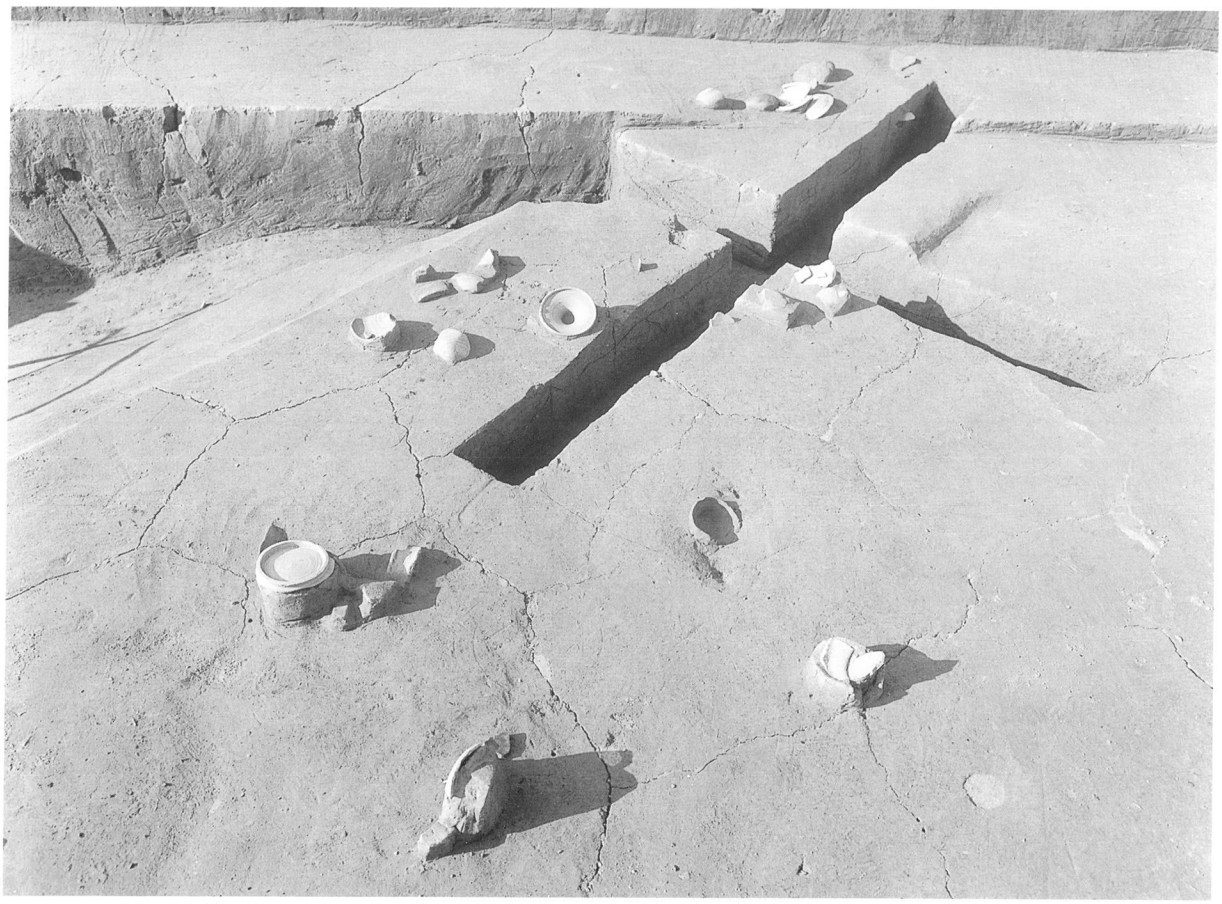


SB402・403全体写真

SB402竈内遺物出土状況

図版12

SB301全体写真



SB301遺物出土状況

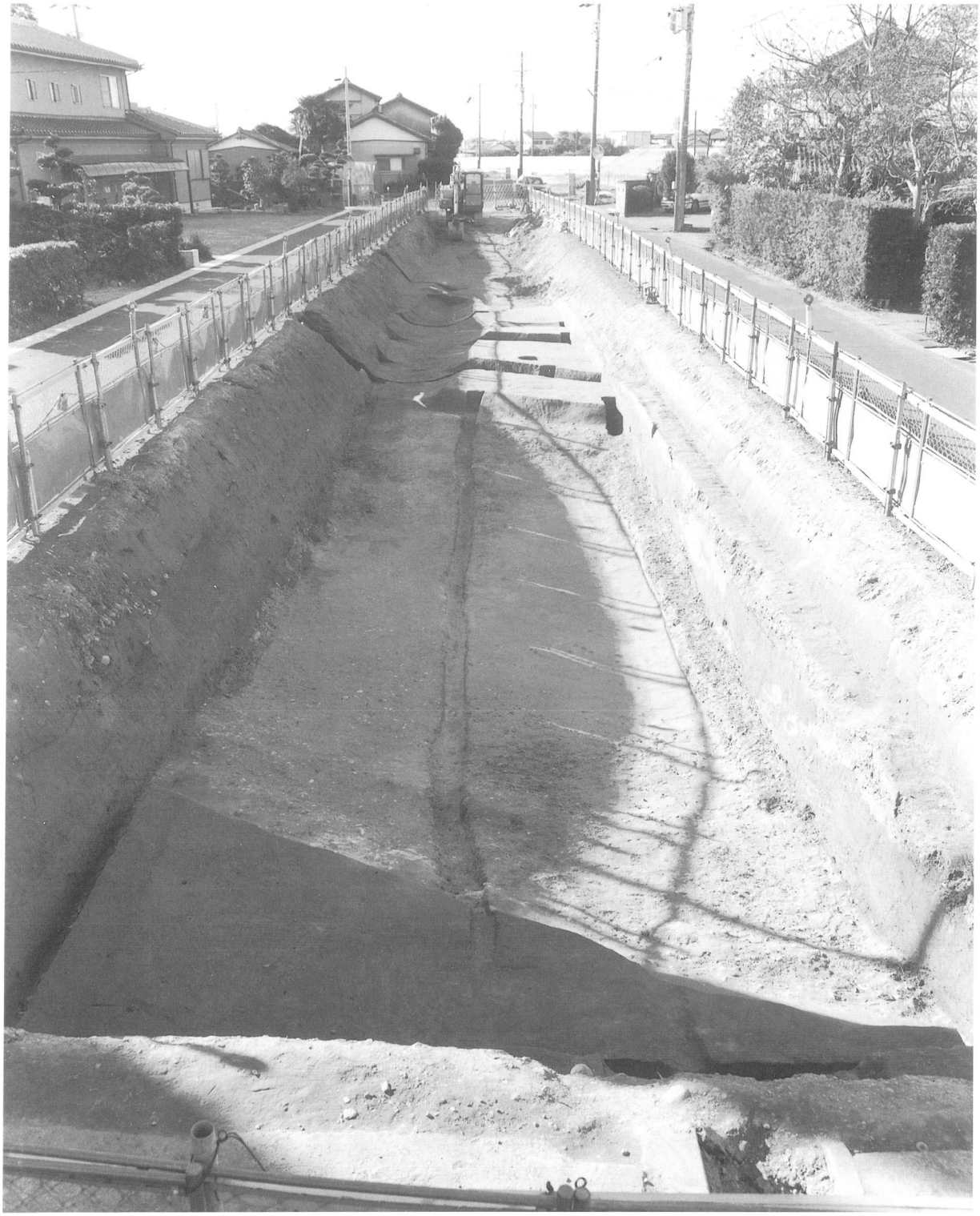
SB302全体写真

SB302遺物出土状況

図版14

2 次調査 3 区奈良・平安時代面全景

SR202内遺物出土状況



1次調査２区奈良・平安時代面全景

図版16

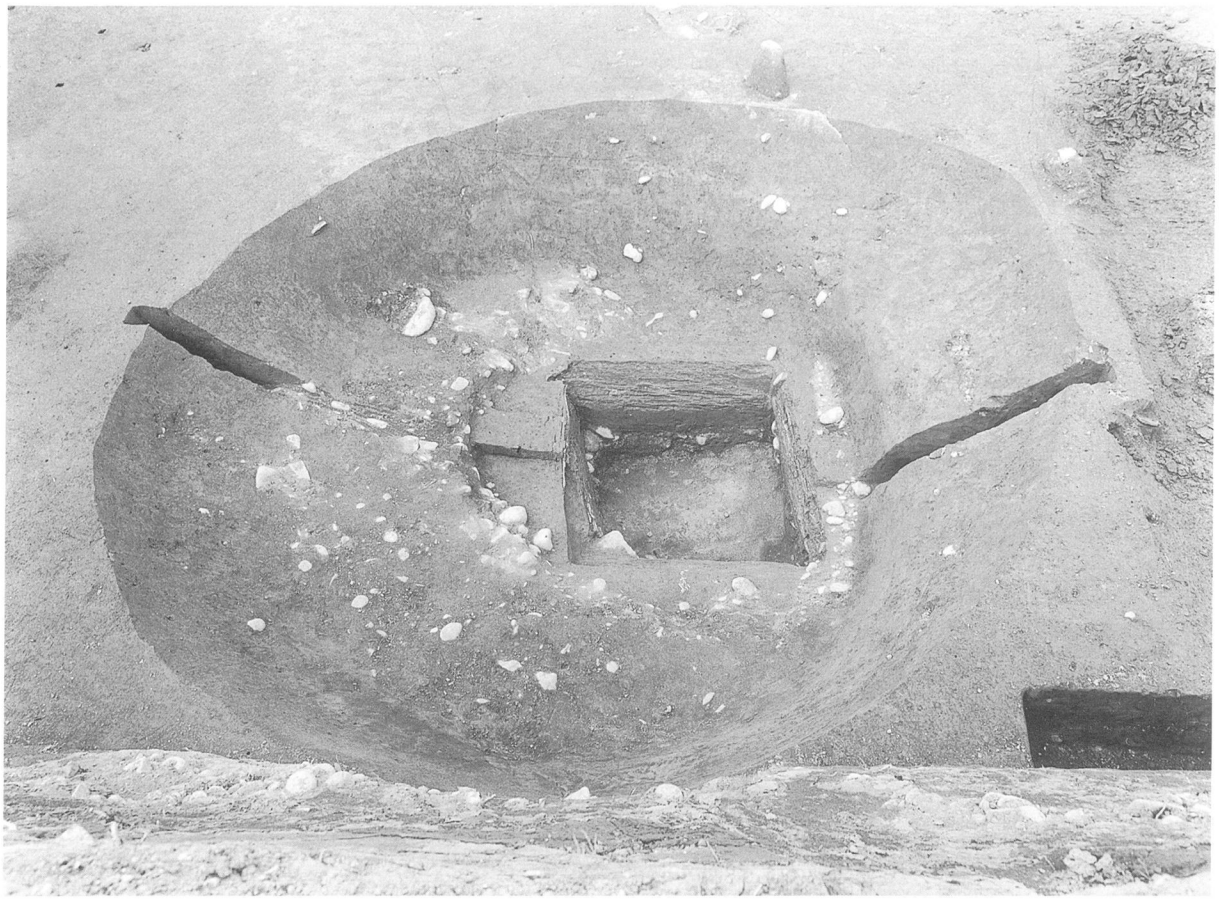
1 次調査 1 区検出小規模溝群

SR213全景

SR213遺物出土状況 1

SR213遺物出土状況 2

図版18



SE1全景

SE1遺物出土状況

2 次調査 1 区全景

SR223全景

図版20

SR220～222全景

2 次調査 1 区遺物出土状況

SR215出土遺物 1

SR215出土遺物 2

図版22

SB402 出土遺物

SB302出土遺物

SR213出土須恵器

図版24

SR213出土土師器

9—4

9—5

11—14

15—2

11—15

15—1

15—7

古墳時代後期出土遺物 1

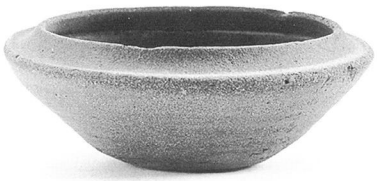
図版26

50－2

50－10

50－12

50－13



50－15

50－16

50－17

44－9

古墳時代後期出土遺物 2

32－30

32－31～33、43－26

32－3

32－21

20－2

20－4

20－7

23－4

23－8

SB303～305、SR202出土遺物

図版28

27－1

27－2

27－3

27－4

27－9

27－11

27－12

27－16

27－17

27－24

SD326出土遺物

36－1

36－5

36－7

36－10

36－14

36－16

37－8

37－10

37－12

39－19

SR213出土遺物 1

図版30

41－1

41－2

40－2

40－4

40－1

40－3

SR213出土遺物 2

37—1

41—7

38—18

41—6

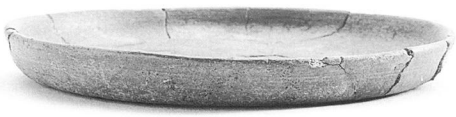
41—4

42—8

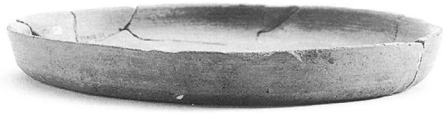
SR213出土遺物 3

図版32

39－1



39－2



39－10

39－14

39－15

38－8

33－12

33－25

33－13

SR213出土遺物４、SR203、204出土遺物

報告書抄録

ふりがな	つねたけとうかくいせき
書名	恒武東覚遺跡
副書名	平成11・14・15年度（一）浜松袋井線地方特定道路改築工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第148集
編著者名	富樫孝志
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
発行機関	〒422－8002　静岡県静岡市谷田23－20
発行年月日	平成16年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （世界測地系）	東経 （世界測地系）	調査期間	調査面積	調査原因
恒武東覚遺跡 （つねたけとうかくいせき）	静岡県浜松市 （しずおかけんはままつし） 恒武町字東覚 （つねたけちょうあざとうかく） 1094ほか	020299	11	34度 45分 48秒	137度 47分 47秒	19991101 ～ 20000331 20030227 ～ 20031031	1,340m²	県道浜松 袋井線 道路改築 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記記事
恒武東覚遺跡	集落跡	古墳時代後期	竪穴住居跡4軒 溝・自然流路11本 性格不明遺構3基	須恵器（含墨書） 土師器（含墨書） 灰釉陶器	7世紀後半～8世紀 初頭の一括遺物 官衙関連遺物：墨書
		奈良・平安時代	掘立柱建物跡2棟 竪穴住居跡4軒 井戸跡2基 溝・自然流路 31本以上 柱穴・土坑 3基以上	獣足、馬形土製品 ミニチュア土器 土錘、紡錘車 山茶碗、小皿	土器、転用硯、丹塗 り土器、祭祀関連土 製品
		鎌倉時代以降	井戸跡1基 溝・自然流路10本 土坑3基 性格不明遺構1基	天目茶碗	

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第148集

恒武東覚遺跡

平成11・14・15年度(一)浜松袋井線地方特定道路
改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　平成16年３月25日

編集発行　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422－8002
静岡県静岡市谷田23－20
電話　054－262－4261(代表)

印刷所　株式会社　開明堂
〒430－0904
静岡県浜松市中沢町1－1
電話　053－471－6231(代表)